茨城県教育財団文化財調査報告第234集

中内西ノ妻遺跡
（なかうちにしのつま）

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成17年3月

国土交通省　常総国道事務所
財団法人　茨城県教育財団

序

首都圏中央連絡自動車道の建設は，首都圏の中核都市を相互に結ぶことにより地域の核となる都市群を形成し，さらにこれらの地域における交通の円滑化を図り，地域の自立性を高める拠点となる都市整備を目的として計画されたものであります。

この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である中内西ノ妻遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は，国土交通省関東地方整備局常総国道事務所から埋蔵文化財の発掘調査について委託を受け，平成15年４月から同年８月まで発掘調査を実施しました。

本書は，中内西ノ妻遺跡の調査成果を収録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である国土交通省関東地方整備局常総国道事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，つくば市教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し感謝申し上げます。

平成17年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　齋　藤　佳　郎

例　　言

1　本書は，国土交通省関東地方整備局常総国道事務所の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成15年度に発掘調査を実施した茨城県つくば市大字中内字馬洗場135番地ほかに所在する，中内西ノ妻（なかうちにしのつま）遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調　査　　平成15年４月１日～平成15年８月31日

整　理　　平成16年４月１日～平成16年７月31日

3　発掘調査は，調査課長川井正一のもと，以下の者が担当した。

首席調査員兼第３班長	村上　和彦	平成15年４月１日～平成15年８月31日
主任調査員	後藤　孝行	平成15年４月１日～平成15年８月31日
調査員	小林健太郎	平成15年４月１日～平成15年８月31日

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理第二課長鶴見貞雄のもと，主任調査員後藤孝行が担当した。

凡　　例

1　地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，X＝+5,200m，Y＝+24,600mの交点を基準点（A1a1）とした。なお，この原点は，世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ１，２，３…とし，「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3…0とし，名称は，大調査区の名称を冠して「Ａ１a1区」，「Ｂ２b2区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　　ＳＩ－住居跡　ＳＫ－土坑　ＳＤ－溝跡　ＳＥ－井戸跡　Ｐ－柱穴　ＴＰ－陥し穴

遺物　　ＴＰ－拓本記録土器　ＤＰ－土製品　Ｑ－石器・石製品　Ｍ－古銭　Ｇ－ガラス製品

土層　　Ｋ－撹乱

3　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

⑴　遺構全体図は500分の１，遺構は60分の１，または80分の１に縮小して掲載した。

⑵　遺物は原則として３分の１の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合もある。

⑶　遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

焼土・赤彩・施釉　　炉

竈材・粘土・炭化材・炭化物・黒色処理　　煤・油煙

●土器　○土製品　□石器・石製品　☆ガラス製品　-·-·-·-硬化面

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺物観察表・一覧表の表記については，次のとおりである。

⑴　計測値の（　）内の数値は現存値を，［　］内の数値は推定値を示した。計測値の単位は，㎝，ｇで示した。

⑵　備考の欄は，残存率及びその他必要と思われる事項を記した。

6　「主軸」は，竈を持つ竪穴住居跡については竈を通る軸線とし，他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10°－E）。

抄　　録

ふ り が な	なかうちにし の つまいせき
書　　名	中内西ノ妻遺跡
副 書 名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	Ⅷ
シ リ ー ズ 名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第234集
編 著 者 名	後藤孝行
編 集 機 関	財団法人　茨城県教育財団
所　在　地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　　TEL　029(225)6587
発 行 機 関	財団法人　茨城県教育財団
所　在　地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　　TEL　029(225)6587
発 行 年 月 日	2005（平成17）年３月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
中内西ノ妻遺跡 （なかうちにしのつまいせき）	茨城県つくば市（いばらきけんつくばし） 大字中内字馬洗場（おおあざなかうちあざまらいば） 135番地ほか	084433 ― 075	36度 02分 42秒	140度 06分 35秒	19 ～ 22m	20030401 ～ 20030831	9,393㎡	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道事業（茨城県）に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中内西ノ妻遺跡	集落跡	古　　墳	竪穴住居跡　11軒 土坑　10基 溝跡　１条	土師器（坏・椀・高坏・器台・坩・甕・壺・甑），ガラス製品（小玉），石製品（匂玉・臼玉・双孔円板・紡錘車）	古墳時代中期前葉の集落跡を中心とする旧石器時代から近世の複合遺跡である。直線的に配列された縄文時代の陥し穴15基や土を固めて出入り口用の階段を付設している古墳時代中期の竪穴住居跡を確認した。
		平　　安	竪穴住居跡　９軒	土師器（坏・高台付坏・甕・壺・甑・椀），須恵器（坏・盤・蓋・甕）	
	墓地跡	近　　世	墓壙　２基	古銭	
	その他	旧 石 器		石器（尖頭器）	
		縄　　文	陥し穴　17基	縄文土器片（深鉢） 石器（石鏃）	
		時期不明	土坑　85基 墓壙　３基 溝跡　３条		

目　　次

序
例　言
凡　例
抄　録
目　次
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の成果 …… 7
　第１節　調査の概要 …… 7
　第２節　基本層序 …… 7
　第３節　遺構と遺物 …… 9
　　１　縄文時代の陥し穴と遺物 …… 9
　　２　古墳時代の遺構と遺物 …… 19
　　⑴　竪穴住居跡 …… 19
　　⑵　土坑 …… 45
　　⑶　溝跡 …… 51
　　３　平安時代の竪穴住居跡と遺物 …… 53
　　４　近世の墓壙と遺物 …… 70
　　５　その他の遺構と遺物 …… 72
　　⑴　墓壙 …… 72
　　⑵　溝跡 …… 74
　　⑶　土坑 …… 75
　　⑷　遺構外出土遺物 …… 84
　第４節　まとめ …… 92
写真図版

第1章　調　査　経　緯

第１節　調査に至る経緯

国土交通省は，首都圏全体の発展と交通の円滑化を図るために，一般国道468号首都圏中央連絡自動車道の建設を進めている。

平成13年10月17日，建設省（現国土交通省）関東地方整備局常総国道事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内における埋蔵文化財の有無及び取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は，平成14年３月11～13日に現地踏査を，平成14年11月５・６・８・12日に試掘調査を実施し，遺跡の所在を確認した。平成14年11月21日，茨城県教育委員会教育長は，国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに，事業地内に中内西ノ妻遺跡が所在する旨回答した。

平成15年１月９日，国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，文化財保護法第57条の３第１項の規定に基づき，土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は，計画変更が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると判断し，平成15年１月29日，国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成15年１月31日，国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成15年２月５日，茨城県教育委員会教育長は，国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに，中内西ノ妻遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

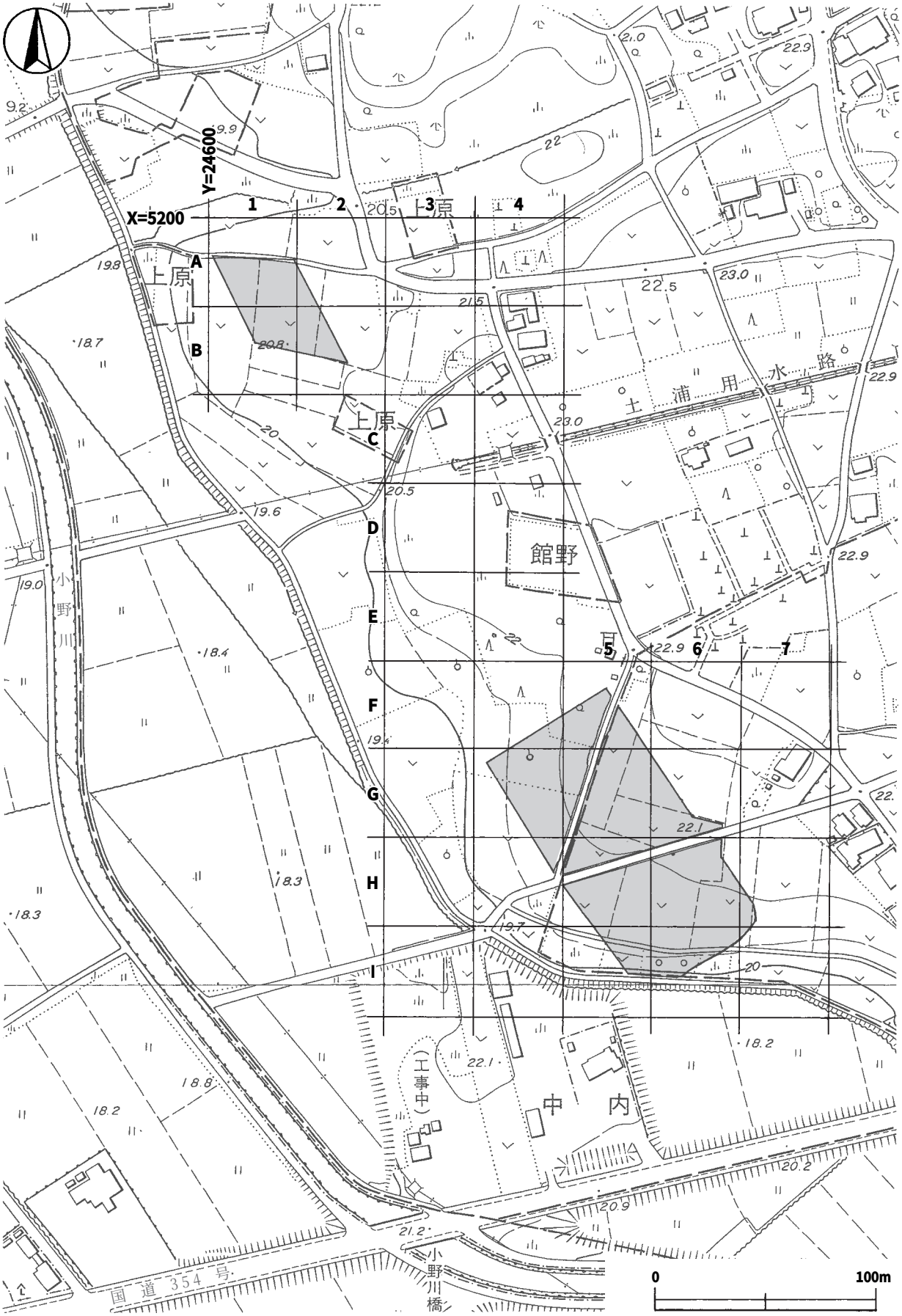
財団法人茨城県教育財団は，国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成15年４月１日から平成15年８月31日まで中内西ノ妻遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査経過

中内西ノ妻遺跡の調査は，平成15年４月１日から同年８月31日まで実施した。

その概要を表で記載する。

期間／工程	４　月	５　月	６　月	７　月	８　月
調査準備 表土除去 遺構確認	■	■			
遺構調査		■	■	■	■
遺物洗浄及び 注記作業		■	■	■	■
補足調査 撤収					■



第1図　中内西ノ妻遺跡調査区設定図

第2章　位 置 と 環 境

第１節　地理的環境

中内西ノ妻遺跡は，茨城県つくば市大字中内字馬洗場135番地ほかに所在し，小野川左岸の筑波稲敷台地上に立地している。

この台地は，筑波山を中心とする筑波山塊と接し，東側を東流して霞ヶ浦に流入する桜川と西側を南流する小貝川によって挟まれた標高20～25mほどの平坦な地形である。台地は花室川，蓮沼川，小野川などの中小河川の開析により，浅い谷津が樹枝状に発達している。地質的には，貝化石を産する海成の砂層である成田層を基盤として，その上に竜ヶ崎層と呼ばれる斜交層理の顕著な砂層・砂礫層，さらに常総粘土層と呼ばれる泥質粘土層（0.3～5.0m），褐色の関東ローム層（0.5～2.5m）が連続して堆積し，最上部は腐食土層となっている[1)]。

当遺跡は，小野川の開析によって形成された台地縁辺部（南西側）に立地し，台地の標高は19～22mである。台地は主に宅地・畑地・平地林として利用され，周辺の低地は水田として利用されている。遺跡の現況は，畑地である。

第２節　歴史的環境

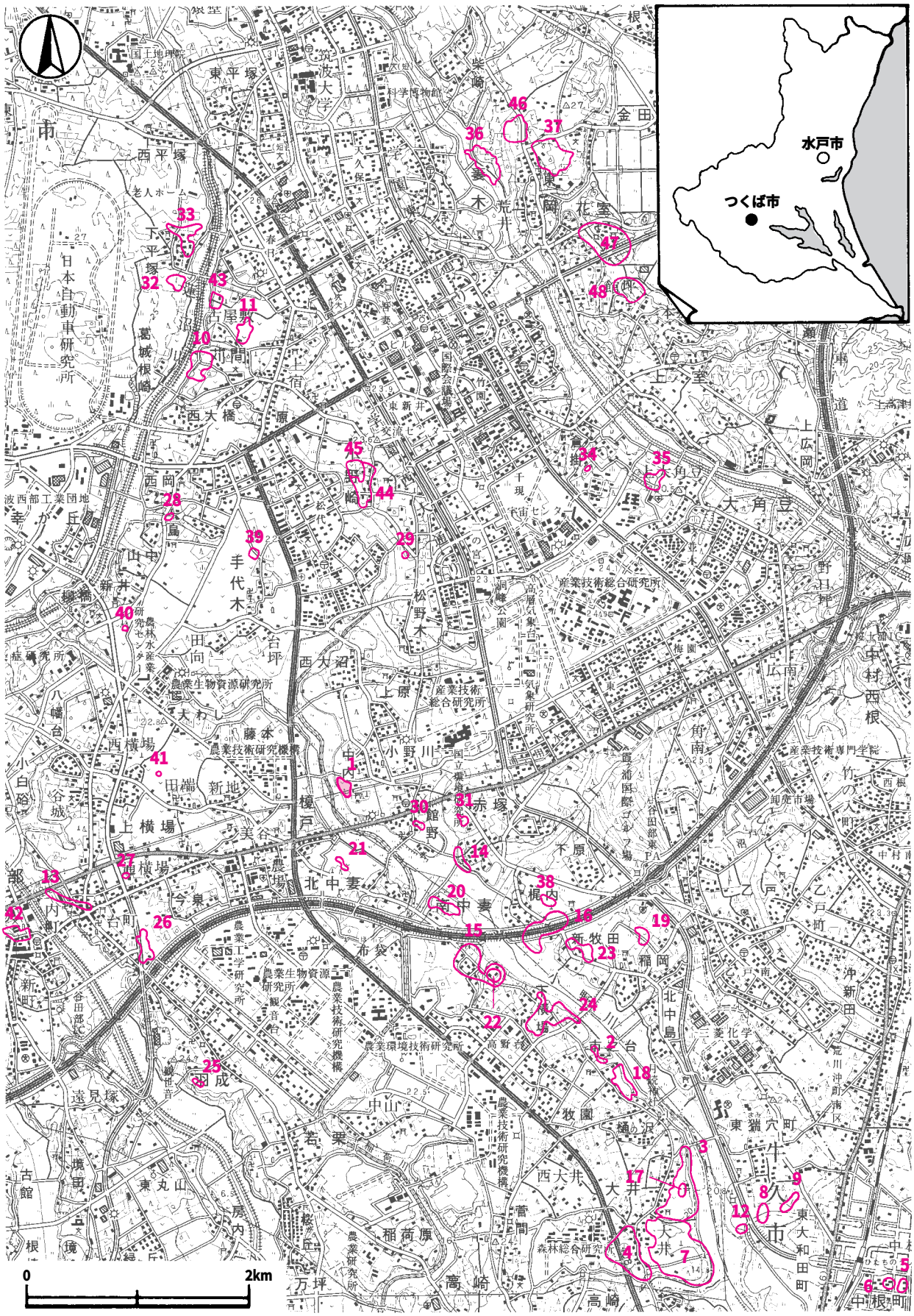
中内西ノ妻遺跡の所在する地域は，小野川水系によって開析された台地上に位置し，多くの遺跡が所在している。ここでは，主に小野川流域の遺跡について述べる。

旧石器時代の遺跡は，小野川を望む台地縁辺部に点在している。市ノ台屋敷遺跡〈２〉からは，角錐状石器が出土している[2)]。下大井遺跡〈３〉からは，ナイフ形石器，剥片が出土しており，石器製作跡の可能性が指摘されている[3)]。五十塚古墳群〈４〉では，第５号墳の前方周溝内から刃器が出土している[4)]。また，牛久市に所在するヤツノ上遺跡〈５〉からは角錐状石器や掻器が[5)]，中久喜遺跡〈６〉からは，ナイフ形石器，剥片などが出土している[6)]。

縄文時代には，小野川の台地上に集落が形成されるようになる。右岸には下大井遺跡，大井遺跡〈７〉が，左岸には牛久市の馬場遺跡〈８〉，東山遺跡〈９〉などが所在している。東山遺跡では７基の陥し穴が検出されている[7)]。

弥生時代の遺跡は小野川流域では確認されておらず，当遺跡の北方約4.2kmに位置する苅間神田遺跡〈10〉と苅間六十目遺跡〈11〉が確認されているだけである。

古墳時代になると，遺跡数は増加する。当遺跡周辺の古墳時代の集落としては，東山遺跡，馬場遺跡，行人田遺跡〈12〉などが所在している。行人田遺跡は前期[8)]，東山遺跡は中期[9)]，馬場遺跡は中期から後期[10)] にかけての集落跡である。また，当財団により調査された下大井遺跡は，中期から後期にかけての集落跡[11)]，市ノ台屋敷遺跡は，中期の集落跡[12)] であることがそれぞれ確認されている。この時期は沖積低地を利用した農耕を中心に生活が営まれたと考えられ，集落が沖積低地に面した台地縁辺部に立地することが多い。また，小野川及びその周辺には多くの古墳群も確認されている。当遺跡の西方には，谷田部台町古墳群〈13〉が所在している。南方には赤塚駒形古墳群〈14〉，下横場古墳群〈15〉があり，二重の堀をもつ居館が確認された梶内向山遺跡[13)]〈16〉との関連が推測される。さらに，その下流域には下大井古墳群〈17〉，五十塚古墳群があり，五十塚古



第２図　中内西ノ妻遺跡周辺遺跡分布図

表１　中内西ノ妻遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
①	中内西ノ妻遺跡		○		○	○		○	25	羽成谷津台遺跡				○	○		
2	市ノ台屋敷遺跡	○			○		○	○	26	谷田部中塚遺跡		○				○	○
3	下大井遺跡	○	○		○	○	○	○	27	上横場善正遺跡		○				○	○
4	五十塚古墳群				○				28	西岡前山遺跡		○					
5	ヤツノ上遺跡	○	○		○	○	○		29	小野崎遺跡		○		○			
6	中久喜遺跡	○			○	○			30	館野久保遺跡				○			○
7	大井遺跡	○	○		○	○	○	○	31	赤塚八木遺跡				○			
8	馬場遺跡		○		○	○		○	32	下平塚堂所遺跡				○	○		○
9	東山遺跡		○		○	○			33	下平塚蕪木台遺跡				○	○		○
10	苅間神田遺跡	○	○	○	○	○	○	○	34	倉掛遺跡		○					
11	苅間六十目遺跡			○	○	○	○	○	35	大角豆代畑遺跡				○		○	○
12	行人田遺跡				○	○		○	36	東岡中原遺跡	○	○			○	○	○
13	谷田部台町古墳群				○				37	金田西坪Ｂ遺跡		○		○	○		
14	赤塚駒形古墳群				○				38	赤塚原前遺跡						○	○
15	下横場古墳群				○				39	手代木鷲ノ宮遺跡						○	○
16	梶内向山遺跡		○		○	○	○	○	40	新井萩塚山塚						○	○
17	下大井古墳群				○				41	上横場一信塚		○				○	○
18	樋ノ沢久保遺跡	○	○		○		○	○	42	谷田部城跡						○	○
19	稲岡遺跡	○					○	○	43	苅間城跡						○	○
20	南中妻新田後遺跡				○	○		○	44	小野崎宿遺跡						○	○
21	榎戸大境遺跡		○				○	○	45	小野崎館跡						○	○
22	下横場遺跡				○				46	九重東岡廃寺					○	○	○
23	新牧田遺跡				○				47	花室城跡		○	○	○	○	○	○
24	下横場南の前遺跡				○	○		○	48	上ノ室城跡		○			○	○	○

墳群は前方後円墳２基，円墳９基以上で構成されていることが確認されている[14]。

奈良・平安時代の遺跡は，古墳時代に比べると少なく，小野川流域では，梶内向山遺跡，下大井遺跡，大井遺跡，ヤツノ上遺跡，中久喜遺跡などが確認されているだけである。

中世以降で確認されている遺跡は，城郭跡や集落跡，墓跡であり，台地の縁辺部に位置している。下大井遺跡からは，中世の塚と土壙墓が１基ずつ検出され，陶器・土師質土器・古銭などが出土している[15]。当財団が発掘調査した樋（ひ）の沢久保（さわくぼ）遺跡〈18〉は近世を中心とした屋敷跡[16]と考えられており，また，稲岡（いなおか）遺跡〈19〉は中世末期から近世初期にかけての墓域であることが確認されている[17]。

※文中の〈　〉内の番号は，表１，第２図中の該当番号と同じである。

註

1）日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質３　関東地方』共立出版　1986年10月

2）島田和宏「市ノ台屋敷遺跡　一般国道６号牛久土浦バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第198集　2003年３月

3）川津法伸「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書１　下大井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第171集　2001年３月

4）茎崎町史編さん委員会『茎崎町史』茎崎町　1994年３月

5）小高五十二「牛久市北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第81集　1993年３月

6）荒井保雄「牛久市北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第86集　1993年３月

7）松浦　敏「牛久市北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）東山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第101集　1995年９月

8）白田正子「牛久市北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）馬場遺跡・行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第106集　1996年３月

9）註７）に同じ

10）註８）に同じ

11）註３）に同じ

12）註２）に同じ

13）川村満博，島田和宏「梶内向山遺跡　一般国道468号首都圏中央連絡自動車道（圏央道）及び高速自動車国道常磐自動車道つくばジャンクション（仮称）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第199集　2003年３月

14）註４）に同じ

15）註３）に同じ

16）茂木悦男「樋の沢久保遺跡　一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書２」『茨城県教育財団文化財調査報告』第186集　2002年３月

17）茂木悦男「稲岡遺跡　一般国道６号牛久土浦バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第187集　2002年３月

参考文献

・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編，地図編）』茨城県教育委員会　2001年３月

第3章　調　査　の　成　果

第１節　調査の概要

中内西ノ妻遺跡は，つくば市の南東部，小野川左岸の標高19～22mの台地縁辺部に立地している，古墳時代中期を中心とした旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。調査区域は，土浦用水を挟んで南側と北側に分かれており，便宜的に南側を調査Ⅰ区，北側を調査Ⅱ区とした。調査区域の現状は畑地であり，調査対象面積は9,393㎡である。

今回の調査によって，縄文時代の陥し穴17基，古墳時代の竪穴住居跡11軒・土坑10基・溝跡１条，平安時代の竪穴住居跡９軒，近世の墓壙２基，時期不明の土坑85基，墓壙３基，溝跡３条などが確認された。遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20㎝）に25箱ほど出土しており，遺物の大半は古墳時代のものである。主な出土遺物は，縄文土器片，土師器（坏・高台付坏・高坏・甕・甑・壺・椀・坩），須恵器（坏・盤・甕・蓋），石器（尖頭器・石鏃），石製品（勾玉・臼玉・紡錘車・双孔円板），ガラス製品（小玉），古銭などである。

第２節　基本層序

基本層序を確認するテストピットは，調査Ⅰ区のＦ５h8区と調査Ⅱ区のＡ１g3に設置した。地表面の標高はⅠ区が23.7m，Ⅱ区が20.2mであり，地表面からⅠ区は２m，Ⅱ区は1.3mほどそれぞれ掘削し，第３図のような堆積状況を確認した。以下，テストピットの観察から層序について記述する。

調査Ⅰ区

第１層は黒褐色の耕作土で，ローム粒子を微量含む。厚さは17～27㎝である。

第２層は褐色のソフトローム層で，粘性・締まりともにやや弱い。厚さは７㎝である。

第３層は褐色のソフトローム層で，粘性は普通であるが締まりはやや弱い。姶良Ｔｎ火山灰を含むと考えられる。厚さは５～17㎝である。

第４層は暗褐色のソフトローム層で，第２黒色帯に相当すると考えられ，粘性・締まりともに普通である。厚さは15～22㎝である。

第５層は黒色粒子と赤色粒子を微量含む明褐色のハードローム層で，粘性・締まりともに普通である。厚さは７～33㎝である。

第６層は鈍い褐色のハードローム層で，粘性は強く，締まりは普通である。厚さは18～55㎝である。

第７層は赤色粒子を微量含む橙色のハードローム層で，粘性は強く，締まりは普通である。厚さは14～40㎝である。

第８層は黒色粒子を微量含む鈍い褐色のハードローム層で，粘性・締まりはともに強い。厚さは20～35㎝である。

第９層は黒色粒子と白色粘土粒子を少量，褐色粘土粒子を中量含む鈍い褐色の粘土層であり，粘性・締まりはともに強い。厚さは15～25㎝である。

第10層は褐灰色の粘土層で常総粘土層と考えられる。層厚は未掘のため確認できなかった。

なお，遺構は，第２層及び第３層上面で確認した。

調査Ⅱ区

第１層はローム粒子を微量含む黒褐色の耕作土である。厚さは15～22㎝である。

第２層は褐色のソフトローム層で，姶良Ｔｎ火山灰を含むと考えられ，粘性は普通であるが締まりはやや弱い。調査Ⅰ区の第３層に対応すると考えられる。厚さは10～33㎝である。

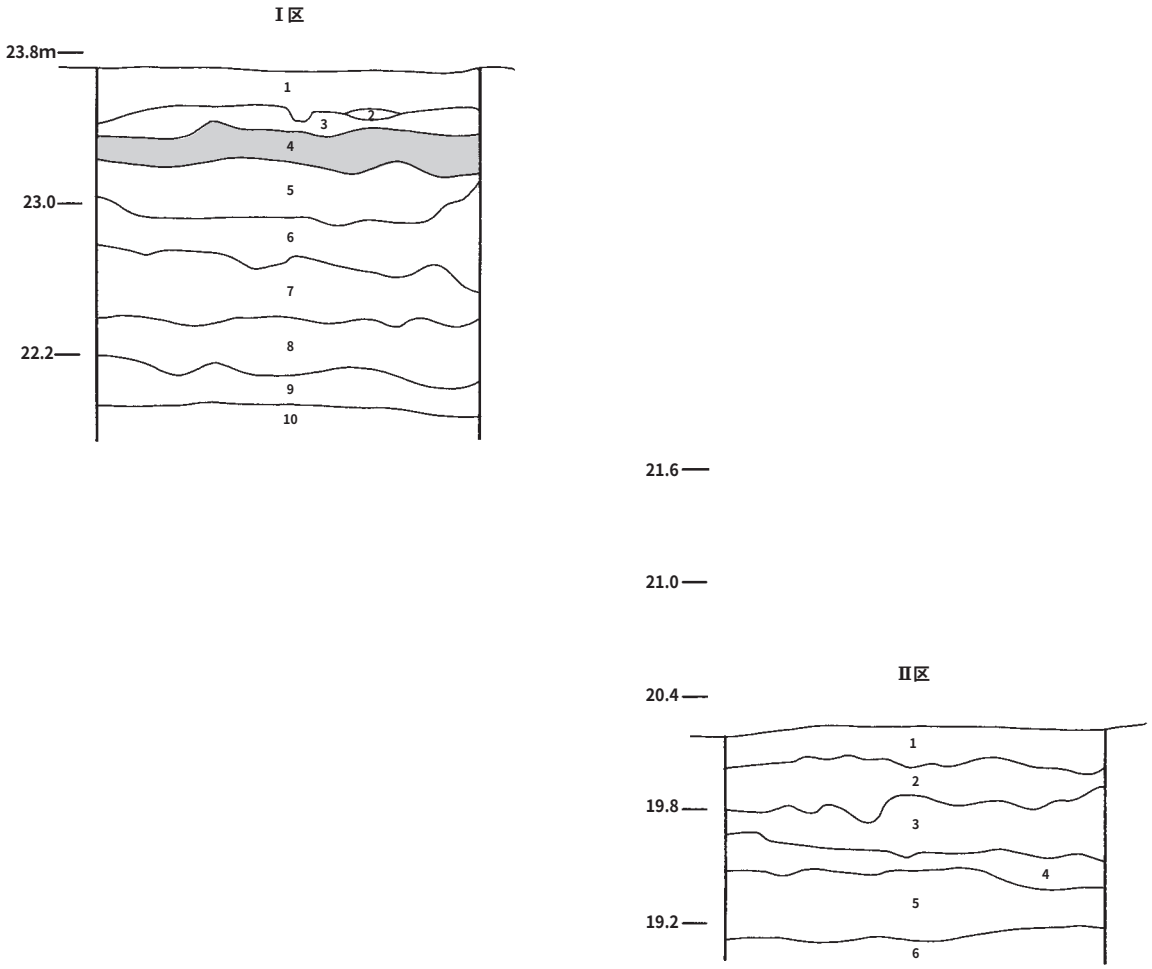
第３層は黒色粒子と白色粘土粒子を少量，褐色粘土粒子を中量含む鈍い褐色の粘土層であり，粘性・締まりはともに強い。調査Ⅰ区の第９層に対応すると考えられる。厚さは15～25㎝である。

第４層は粘土ブロック・粘土粒子を中量含む鈍い褐色の粘土層であり，粘性・締まりはともに強い。厚さは６～20㎝である。

第５層は粘土粒子を多量に含む鈍い褐色の粘土層であり，粘性・締まりはともに強い。厚さは20～40㎝である。

第６層は層厚は未掘のため確認できなかったが，褐灰色の粘土層で，常総粘土層と考えられる。調査Ⅰ区の第10層に対応すると考えられる。

なお，遺構は，第２層上面で確認した。



第３図　基本土層図

第３節　遺構と遺物

１　縄文時代の陥し穴と遺物

確認した陥し穴17基の特徴及び遺物について記述する。

第１号陥し穴（SK11）（第４図）

位置　調査Ⅰ区南東部のＨ６d9区で，標高21.6mの台地縁辺部に位置している。北西に隣接する第２号陥し穴とは３mほどの距離である。

規模と形状　長径3.0m，短径1.4mの楕円形で，深さは146㎝である。短径方向の断面はＶ字状を呈し，最上部は大きく外傾し，底面は狭く平坦である。南壁と北壁はほぼ直立し，上部は外傾して立ち上がっている。長径方向はＮ－33°－Ｅである。

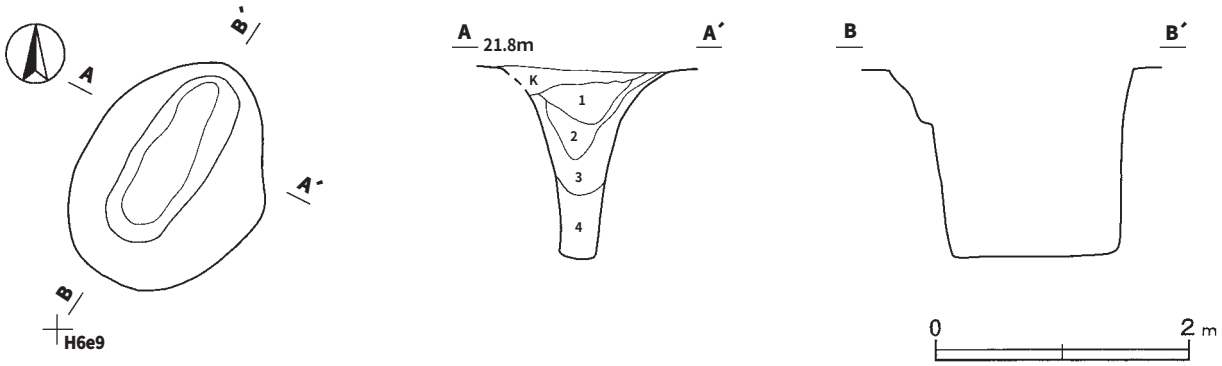
覆土　４層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1	黒　褐	色	ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量	3	褐	色	ロームブロック中量，炭化粒子微量
2	暗　褐	色	ロームブロック・炭化粒子少量	4	褐	色	ロームブロック多量，炭化粒子微量

遺物出土状況　覆土上層から，縄文土器片４点，土師器片２点，磁器片１点，瓦片１点が出土している。

所見　出土した遺物は，いずれも後世の流れ込みや混入によるものと考えられる。時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。



第４図　第１号陥し穴実測図

第２号陥し穴（SK10）（第５図）

位置　調査Ⅰ区南東部のＨ６e8区で，標高21.6mの台地縁辺部に位置している。南東に隣接する第１号陥し穴とは３mほどの距離である。

規模と形状　長径2.1m，短径0.9mの楕円形で，深さは132㎝である。最上部が大きく外傾している短径方向の断面はV字状を呈し，底面は狭く平坦である。南壁と北壁は下部でオーバーハングし，上部はほぼ直立している。長径方向はＮ－34°－Ｅである。

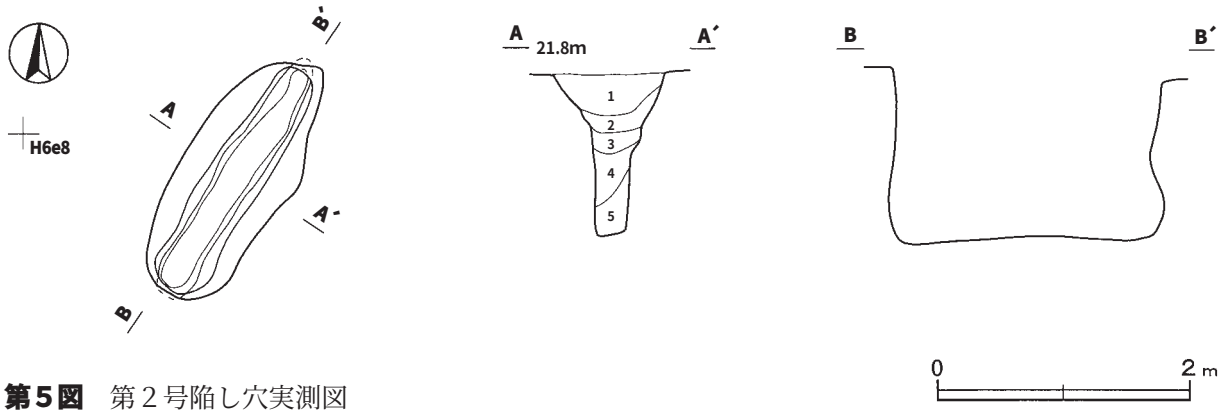
覆土　５層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1	褐	色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量	4	褐	色	ロームブロック中量
2	暗　褐	色	ロームブロック中量	5	暗　褐	色	ロームブロック少量
3	褐	色	ロームブロック少量				

遺物出土状況　覆土上層から，剥片１点が出土しているが，後世の流れ込みや混入によるものと考えられる。

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。



第５図　第２号陥し穴実測図

第３号陥し穴（SK57）（第６図）

位置　調査Ⅰ区中央部のＧ６h2区で，標高21.8mの台地縁辺部に位置している。

重複関係　第10号住居に南東側上部を掘り込まれている。

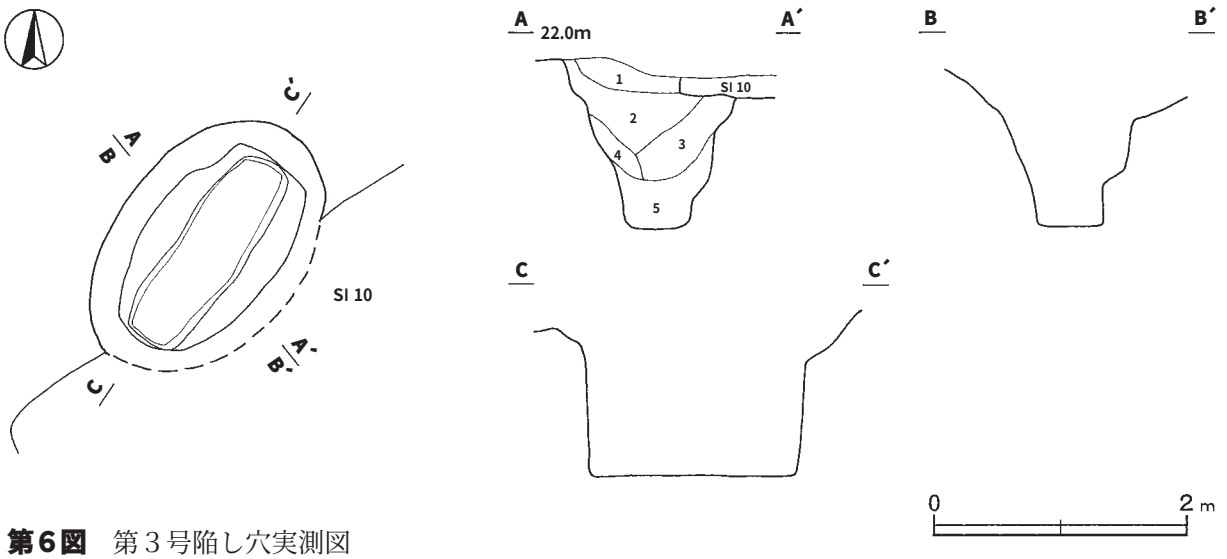
規模と形状　長径2.2m，推定短径1.5mほどの楕円形で，深さは128㎝である。最上部が大きく外傾している短径方向の断面はU字状を呈し，底面は狭く平坦である。南壁と北壁はほぼ直立し，上部は外傾して立ち上がっている。長径方向はN－32°－Eである。

覆土　５層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1	暗　褐　色	ロームブロック少量，焼土粒子微量	
2	黒　褐　色	ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量	
3	黒　褐　色	炭化粒子中量，ロームブロック少量，焼土粒子微量	
4	暗　褐　色	ロームブロック中量，炭化粒子少量	
5	極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子中量，粘土粒子少量	

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。



第６図　第３号陥し穴実測図

第４号陥し穴（SK80）（第７図）

位置　調査Ⅰ区中央部のＧ５g0区で，標高21.0mの台地縁辺部に位置している。北東に隣接している第５号陥し穴とは，3.5mほどの距離である。

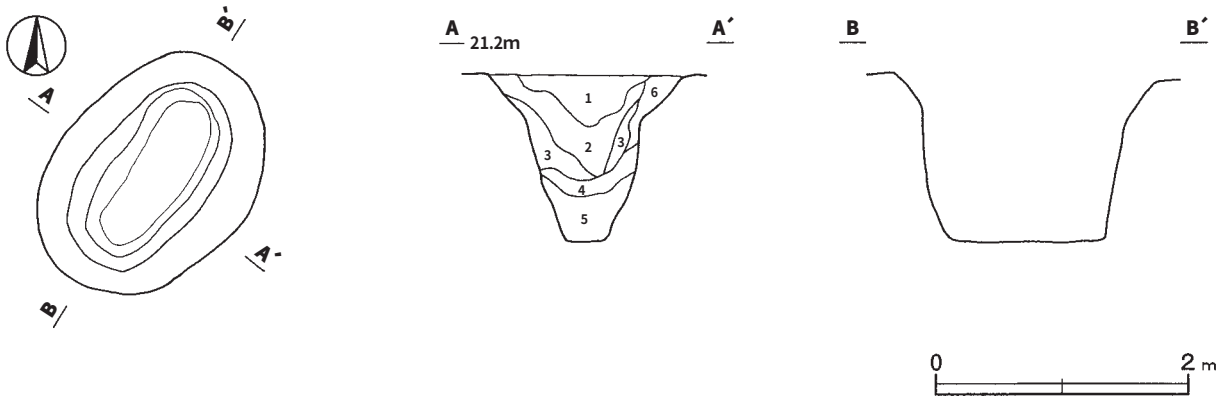
規模と形状　長径2.1m，短径1.5mの楕円形で，深さは132㎝である。最上部が大きく外傾する短径方向の断面はV字状を呈し，底面は狭く平坦である。南壁と北壁はほぼ直立し，上部は外傾して立ち上がっている。長径方向はN－37°－Eである。

覆土　６層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1	暗　褐	色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	
2	黒　褐	色	ロームブロック・炭化粒子微量	
3	暗　褐	色	ロームブロック微量	
4	褐	色	ロームブロック中量	
5	暗　褐	色	ロームブロック・炭化粒子微量	
6	褐	色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。



第７図　第４号陥し穴実測図

第５号陥し穴（SK27）（第８図）

位置　調査Ⅰ区中央部のＧ５f9区で，標高22.0mの台地縁辺部に位置している。北西に隣接している第６号陥し穴とは，2.5mほどの距離である。

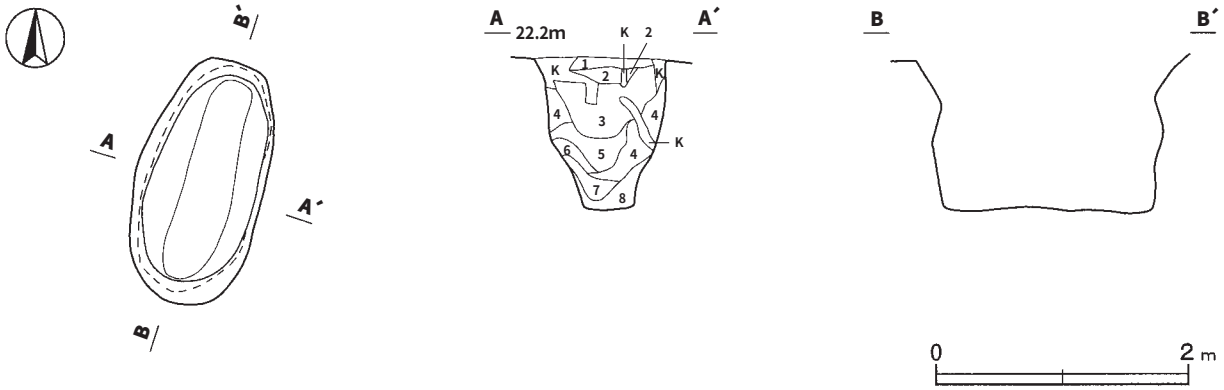
規模と形状　長径2.0m，短径1.0mの楕円形で，深さは120㎝である。最上部が大きく外傾する短径方向の断面はU字状を呈し，底面は狭く平坦である。南壁と北壁は中位わずかにでオーバーハングし，上部は外傾して立ち上がっている。長径方向はN－20°－Eである。

覆土　８層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1	褐	色	ローム粒子中量，炭化粒子微量	
2	暗　褐	色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	
3	黒　褐	色	ロームブロック微量，炭化粒子微量	
4	褐	色	ロームブロック少量	
5	暗　褐	色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	
6	褐	色	ロームブロック中量	
7	暗　褐	色	ロームブロック中量，炭化物微量	
8	暗　褐	色	ロームブロック少量，ローム粒子多量	

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。



第８図　第５号陥し穴実測図

第６号陥し穴（SK65）（第９図）

位置　調査Ⅰ区中央部のＧ５e8区で，標高22.0mの台地縁辺部に位置している。北西に隣接している第７号陥し穴とは，3.2mほどの距離である。

規模と形状　長径2.4m，短径1.1mの楕円形で，深さは120㎝である。外傾して立ち上がる短径方向の断面はＶ字状を呈し，底面は狭く平坦である。南壁と北壁はほぼ垂直に立ち上がっている。長径方向はＮ－29°－Ｅである。

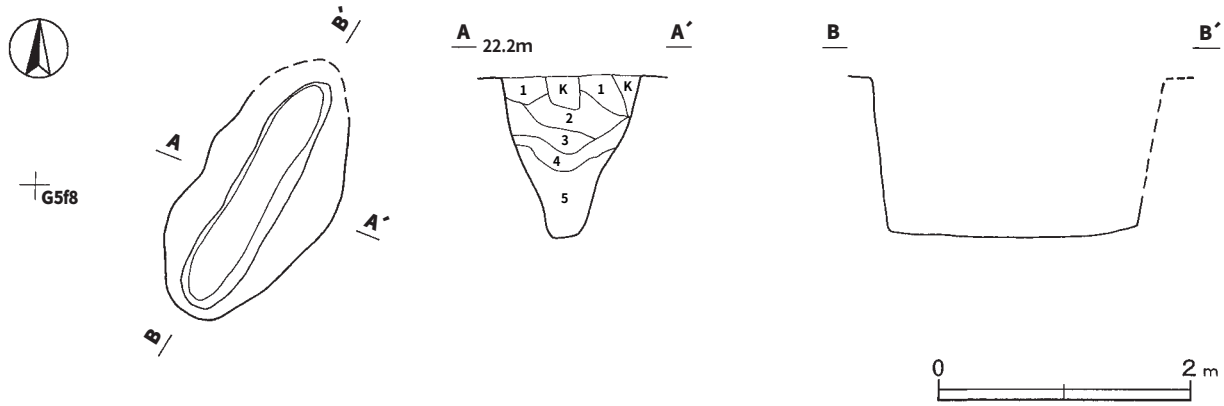
覆土　５層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1	暗	褐	色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量	4	褐	色	ロームブロック中量
2	暗	褐	色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	5	黒 褐	色	ロームブロック・炭化粒子微量
3	暗	褐	色	ロームブロック少量，炭化粒子微量				

遺物出土状況　覆土上層から，土師器片８点，磁器片１点が出土している。

所見　出土した遺物は，いずれも後世の流れ込みや混入によるものと考えられる。時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。



第９図　第６号陥し穴実測図

第７号陥し穴（SK37）（第10図）

位置　調査Ⅰ区中央部のＧ５e7区で，標高22.0mの台地縁辺部に位置している。北西に隣接している第８号陥し穴とは，2.2mほどの距離である。

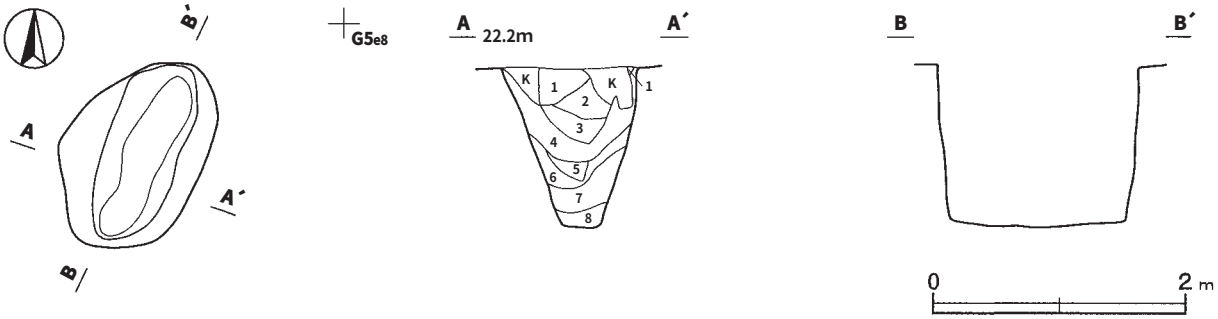
規模と形状　長径1.6m，短径1.1mの楕円形で，深さは126㎝である。外傾して立ち上がる短径方向の断面はＶ字状を呈し，底面は狭く平坦である。南壁と北壁はほぼ直立している。長径方向はＮ－32°－Ｅである。

覆土　８層に分層される。周囲の土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1	暗　褐	色	ロームブロック少量，炭化物微量	
2	暗　褐	色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	
3	黒　褐	色	ロームブロック微量，炭化粒子微量	
4	褐	色	ロームブロック中量	
5	褐	色	ロームブロック少量	
6	暗　褐	色	ロームブロック少量	
7	暗　褐	色	ロームブロック中量	
8	褐	色	ロームブロック・粘土粒子微量	

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。



第10図　第７号陥し穴実測図

第８号陥し穴（SK24）（第11図）

位置　調査Ⅰ区中央部のＧ５d6区で，標高22.0mの台地縁辺部に位置している。北西に隣接している第９号陥し穴とは，3.6mほどの距離である。

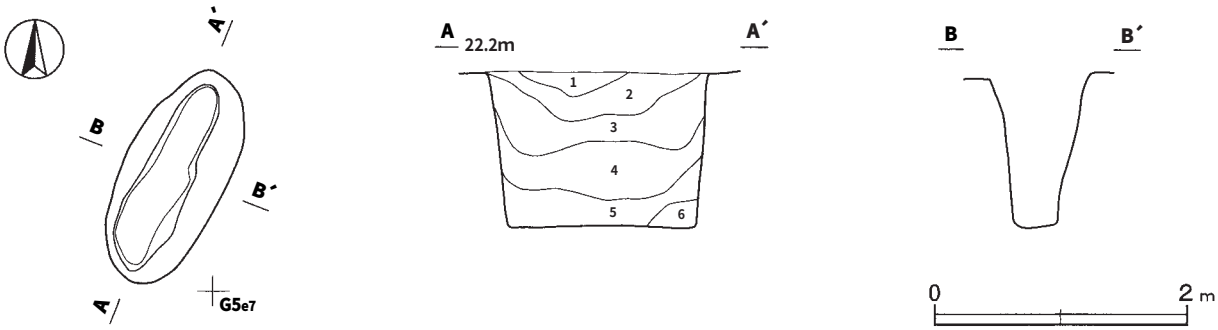
規模と形状　長径1.8m，短径0.8mの楕円形で，深さは124㎝である。外傾気味に立ち上がる短径方向の断面はＶ字状を呈し，底面は狭く平坦である。南壁と北壁はほぼ直立している。長径方向はＮ－26°－Ｅである。

覆土　６層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1	黒　褐	色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	
2	暗　褐	色	ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量	
3	褐	色	ロームブロック少量	
4	褐	色	ロームブロック中量	
5	暗　褐	色	ロームブロック中量	
6	暗　褐	色	ロームブロック少量	

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。



第11図　第８号陥し穴実測図

第９号陥し穴（SK23）（第12図）

位置　調査Ｉ区中央部のＧ５d6区で，標高21.8mの台地縁辺部に位置している。

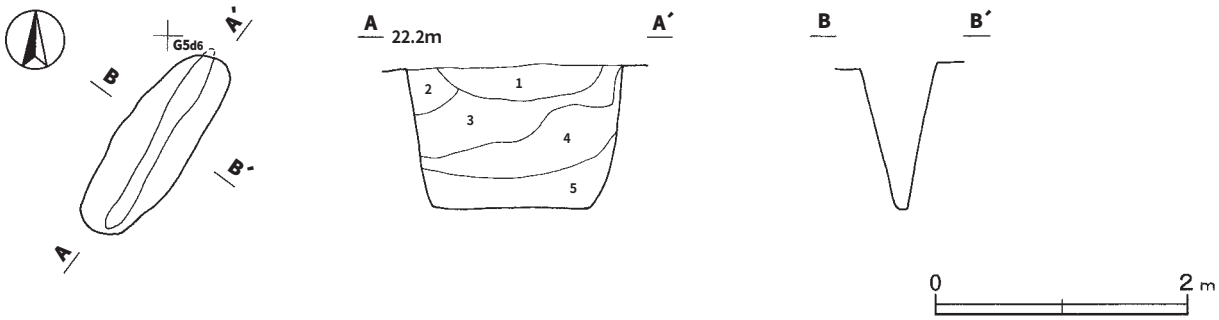
規模と形状　長径1.7m，短径0.6mの楕円形で，深さは113㎝である。外傾して立ち上がる短径方向の断面はＶ字状を呈し，底面は狭く平坦である。北壁は下部でオーバーハングし，上部はほぼ直立している。長径方向はＮ－37°－Ｅである。

覆土　５層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック中量
3　褐　　色　ロームブロック少量・炭化粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック少量
5　極 暗 褐 色　ロームブロック・粘土粒子少量

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。



第12図　第９号陥し穴実測図

第10号陥し穴（SK63）（第13図）

位置　調査Ｉ区北部のＧ５a1区で，標高21.7mの台地縁辺部に位置している。北西に隣接している第11号陥し穴とは，5.8mほどの距離である。

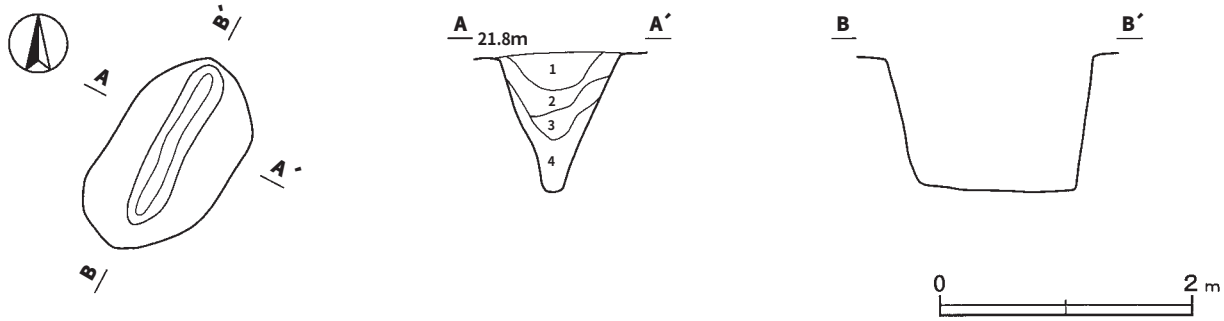
規模と形状　長径1.7m，短径1.0mの楕円形で，深さは106㎝である。外傾して立ち上がる短径方向の断面はＶ字状を呈し，底面は狭く平坦である。南壁と北壁はやや外傾して立ち上がっている。長径方向はＮ－25°－Ｅである。

覆土　４層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ロームブロック中量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。



第13図　第10号陥し穴実測図

第11号陥し穴（SK109）（第14図）

位置　調査Ⅰ区北部のＦ４i9区で，標高21.3mの台地縁辺部に位置している。北西に隣接している第12号陥し穴とは，5.8mほどの距離である。

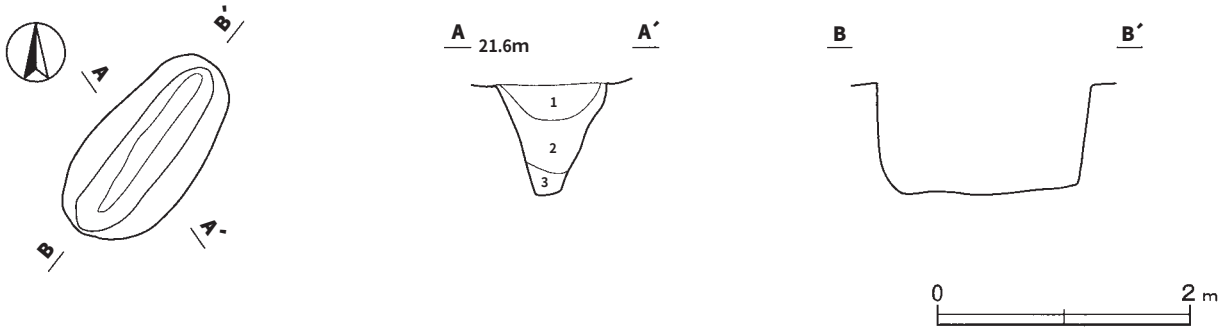
規模と形状　長径1.7m，短径0.9mの楕円形で，深さは85㎝である。短径方向の断面はＶ字状を呈し，外傾して立ち上がる東西壁は，底面は狭く平坦である。南壁と北壁はほぼ垂直に立ち上がっている。長径方向はＮ－38°－Ｅである。

覆土　３層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック微量
3　黒　褐　色　ロームブロック・粘土粒子微量

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。



第14図　第11号陥し穴実測図

第12号陥し穴（SK110）（第15図）

位置　調査Ⅰ区北部のＦ４h8区で，標高21.0mの台地縁辺部に位置している。

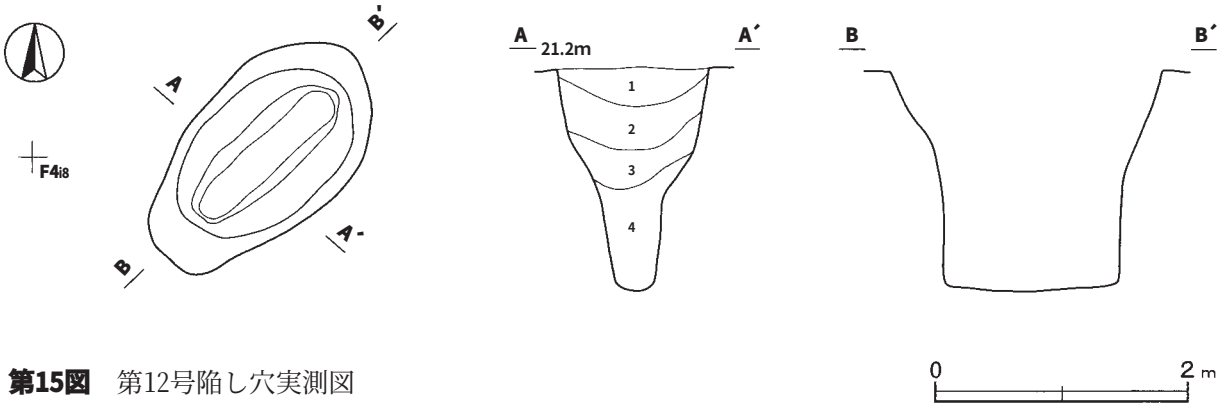
規模と形状　長径2.2m，短径1.2mの楕円形で，深さは173㎝である。底部からほぼ垂直に，中位から外傾して立ち上がる短径方向の断面はＶ字状を呈し，底面は狭く平坦である。南壁と北壁はほぼ直立して，上部は外傾している。長径方向はＮ－47°－Ｅである。

覆土　４層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子微量

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。



第15図　第12号陥し穴実測図

第13号陥し穴（SK111）（第16図）

位置　調査Ⅱ区中央部のＢ１b8区で，標高20.1mの台地縁辺部に位置している。

重複関係　第18号住居及び第118号土坑に掘り込まれている。

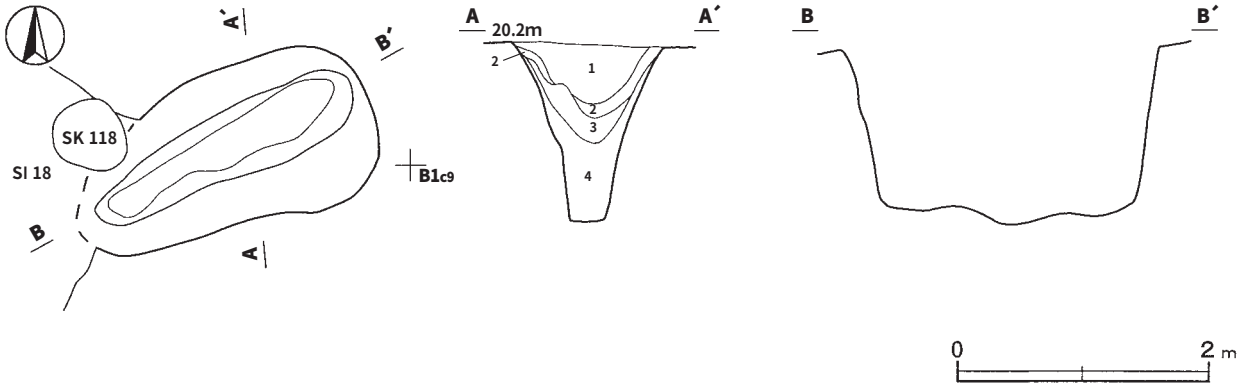
規模と形状　長径2.5m，短径1.2mの楕円形で，深さは136㎝である。外傾して立ち上がる短径の断面はＶ字状を呈し，底面は狭く平坦である。南壁と北壁はやや外傾して立ち上がっている。長径方向はＮ－61°－Ｅである。

覆土　４層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1	黒	褐	色	ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量	3	暗 褐	色 ロームブロック少量
2	暗	褐	色	ローム粒子少量，焼土粒子微量	4	褐	色 ロームブロック少量

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。

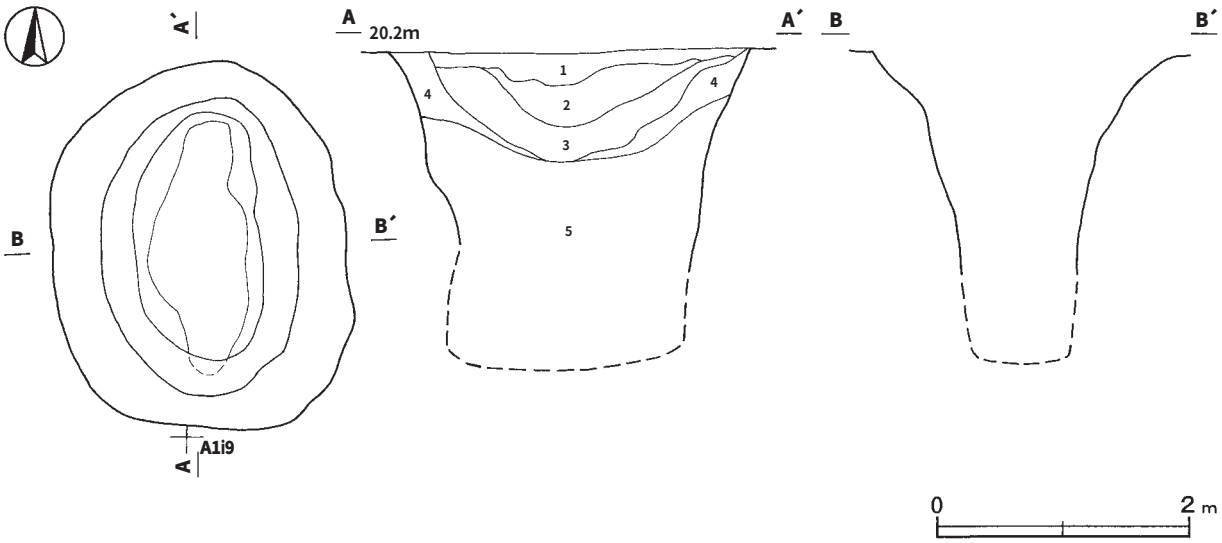


第16図　第13号陥し穴実測図

第14号陥し穴（SK127）（第17図）

位置　調査Ⅰ区中央部のＡ１h9区で，標高20.1mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状　長径2.9m，短径2.4mの楕円形で，深さは160㎝までは確認できたが，湧水のためそれ以下は未掘である。上部は大きく外傾している。長径方向はＮ－９°－Ｅである。



第17図　第14号陥し穴実測図

覆土　５層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1	黒　褐	色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量	
2	黒　褐	色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	
3	黒	色	炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子微量	
4	暗　褐	色	ロームブロック・炭化粒子・褐色粘土粒子少量	
5	褐	色	ロームブロック・褐色粘土粒子中量	

遺物出土状況　覆土上層から，縄文土器片１点が出土している。

所見　出土した遺物は，流れ込みによるものと考えられる。時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。

第15号陥し穴（SE１）（第18図）

位置　調査Ⅰ区の南東部Ⅰ６b9区で，標高20.6mの穏やかな斜面部に位置している。

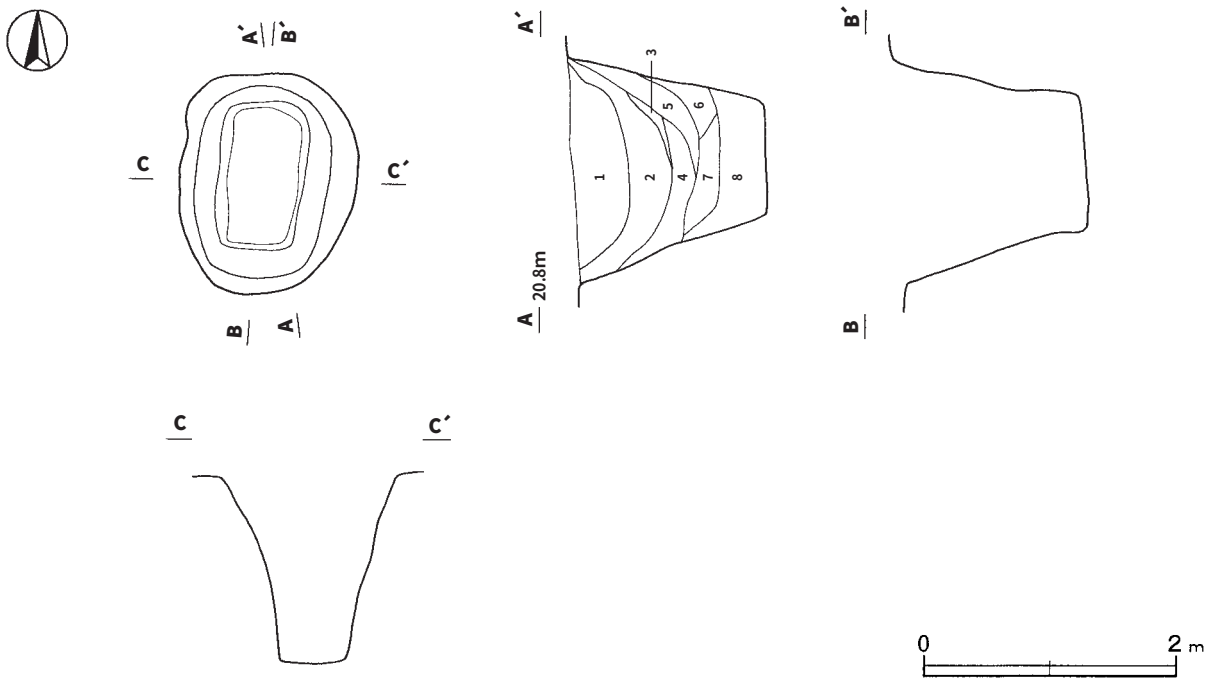
規模と形状　長径1.8m，短径1.4mの楕円形（中位から底面にかけては長方形）で，深さは166㎝である。底部からほぼ垂直に，中位から外傾して立ち上がる短径方向の断面はU字状を呈し，底面は平坦である。南壁と北壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN－8°－Eである。

覆土　８層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1	黒　褐	色	焼土粒子少量，ローム粒子微量	
2	黒　褐	色	ローム粒子・焼土粒子微量	
3	黒	色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	
4	黒　褐	色	ローム粒子少量	
5	黒　褐	色	ロームブロック少量	
6	暗　褐	色	ロームブロック少量	
7	黒　褐	色	ロームブロック少量，粘土粒子微量	
8	暗　褐	色	ロームブロック少量，粘土粒子微量	

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。



第18図　第15号陥し穴実測図

第16号陥し穴（SE２）（第19図）

位置　調査Ⅰ区南部のⅠ６j4区で，標高21.0mの穏やかな斜面部に位置している。

規模と形状　長径1.7m，短径1.5mの楕円形（中位から底面にかけては長方形）で，深さは129㎝である。底部か

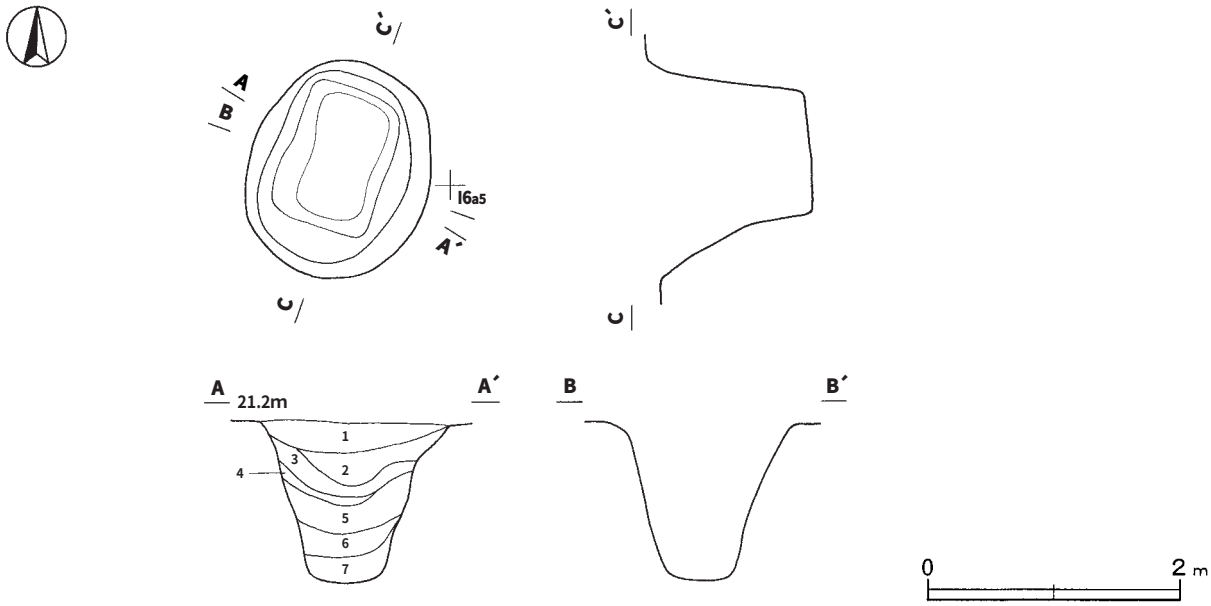
ら外傾して立ち上がる短径方向の断面はU字状を呈し，底面は平坦である。南壁と北壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN－14°－Eである。

覆土　７層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ローム粒子中量
4　黒　　色　ロームブロック・炭化物微量
5　黒　褐　色　ロームブロック少量
6　暗　褐　色　ロームブロック多量
7　暗　褐　色　ロームブロック少量，粘土粒子微量

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。

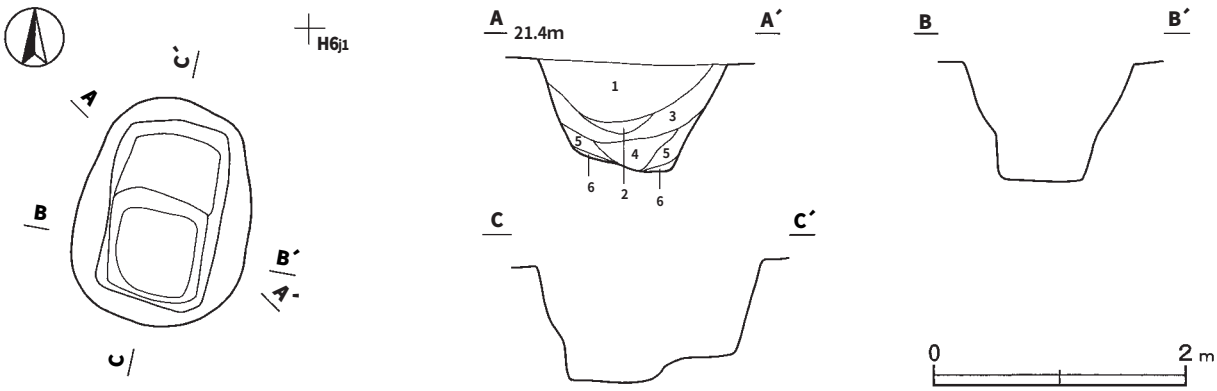


第19図　第16号陥し穴実測図

第17号陥し穴（SE３）（第20図）

位置　調査Ⅰ区南部H５j0区で，標高21.4mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状　長径1.8m，短径1.4mの楕円形（中位から底面にかけては長方形）で，深さは97㎝である。底部からほぼ垂直に，中位から外傾して立ち上がる短径方向の断面はU字状を呈し，底面は凸凹である。南壁と北壁は外傾して立ち上がっている。底面は階段状に１段の段差があり，長径方向はN－３°－Eである。



第20図　第17号陥し穴実測図

覆土　６層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1	黒	褐	色	ロームブロック微量	4	暗 褐	色 ロームブロック中量
2	黒	褐	色	炭化物・ローム粒子少量	5	暗 褐	色 ロームブロック少量
3	暗	黒	色	ロームブロック・炭化粒子少量	6	黒 褐	色 ローム粒子微量

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられる。

２　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で，古墳時代の竪穴住居跡11軒，土坑10基，溝跡１条を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

⑴　竪穴住居跡

第10号住居跡（第21図）

位置　調査Ⅰ区中央部のＧ６i3区で，標高21.8mの台地縁辺部に位置している。

重複関係　北部で第３号陥し穴を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸4.8m，短軸3.4mの長方形で，主軸方向はＮ－58°－Ｅである。壁高は18～22㎝で，やや外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，炉２の周辺を含め中央部は踏み固められている。南壁の南東コーナー寄りに出入り口部と考えられる高まりがあり，その高まりは貯蔵穴の北西側を囲繞している。出入り口部の高まりと床との比高は，約７㎝である。

炉　２か所。炉１は中央部の北東寄りに位置し，長径53㎝，短径40㎝の楕円形で，床面を４㎝ほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。また，炉２は東部に位置し，長径51㎝，短径49㎝のほぼ円形である。床面を８㎝ほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。どちらの炉床面も火熱でわずかに赤変硬化している。

炉１土層解説

1	暗	褐	色	ロームブロック・焼土粒子少量

炉２土層解説

1	暗	赤 褐	色	焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量	2	暗	赤 褐	色 焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量

貯蔵穴　東コーナー部に位置し，長径61㎝，短径55㎝の楕円形である。深さは53㎝であり，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1	暗	褐	色	ローム粒子中量，炭化粒子少量	3	暗 褐	色 ロームブロック・炭化粒子少量
2	暗	褐	色	ローム粒子・炭化粒子少量	4	黒 褐	色 ローム粒子・炭化粒子少量

覆土　８層に分層される。ロームブロックを少量含み，不規則な堆積状況を示していることから人為堆積である。

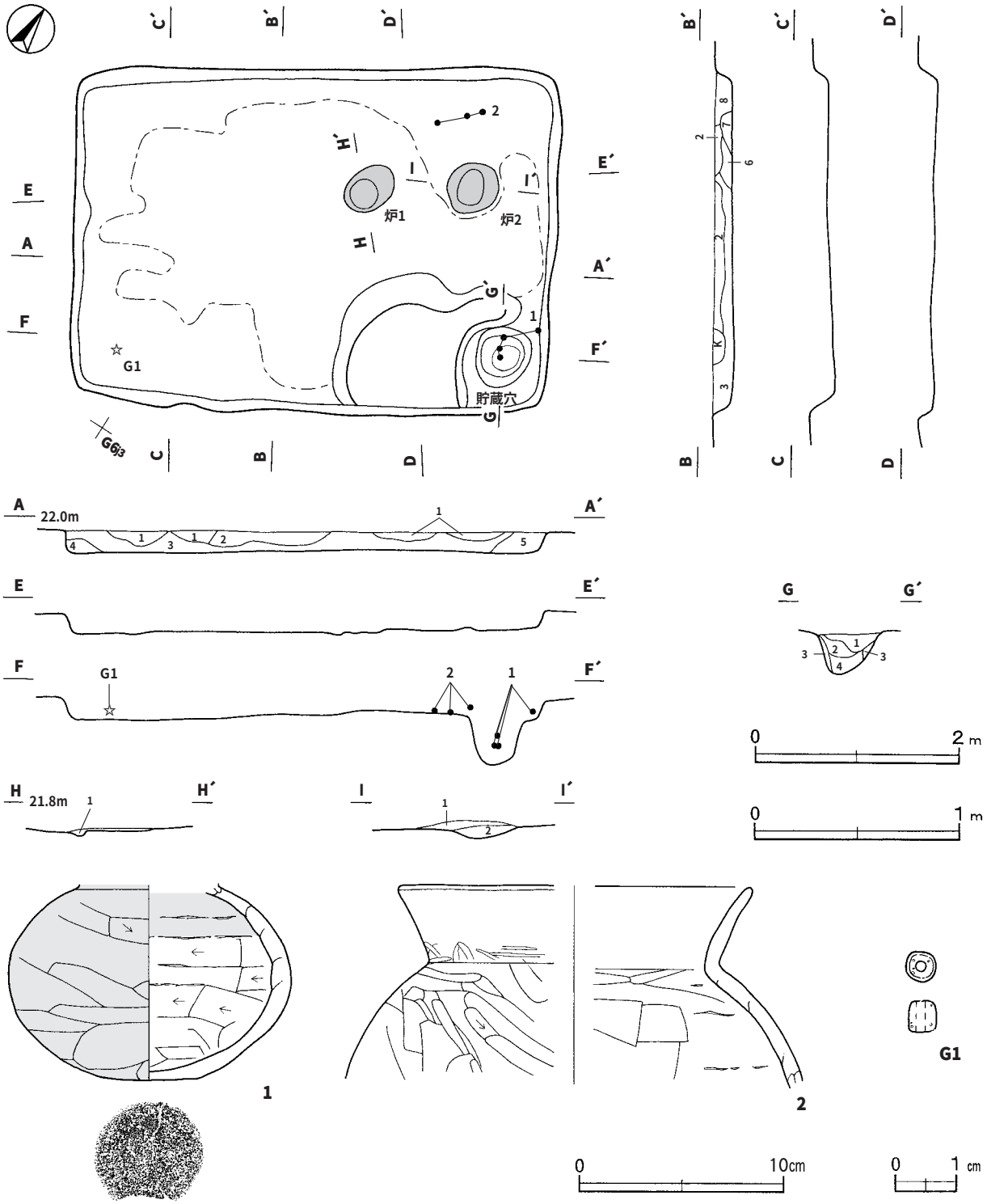
土層解説

1	黒	褐	色	ロームブロック少量	5	暗 褐	色 ロームブロック微量
2	暗	褐	色	ロームブロック少量	6	褐	色 ロームブロック微量
3	褐		色	ロームブロック小量，焼土粒子・炭化粒子微量	7	褐	色 ロームブロック少量
4	褐		色	ロームブロック中量	8	暗 褐	色 ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片411点（坏・椀類18，甕類359，坩20，高坏14），ガラス小玉１点が出土している。底部片などから推定される個体数は，甕２点である。１は貯蔵穴覆土中層から，２は炉２の北側床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。Ｇ１は，南コーナーの覆土下層から出土している。細片のため図示で

きなかったが，遺物は炉の東側に散在して出土しており，上記の遺物とともに廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見　炉１は周りの床面と同じ高さで硬化していることから，炉２より古いと考えられる。廃絶時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられる。



第21図　第10号住居跡・出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坩	―	(9.6)	4.8	雲母・石英・微礫	橙	普通	体部内・外面ヘラ削り，内面輪積痕	貯蔵穴	40%
2	土師器	甕	[17.2]	(9.8)	―	雲母・石英・赤色粒子	明褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ磨き，内面ヘラナデ	炉2北側床面	20%

番号	器　種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
G1	小玉	0.5	0.5	0.2	0.2	ガラス	瑠璃色，両面面取り	南コーナー下層	PL21

第11号住居跡（第22・23図）

位置　調査Ⅰ区中央部のＨ５a7区で，標高21.6mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状　住居の大部分が撹乱を受け，さらに調査区域外に延びているため，全体の規模は不明である。長軸6.1m，短軸1.7mが確認された。壁高は13～17cmで，各壁とも外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，西側に向かって緩やかに傾斜している。暗褐色のローム土でやや締まりはあるものの硬化した部分は認められない。

ピット　３か所。深さはＰ１が約23㎝，Ｐ２が約32㎝，Ｐ３が約37cmであり，位置と形状から補助柱穴の可能性が考えられる。

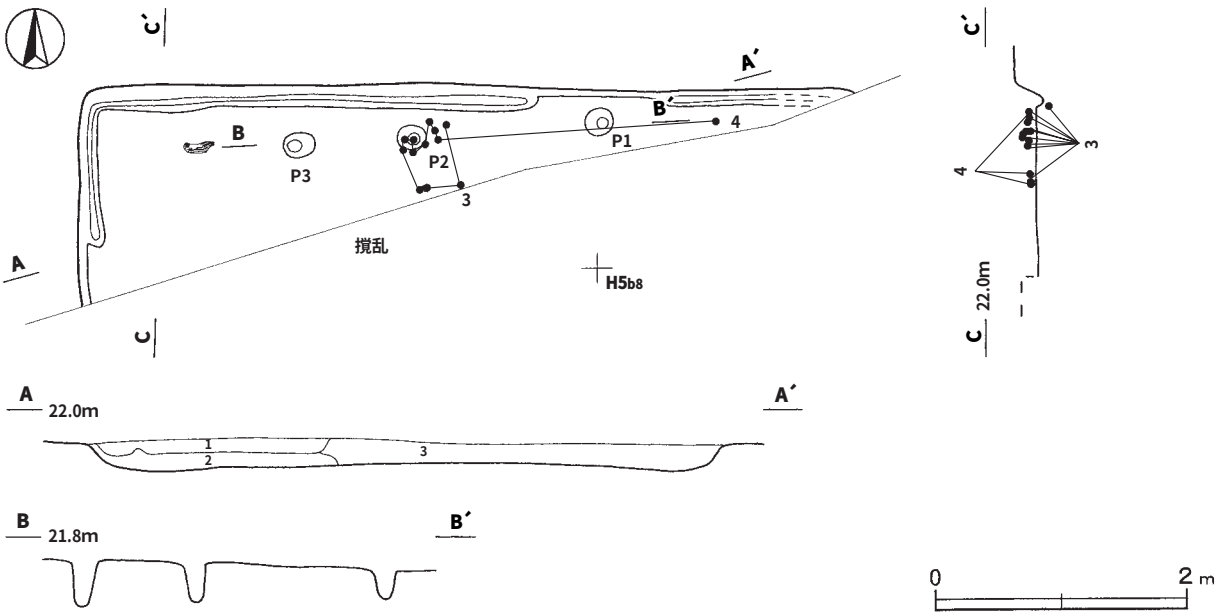
覆土　３層に分層される。確認できた部分はわずかで撹乱も激しいため，堆積状況は不明である。

土層解説

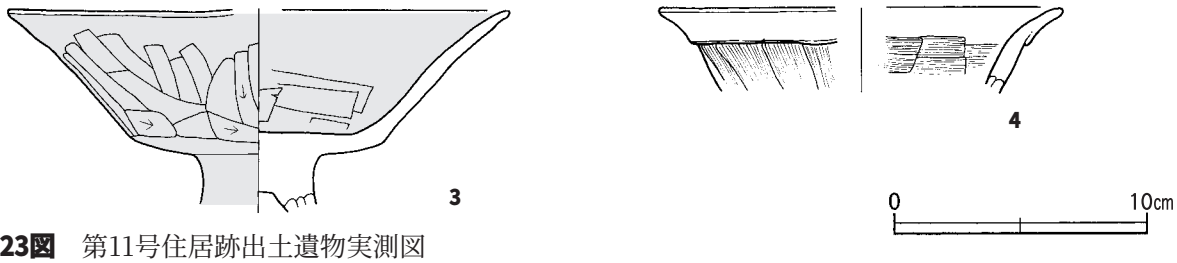
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片63点（甕類41，高坏22）が出土している。底部片などから推定される個体数は，高坏１点である。３と４は北壁際の覆土下層から破砕された状態でまとまって出土しており，廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見　廃絶時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられる。



第22図　第11号住居跡実測図



第23図　第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	土師器	高坏	[20.0]	(8.0)	―	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部横ナデ，坏部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	北壁下層	30%　PL16
4	土師器	壺	[16.0]	(3.3)	―	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	複合口縁部横ナデ，刷毛目調整	北壁下層	5%

第12号住居跡（第24・25図）

位置　調査Ⅰ区北東部のＧ６d2区で，標高21.9mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状　北東コーナー及び南東コーナー部を含む住居跡のおよそ４割は，調査区域外のため全体の規模は不明である。長軸5.5m，短軸4.3mが確認された。北・西・南壁の形状から想定される主軸方向はN－５°－Eである。壁高は32～36㎝で，ほぼ直立して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部及び南壁の南東コーナー寄りの出入り口部と考えられる高まりが踏み固められている。出入り口部の高まりと床との比高は，約10㎝である。また，西壁際と南壁際には丸材の炭化材や焼土塊が検出されている。

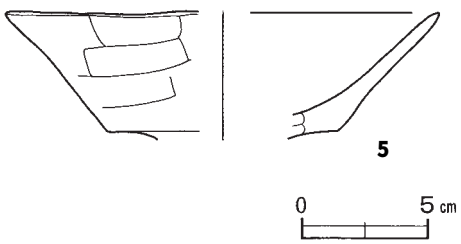
ピット　７か所。形状から主柱穴はＰ１・２が相当し，深さはＰ１が63cm，Ｐ２が79cmである。Ｐ３は深さ16㎝で硬化した高まり上にあり，斜めに掘り込まれていることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。また，Ｐ４～７は深さ５～18㎝であり，位置と形状から補助柱穴の可能性が考えられる。

覆土　12層に分層される。耕作による撹乱が見られるが，周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

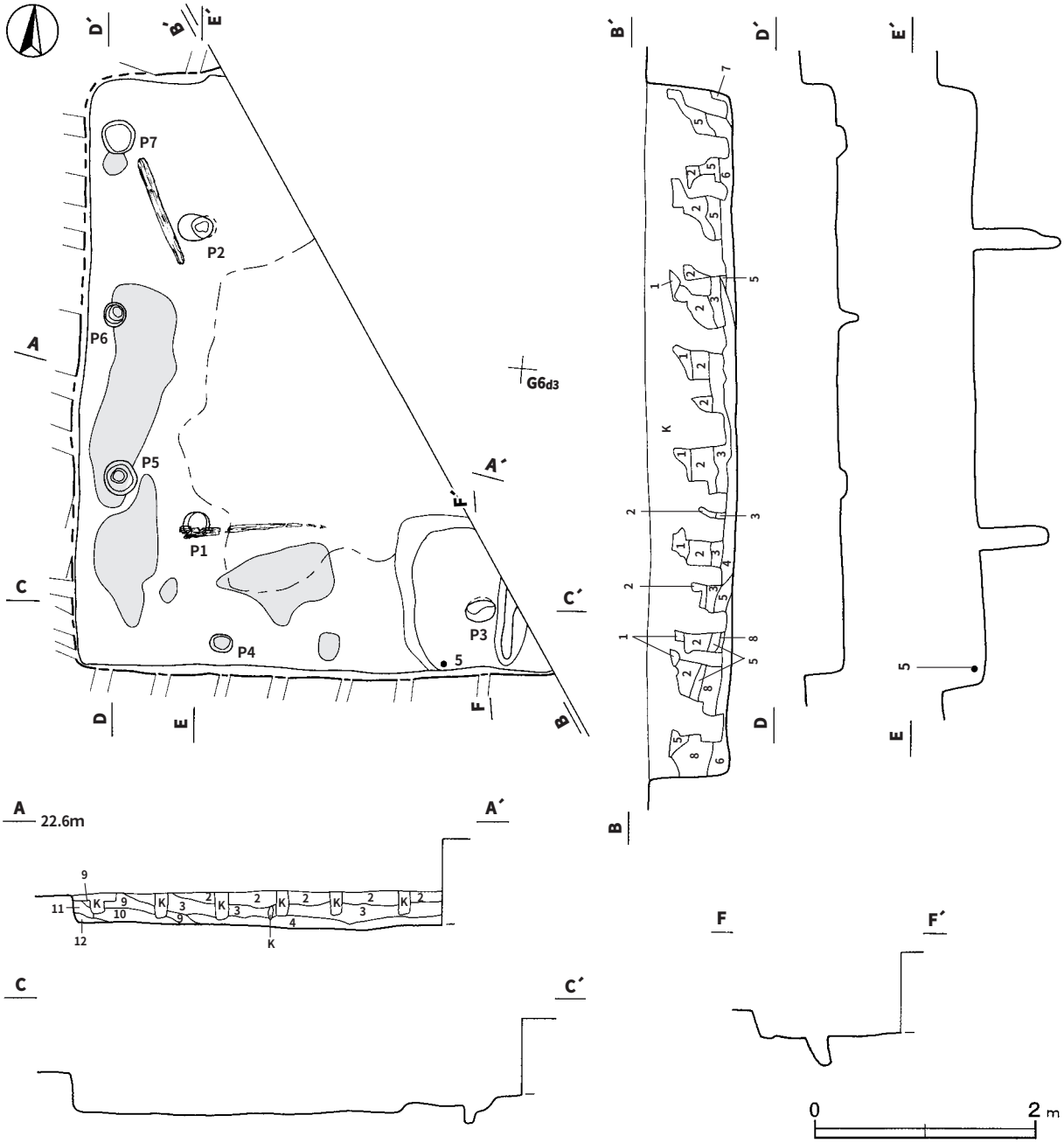
1　黒　色　炭化粒子中量，ロームブロック微量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
3　黒　色　炭化粒子中量・ローム粒子・焼土粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
7　暗　褐　色　ロームブロック小量，炭化粒子微量
8　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
9　暗　褐　色　焼土粒子・炭化物中量，ローム粒子少量
10　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子微量
11　極暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
12　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量

遺物出土状況　土師器片111点（坏・椀類６，甕類90，坩８，高坏７），須恵器片１点（坏類）が出土している。底部片などから推定される個体数は，土師器坏１点，土師器甕３点，高坏１点である。ほとんどが細片のため，図示できたのは南壁際の覆土下層から出土している５だけである。



所見　床面上の焼土塊，炭化材の存在から，本跡は焼失住居の可能性が極めて高いと考えられる。時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられる。

第24図　第12号住居跡出土遺物実測図



第25図　第12号住居跡実測図

第12号住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	土師器	高坏	[17.0]	(5.0)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ，坏部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	南壁下層	5%

第13号住居跡（第26・27図）

位置　調査Ⅰ区北東部のＧ５c0区で，標高22.0mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状　長軸5.4m，短軸5.3mの方形で，主軸方向はＮ－29°－Ｗである。壁高は8～20㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，南壁の南東コーナー寄りに出入り口部と考えられる踏み固められた高まりがある。出入

り口部の高まりと床との比高は約10cmである。東壁北側コーナー寄りに長さ75cm，幅20cm，深さ８cmの間仕切り溝が１条確認された。耕作による格子状の撹乱を受けている。

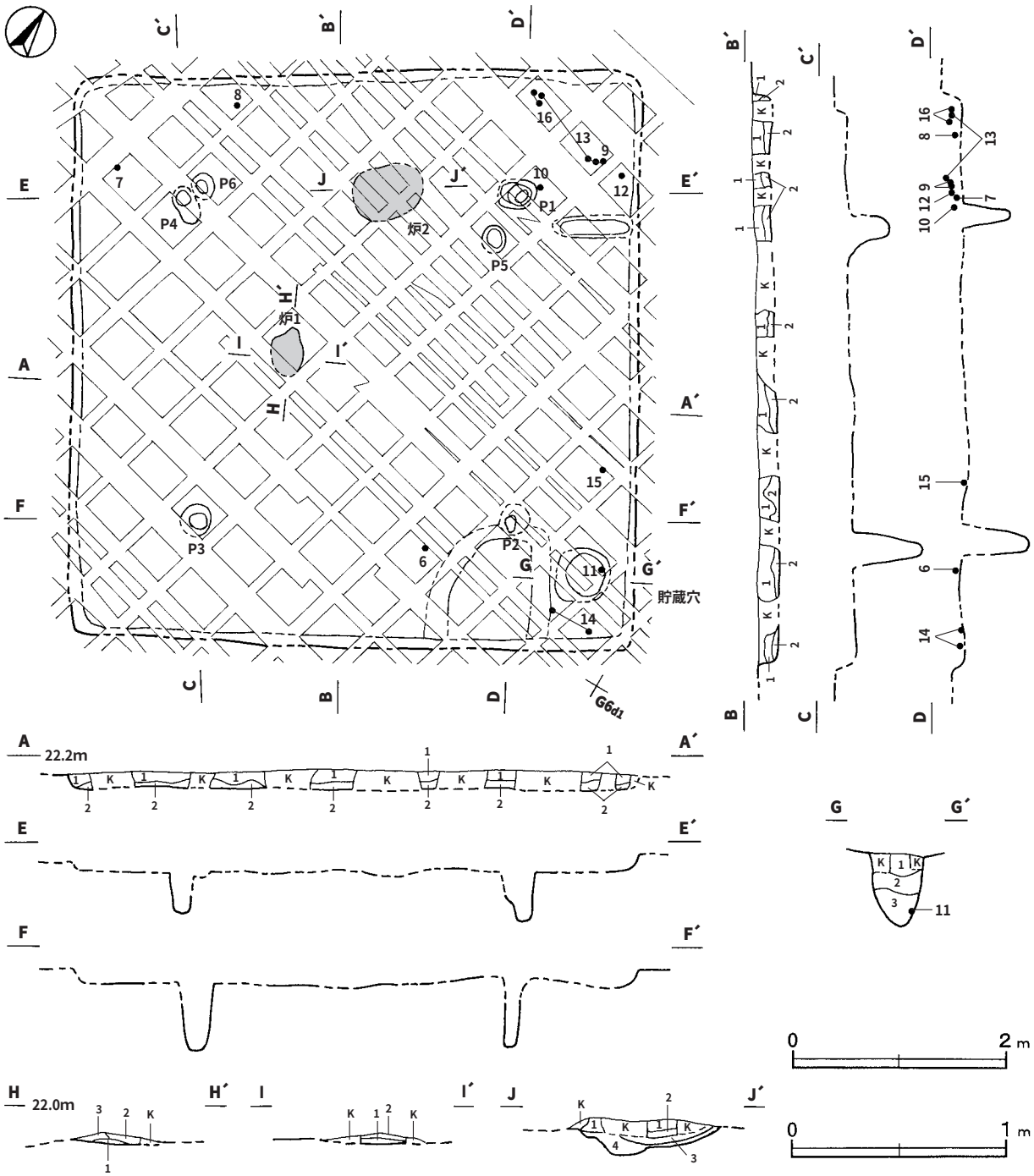
炉　２か所。炉１は中央部に位置し，長径28cm，短径25cmのほぼ円形で，床面を７cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉で，炉床面はわずかに赤変硬化している。また，炉２はＰ１とＰ４を結ぶ線上に位置し，長径66cm，短径53cmの楕円形で，床面を25cmほど掘りくぼめた地床炉であり，炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉１土層解説

1　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量

炉２土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
2　暗 赤 褐 色　焼土ブロック多量，炭化粒子少量
3　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子微量
4　赤　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子少量



第26図　第13号住居跡実測図

ピット　６か所。主柱穴はＰ１～４が相当し，深さは38～64㎝である。Ｐ５は深さ８㎝，Ｐ６は深さ12㎝であるが，性格は不明である。

貯蔵穴　長径52㎝，短径50㎝のほぼ円形を呈し，深さは66㎝で東コーナー部に位置している。底面はU字状を呈し，壁はほぼ直立している。

貯蔵穴土層解説

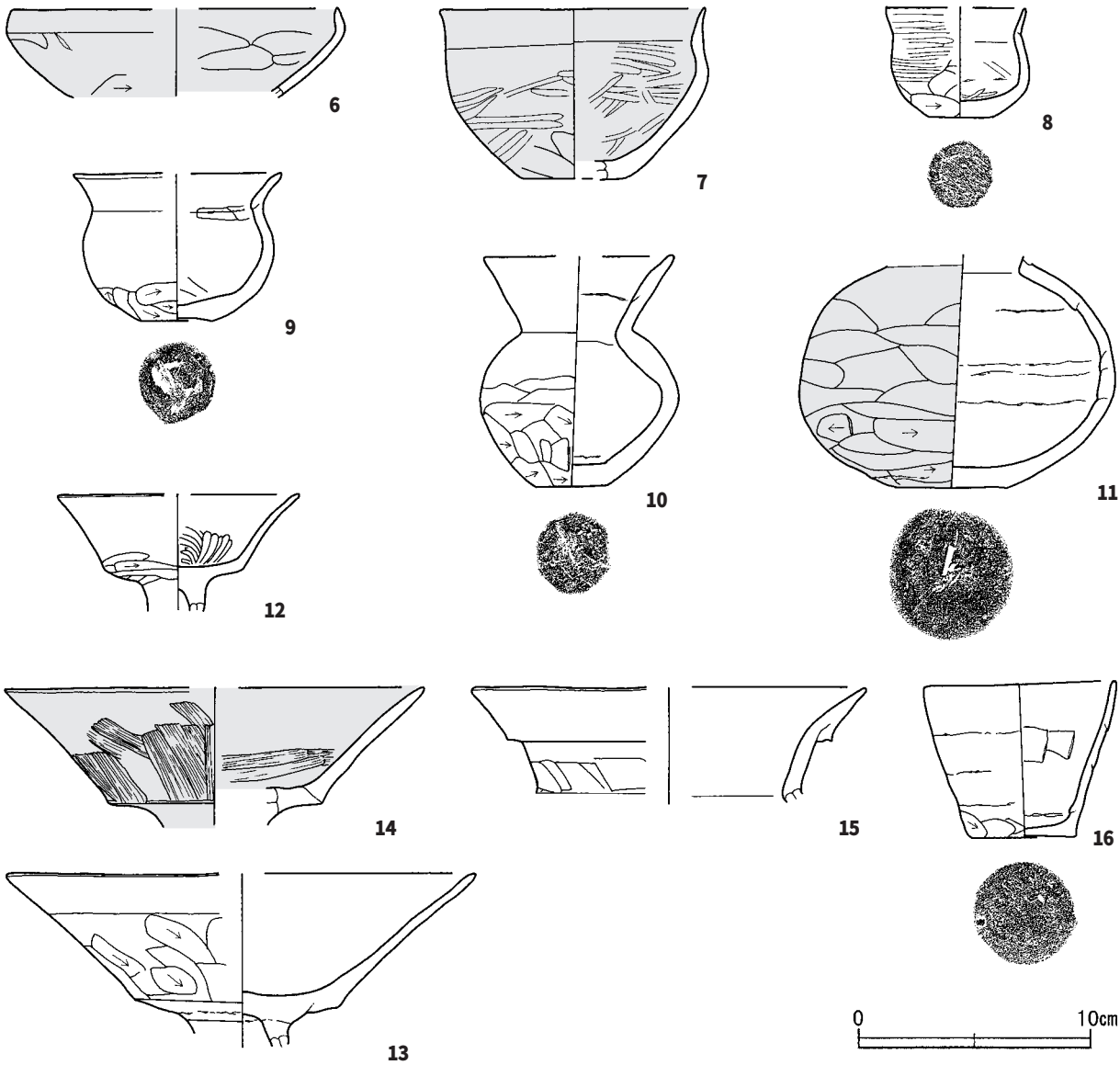
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
2　極 暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子微量

覆土　２層に分層される。薄い上に耕作による撹乱が激しいため，堆積状況は不明である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子中量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片888点（坏・椀類25，甕類761，高坏29，坩63，ミニチュア鉢10），須恵器１点（甕）が出土している。底部片などから推定される個体数は，土師器甕９点，高坏４点，坩２点，ミニチュア鉢１点である。６は出入り口部と考えられる高まりの西側，７・８は西コーナー寄り，９・10・12・13・16は北コーナ



第27図　第13号住居跡出土遺物実測図

ー寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。また，11は貯蔵穴の覆土下層，14は東コーナーの覆土下層，15は東コーナー寄り北東壁側の覆土下層から出土している。耕作による撹乱が激しく，細片が多かったが，多くの遺物は炉の周辺，北・東コーナー付近から散在して出土していることから，これらは廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見　廃絶時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表（第27図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
6	土師器	坏	［14.0］	（3.8）	―	石英	赤褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ナデ	南東壁下層	20%
7	土師器	椀	11.4	7.3	［4.4］	長石・雲母	明暗褐	普通	口縁部横ナデ，体部内・外面ヘラ磨き	西コーナー下層	60%　PL15
8	土師器	小形甕	［5.9］	4.8	2.8	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ磨き・ヘラ削り，内面ヘラ磨き・輪積痕	西コーナー下層	60%
9	土師器	小形甕	［8.9］	6.3	3.0	石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	北コーナー下層	50%
10	土師器	坩	［8.0］	9.9	3.1	石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面輪積痕	北コーナー下層	90%　PL17
11	土師器	坩	―	（10.1）	5.0	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面輪積痕	貯蔵穴	75%　PL17
12	土師器	高坏	［10.2］	（5.0）	―	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部ナデ，坏部内・外面ヘラ削り，ナデ	北コーナー下層	20%　PL16
13	土師器	高坏	［20.0］	（7.5）	―	石英・赤色粒子・微礫	にぶい黄橙	普通	口縁部ナデ，坏部外面ヘラ削り，内面ナデ	北コーナー下層	40%
14	土師器	高坏	［18.0］	（6.0）	―	石英・赤色粒子	明暗褐	普通	口縁部ナデ，体部内・外面刷毛目調整	東コーナー下層	30%
15	土師器	壺	［16.8］	（5.1）	―	雲母	橙	普通	複合口縁部横ナデ，頸部ヘラ削り	北東壁下層	10%
16	土師器	ミニチュア鉢	8.1	6.7	4.5	雲母	にぶい橙	普通	口縁部ナデ，体部外面輪積痕・ヘラ削り，内面ヘラナデ・輪積痕	北コーナー下層	80%　PL15

第14号住居跡（第28・29図）

位置　調査Ｉ区西部のＨ４a0区で，標高21.5mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状　南東コーナー部を含むおよそ２割は，調査区域外のため規模は不明である。長軸，短軸とも6.5mが確認された。確認された形状から想定される主軸方向はN－８°－Eである。壁高は20～47cmで，ほぼ直立している。

床　東西及び南北方向の耕作による撹乱を受けているが，ほぼ平坦で，Ｐ４北東側と中央部より北側が踏み固められている。また，各壁側から丸材の炭化材や焼土塊が検出されている。

炉　２か所。炉１はＰ２とＰ３を結ぶ線上に位置し，長径48cm，短径30cmの楕円形で，床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉であり，炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。また，炉２は中央部に位置し，確認された長径は33cm，短径17cmで，床面に粘土を貼ったような形状である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉１・２土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子多量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量

ピット　５か所。主柱穴はＰ１～３が相当し，深さは29～35cmである。Ｐ４・５の性格は不明である。

貯蔵穴　北壁側中央部に位置している。長径48cm，短径39cmの楕円形で，深さは38cmである。底面はU字状を呈し，壁はほぼ直立している。

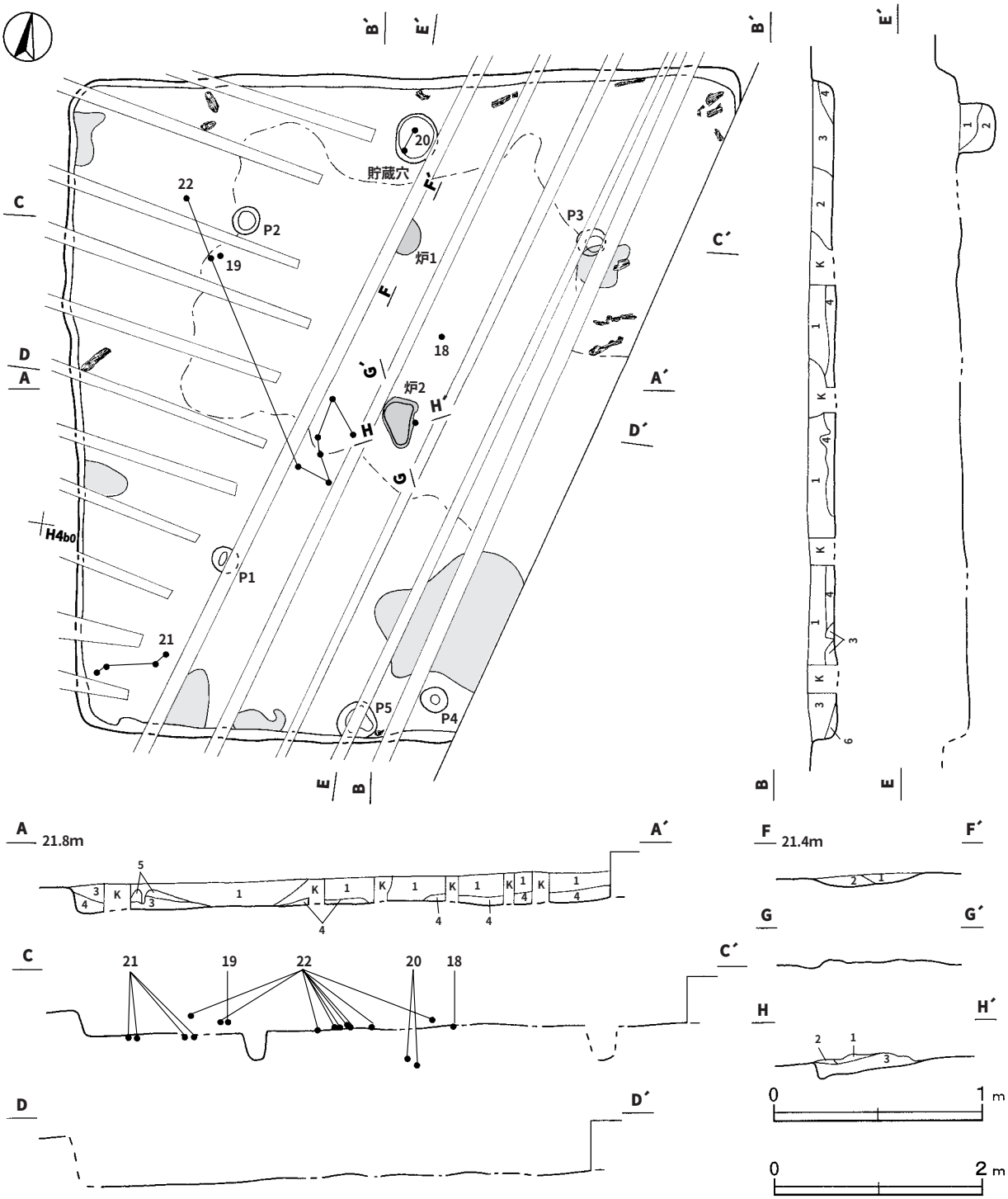
貯蔵穴土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック，炭化物少量

覆土　６層に分層される。耕作による撹乱が見られるが，不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

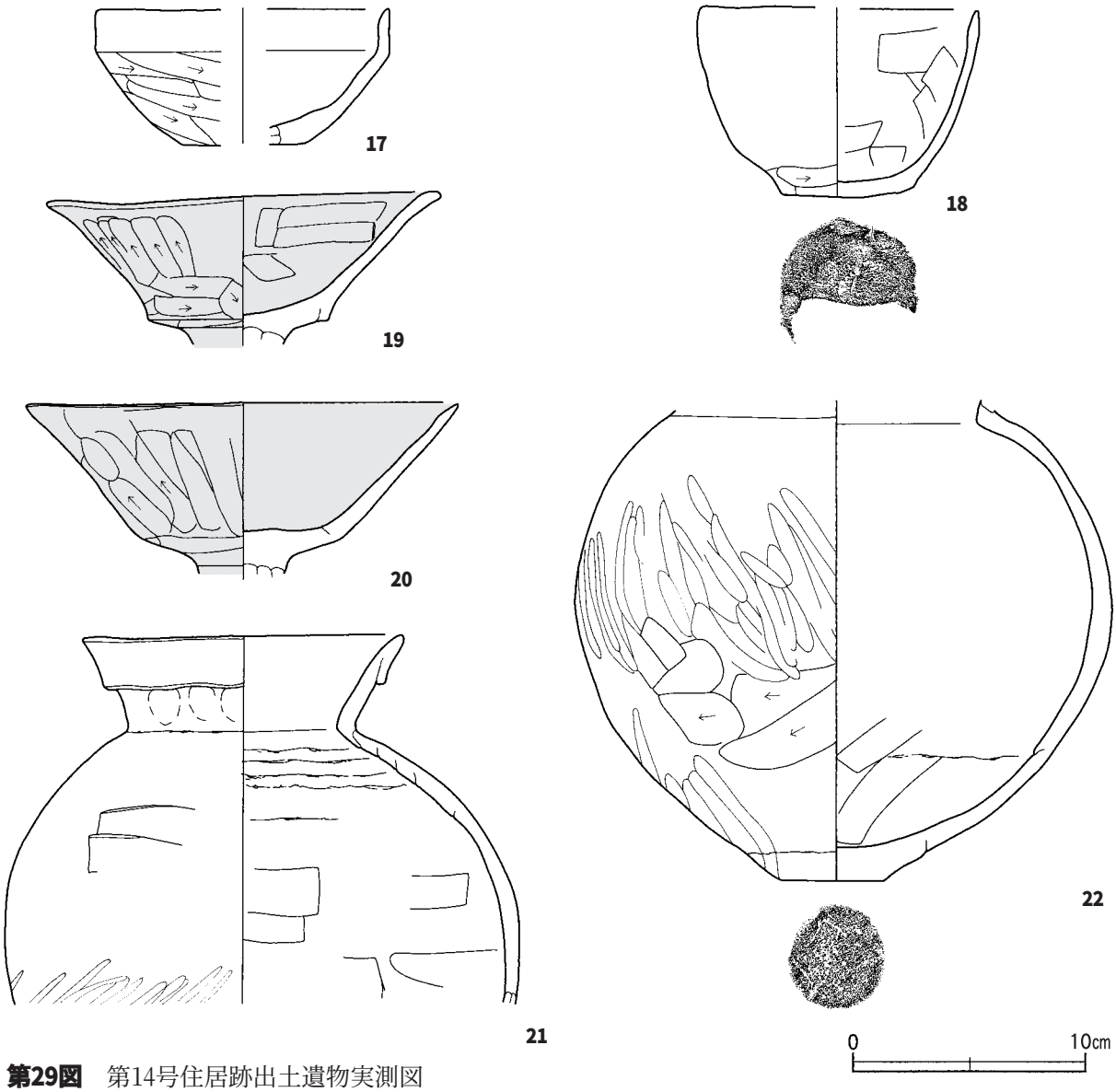
土層解説
1　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化物少量
5　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
6　褐　　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片326点（坏・椀類34，甕類230，高坏42，坩12，鉢８)が出土している。底部片などから推定される個体数は，坏１点，椀１点，甕２点，高坏３点，鉢１点である。17は覆土中，18は中央部の床面，19は北西コーナー寄りの覆土下層，20は貯蔵穴の覆土下層からそれぞれ出土している。また，21は南西コーナー部の床面，22は北西コーナーから中央部の覆土下層及び床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。遺物が散在して出土していることから，廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見　床面からの焼土塊，炭化材や炭化物の存在から焼失住居の可能性が極めて高いと考えられる。廃絶時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられる。



第28図　第14号住居跡実測図



第29図　第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
17	土師器	坏	[12.4]	5.8	5.2	雲母・石英	橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ナデ	覆土中	50%
18	土師器	椀	[11.8]	8.2	5.8	石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部ナデ，体部外面ナデ・ヘラ削り，内面ヘラナデ	中央部床面	40%
19	土師器	高坏	16.8	(6.6)	—	長石・石英・微礫	赤褐	普通	口縁部ナデ，坏部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	北西コーナー下層	40%
20	土師器	高坏	18.5	(7.6)	—	長石・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部ナデ，坏部外面ヘラ削り，内面ナデ	貯蔵穴	40%
21	土師器	壺	13.6	(16.0)	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	複合口縁部横ナデ，体部内・外面ヘラナデ，輪積痕	南西コーナー床面	30%　PL18
22	土師器	甕	—	(20.7)	4.3	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	体部外面上部ヘラ磨き・下部ヘラ削り，内面ヘラナデ	中央部床面	60%　PL18

第15号住居跡（第30・31図）

位置　調査Ⅰ区北西部のＧ４b7区で，標高21.3mの台地縁辺部に位置している。

重複関係　北西コーナー部を第60号土坑に，中央部を第66号土坑に，東部を第67・68号土坑に，北東コーナー部を第120号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　北・西壁側の床面がほぼ露出した状態で検出されたが，床面の状況などから５mほどの方形と推定

され，主軸方向はＮ－65°－Ｅである。壁高は２～16㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部に踏み固められた部分が見られ，南壁の南東コーナー寄りに出入り口部と考えられる高まりがある。出入り口部の高まりと床との比高は，約６㎝である。

炉　床面を精査したが，検出されていない。

貯蔵穴　南東コーナー部に位置している。長径62㎝，短径55㎝の楕円形で，深さは39㎝である。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

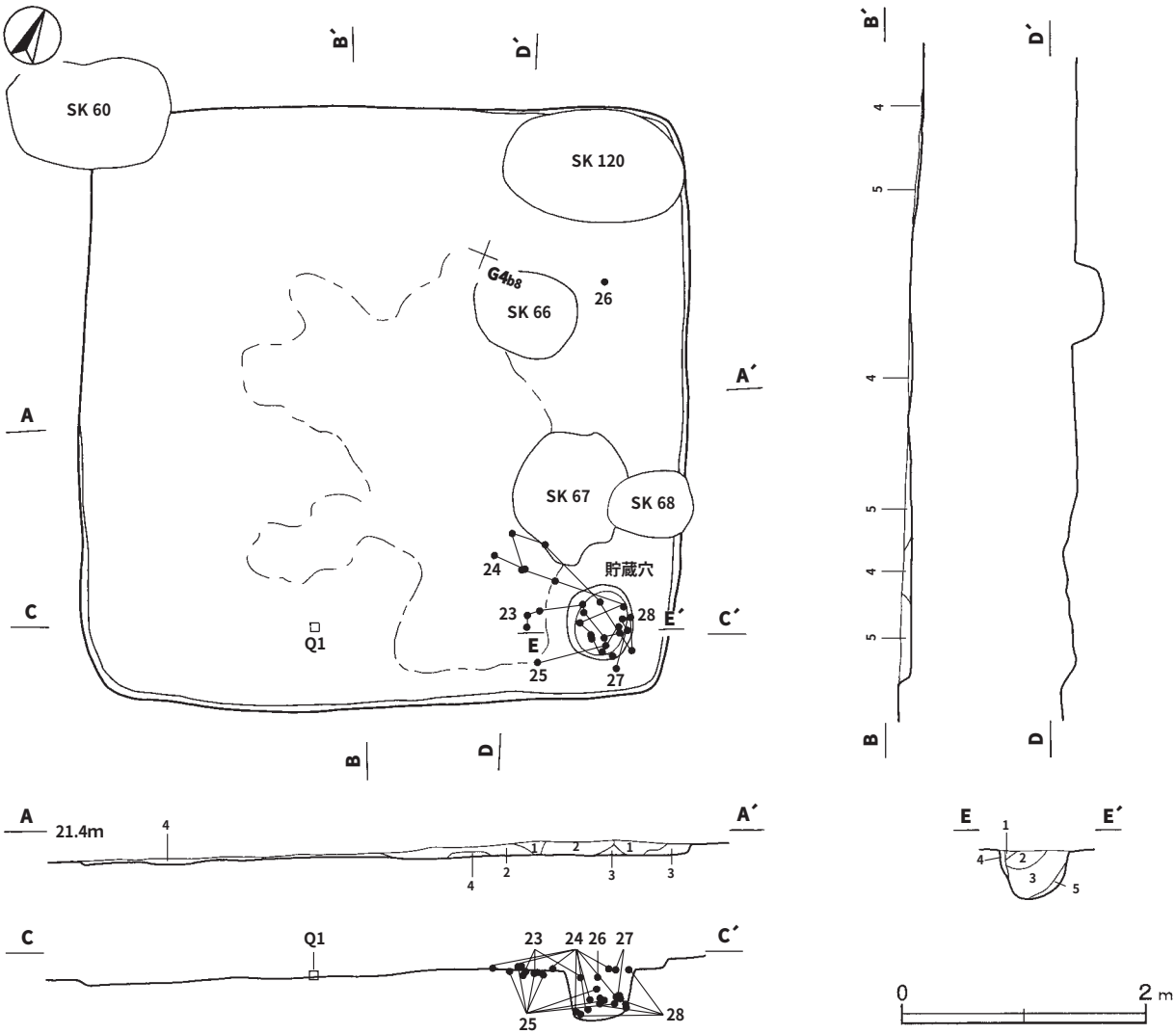
貯蔵穴土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
2　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
4　褐　　色　ローム粒子中量
5　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量

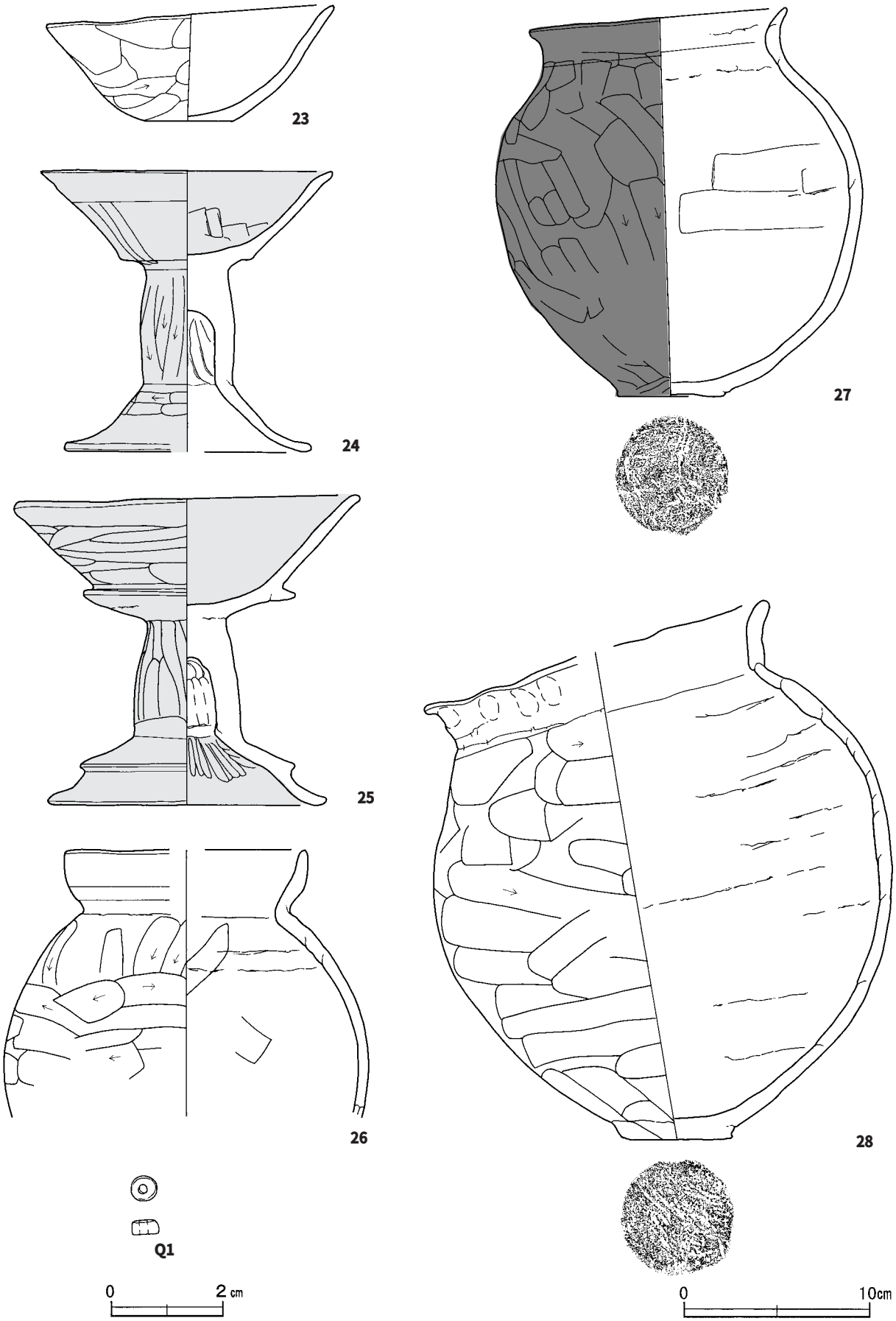
覆土　５層に分層される。薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量
2　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量・焼土粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
5　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量



第30図　第15号住居跡実測図



第31図　第15号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片243点（坏・椀類27，甕類177，高坏39），石製品１点（臼玉）が出土している。底部片などから推定される個体数は，坏１点，甕４点，高坏３点である。23・24・25は貯蔵穴西側の床面と貯蔵穴内の覆土上層から下層までの破片が接合したものである。26は北東コーナー寄りの床面，27・28は貯蔵穴内の覆土上層から下層までの破片がそれそれ接合したものである。Ｑ１が中央部南壁側の床面から出土している。また，28は東側に隣接する第４号溝跡から出土している遺物と接合関係にあることから，第４号溝跡は本跡と関連する施設であると推定される。これらの遺物は散在した状態で出土していることから，廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見　廃絶時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表（第31図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
23	土師器	坏	15.4	6.3	4.6	石英・赤色粒子・微礫	にぶい黄橙	普通	口縁部ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ナデ	東コーナー下層	70%　PL15
24	土師器	高坏	15.6	15.2	［13.3］	長石・石英・微礫	にぶい橙	普通	口縁部ナデ，坏部外面・脚部ヘラ削り，坏部内面ヘラナデ	貯蔵穴	80%　PL16
25	土師器	高坏	18.2	16.7	15.0	長石・石英・微礫	にぶい橙	普通	口縁部ナデ，坏部外面・脚部ヘラナデ，内面ナデ	貯蔵穴	95%　PL16
26	土師器	壺	［12.8］	(14.4)	―	長石・石英・微礫	橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ・輪積痕	東コーナー床面	25%　PL18
27	土師器	甕	13.7	20.9	5.6	長石・石英・微礫	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	貯蔵穴	90%　PL18
28	土師器	甕	18.2	29.2	6.0	長石・微礫	にぶい褐	普通	口縁部指頭痕，体部外面ヘラ削り，内面輪積痕	貯蔵穴，第４号溝	60%　PL18

番号	器　種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	臼玉	0.5	0.3	0.2	0.1	滑石	側面は円筒状，片面穿孔	南壁床面	PL21

第16号住居跡（第32・33図）

位置　調査Ⅱ区南部のＢ１f9区で，標高20.1mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状　北西コーナー及び南西コーナー部を含む住居跡のおよそ３割は調査区域外のため，全体の規模は不明である。長軸5.7m，短軸4.0mが確認された。北・東・南壁の形状から想定される主軸方向はN－８°－Wである。壁高は37～44cm，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，南壁の南東コーナー寄りの出入り口部と考えられる高まりから炉２にかけての中央部が踏み固められている。出入り口部の高まりは貯蔵穴を弧状に囲み，床との比高は約10cmである。壁溝は北壁側中央部を除いて，北壁側のみに存在する。また，東壁側に長さ105cmと125cmで，幅30cm，深さ16cmの間仕切り溝が２条確認された。東壁際からは焼土塊が検出されている。

炉　２か所。炉１は中央部に位置し，長径38cm，短径35cmの円形の地床炉で，周りの床面と同じ高さで硬化していることから，炉２より先に使用されなくなったと考えられる。また，炉２はＰ１の西側，北壁側中央部に位置し，長径84cm，短径70cmの楕円形で，床面を12cmほど掘りくぼめた地床炉であり，炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉２土層解説

１　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子中量，ローム粒子少量　　２　暗　褐　色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子少量

ピット　２か所。主柱穴はＰ１が相当し，深さは74cmである。Ｐ２は深さ23cmで性格は不明である。

貯蔵穴　南東コーナー部に位置している。径55cmほどの円形で，深さは39cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

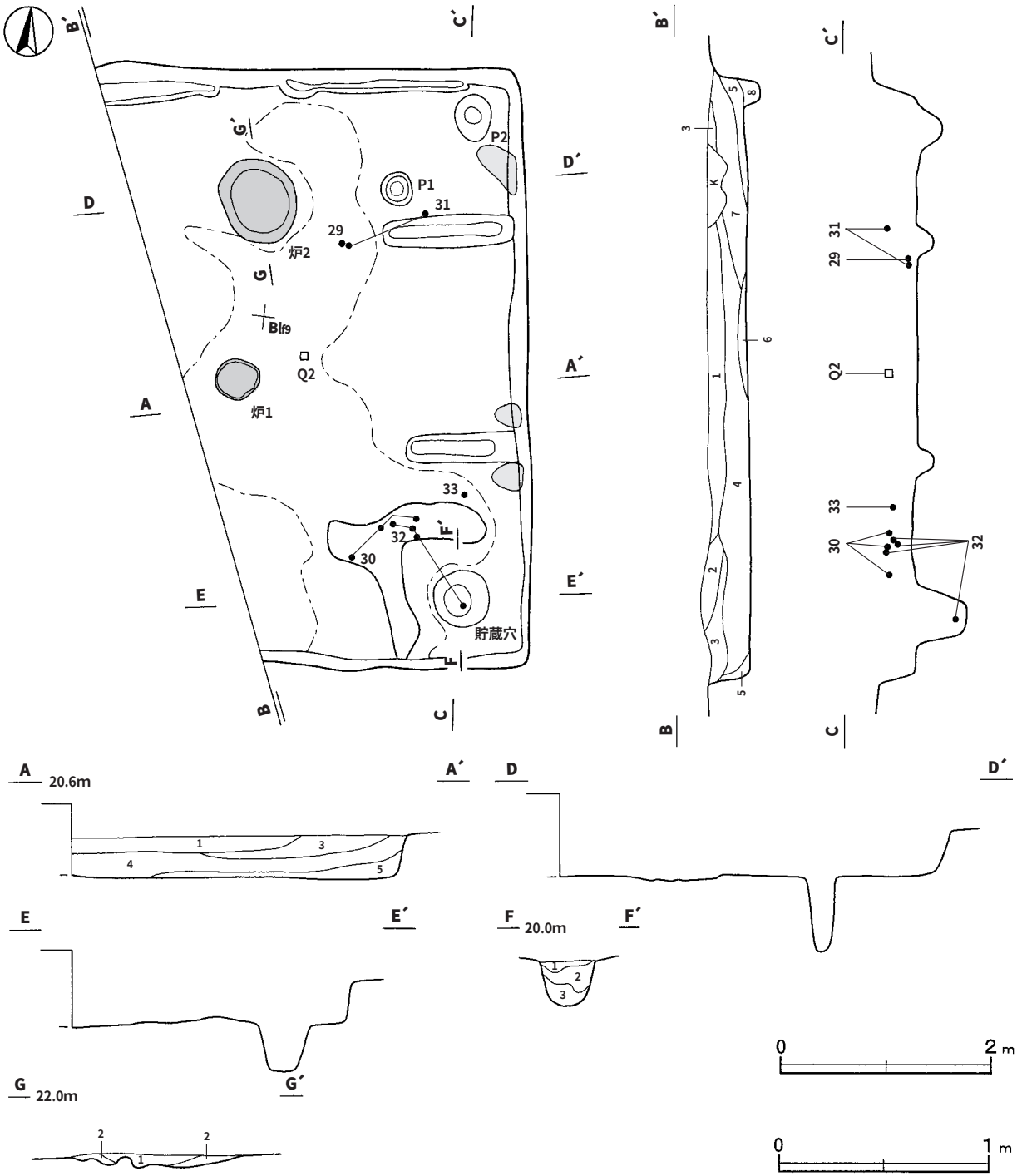
貯蔵穴土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　黒　褐　色　褐色粘土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量

覆土　８層に分層される。ロームブロックを少量から中量含み，不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

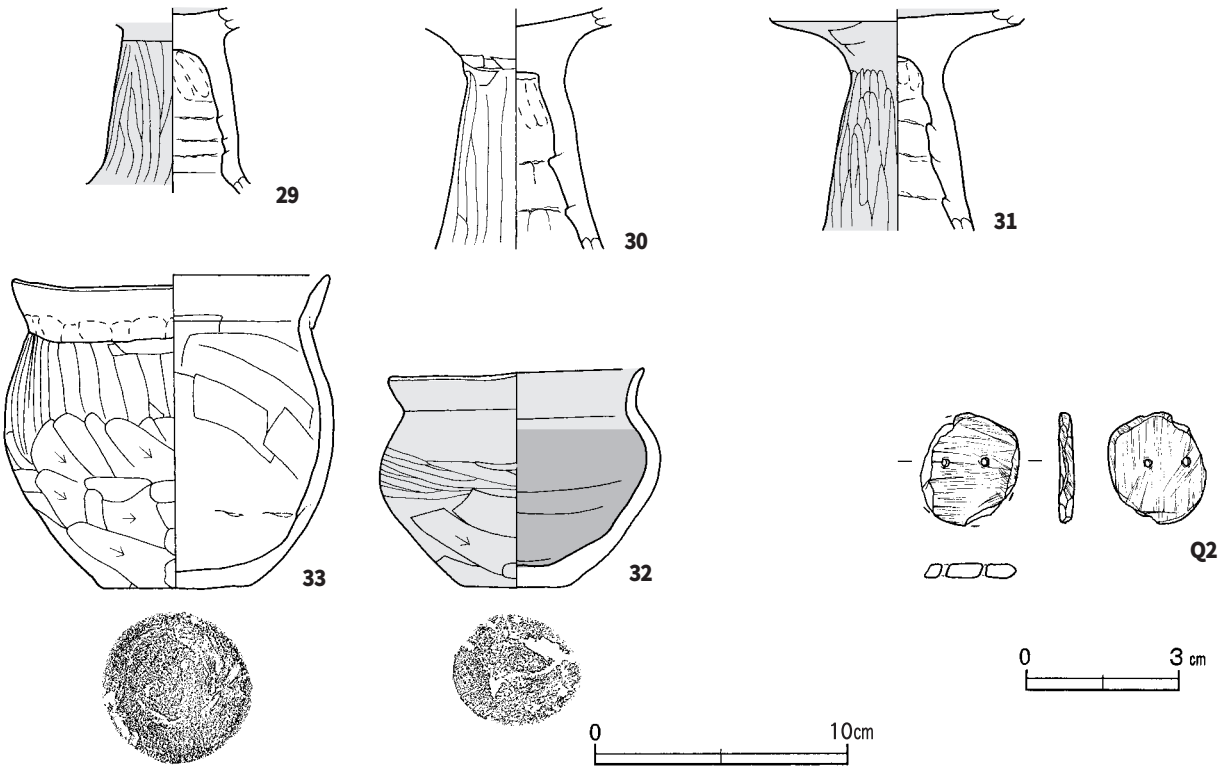
1　黒　　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
2　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
4　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
5　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
6　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
7　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
8　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子中量，焼土粒子少量



第32図　第16号住居跡実測図

遺物出土状況　土師器片688点（坏・椀類104，甕類367，高坏198，坩19），石製品１点（双孔円板）が出土している。底部片などから推定される個体数は，甕14点，高坏６点である。29は炉２東側の覆土下層，33は東壁側の覆土中層からそれぞれ出土している。31は北東コーナー寄りの覆土中層と下層，30は南東コーナー付近の覆土中層，32は貯蔵穴付近の覆土中層と貯蔵穴内から出土した破片が接合したもので，廃絶時に投棄された状況を示している。Ｑ２は中央部の覆土中層から出土している。

所見　炭化材は検出されていないものの，壁際から焼土塊が出土している状況から本跡は焼失住居の可能性が考えられる。廃絶時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられる。



第33図　第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
29	土師器	高坏	―	(7.3)	―	石英・赤色粒子	赤褐	普通	脚部外面ヘラ磨き，内面輪積痕・指頭痕	北東コーナー下層	20%
30	土師器	高坏	―	(9.5)	―	石英・赤色粒子	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き，内面輪積痕・指頭痕	南東コーナー中層	30%
31	土師器	高坏	―	(8.8)	―	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ磨き，内面輪積痕・指頭痕	北東コーナー下層	30%
32	土師器	椀	10.1	8.7	4.2	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部ナデ，体部外面ヘラ磨き・ヘラ削り，内面ヘラナデ・炭化物付着	貯蔵穴	70%　PL15
33	土師器	甕	12.4	12.5	5.9	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部指頭痕，体部外面ヘラナデ・ヘラ削り，内面ヘラナデ・輪積痕	東壁中層	98%　PL15

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	双孔円板	2.2	(1.9)	0.3	(2.3)	滑石	孔径0.15，両面斜位の研磨，片面穿孔	中央部中層	PL21

第17Ａ号住居跡（第34・35図）

位置　調査Ⅱ区中央部のＢ１c0区で，標高20.1mの台地縁辺部に位置している。

重複関係　第17Ｂ号住居跡を北側に32㎝，西側に24㎝拡張している。

規模と形状　長軸4.0m，短軸3.0mの長方形で，主軸方向はＮ－78°－Ｅである。壁高は42～48㎝で，外傾して

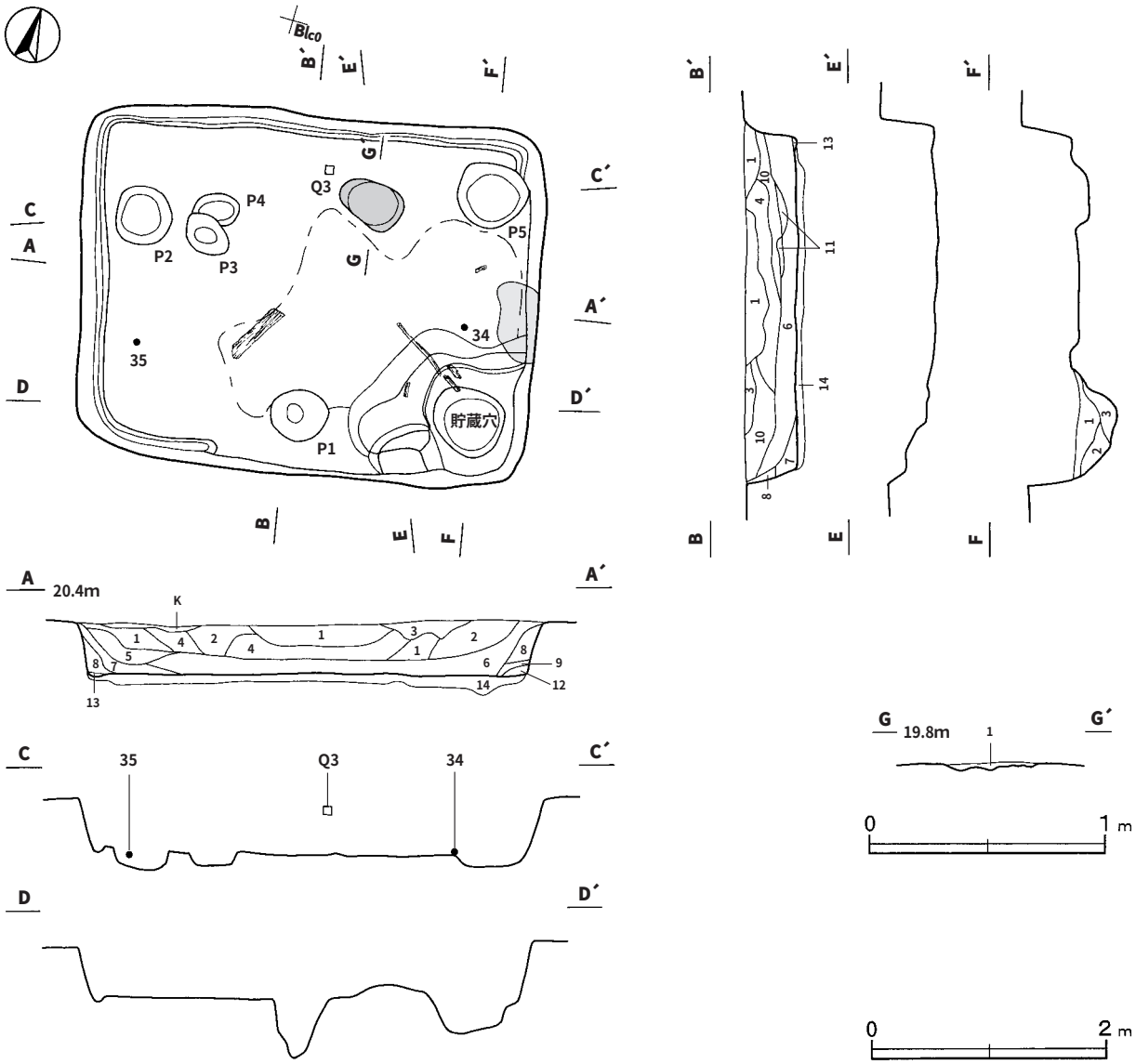
立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部及び東側は踏み固められている。床は大部分が貼床である。ロームブロックや炭化物を含む黒褐色土（覆土土層断面図，第14層）を６～17㎝ほど埋め土して作られている。南壁の南東コーナー寄りに出入り口部と考えられる階段状の高まりがあり，その下の段が貯蔵穴を弧状に囲繞している。上の段の高まりと床との比高は約28㎝，下の段の高まりと床との比高は約14㎝である。また，中央部や東壁側から丸材の炭化材や焼土塊が検出されている。

炉　中央部からやや北壁寄りに位置し，長径58㎝，短径37㎝の楕円形である。床面を６㎝ほど浅い皿状に掘りくぼめた地床炉であり，炉床面は火熱で赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，炭化物・ローム粒子少量

ピット　５か所。Ｐ１は主柱穴と考えられ，深さは約50㎝である。また，Ｐ２～５は深さ８～15㎝であるが，性格は不明である。



第34図　第17Ａ号住居跡実測図

貯蔵穴　南東コーナー部に位置している。長径65㎝，短径55㎝の楕円形で，深さは25㎝である。底面はU字状で，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量

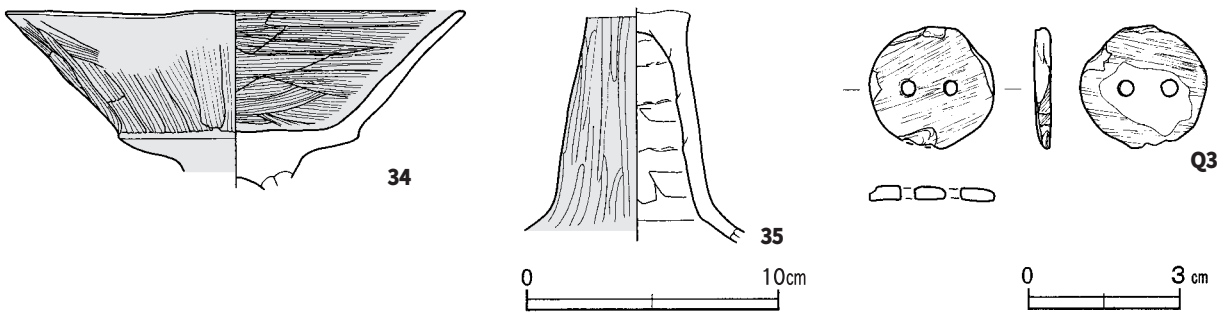
覆土　14層に分層される。不規則な堆積状況を示した人為堆積である。第14層は，貼床の構築土である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
4　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子中量，焼土粒子少量
5　黒　褐　色　炭化粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量
6　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物中量，焼土ブロック少量
7　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子中量，ローム粒子少量
8　極暗褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
9　暗　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子中量
10　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物中量，焼土粒子少量
11　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
12　暗赤褐　色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
13　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量
14　黒　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化物少量

遺物出土状況　土師器片291点（坏・椀類33，甕類184，高坏74），石製品１点（双孔円板）が出土している。底部片などから推定される個体数は，甕１点，高坏４点である。34は東壁側中央部の床面，35は西壁側南東コーナー寄りの床面からそれぞれ出土している。Q３は北壁側中央部の覆土上層から出土している。

所見　床面からの焼土塊，炭化材や炭化物の存在から，本跡は焼失住居の可能性が極めて高いと考えられる。時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられる。



第35図　第17Ａ号住居跡出土遺物実測図

第17A号住居跡出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
34	土師器	高坏	18.2	(7.0)	―	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部ナデ，体部内・外面刷毛目調整	東壁床面	50%　PL16
35	土師器	高坏	―	(9.3)	―	長石	にぶい赤褐	普通	脚部外面ヘラ磨き，内面輪積痕	西壁床面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	双孔円板	2.4	2.5	0.3	(2.8)	滑石	孔径0.3，両面斜位の研磨，片面穿孔	北壁上層	PL21

第17Ｂ号住居跡（第36図）

位置　調査Ⅱ区中央部のＢ１c0区で，標高20.1mの台地縁辺部に位置している。

重複関係　第17Ａ号住居に上部を掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.7m，短軸2.7mの長方形で，主軸方向はＮ－78°－Ｅである。壁高は東壁と南壁が50㎝で，北壁と西壁は第17Ａ号住居に拡張されているため８㎝ほどである。各壁とも外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部及び炉の周りが弧状に踏み固められている。南壁の南東コーナー寄りに出入り口部と考えられる階段状の高まりがあり，その下の段が貯蔵穴を弧状に囲繞している。下の段の高まりと床との比高は，

約20cmである。また，西壁側に長さ90cm，幅24cm，深さ6cmと長さ64cm，幅26cm，深さ6cmの間仕切り溝が２条確認された。

階段状出入り口部土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子中量
4　黒　褐　色　炭化粒子中量，ロームブロック少量
5　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
6　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子中量
7　褐　　色　ロームブロック・炭化粒子少量

炉　中央部の北壁寄りに位置し，長径48cm，短径42cmの楕円形である。床面を10cmほど浅い皿状に掘りくぼめた地床炉で，炉床面は火熱でわずかに赤変硬化している。

炉土層解説

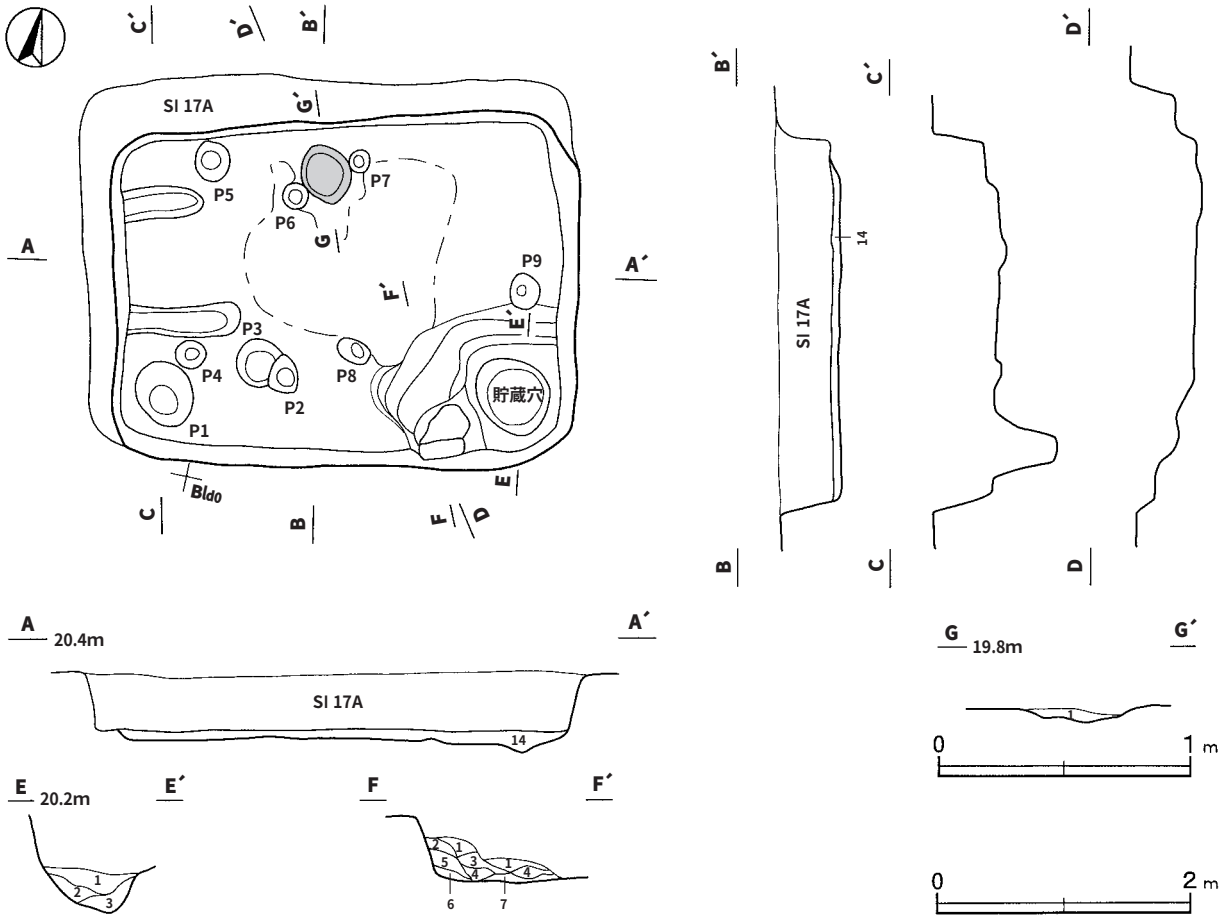
1　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子中量，ローム粒子少量

ピット　９か所。Ｐ１は主柱穴と考えられ，深さは50cmである。Ｐ６・７は，炉を挟んで対称的な場所に設置されていることから，炉に付随するピットの可能性が考えられる。また，Ｐ２～５，Ｐ８・９は深さ８～21cmであるが性格は不明である。

貯蔵穴　南東コーナー部に位置している。第17Ａ号住居と共有していると考えられる。

遺物出土状況　土師器片22点（坏・椀類５，甕類17）が出土している。拡張のため遺物の数も少なく，いずれも細片のために図示することはできなかった。

所見　時期は本跡を拡張して第17Ａ号住居を構築していることや出土土器などから，中期（５世紀前葉）と考えられる。



第36図　第17Ｂ号住居跡実測図

第18号住居跡（第37図）

位置　調査Ⅱ区中央部のＢ１c8区で，標高20.2mの台地縁辺部に位置している。

重複関係　東コーナー部で第13号陥し穴を掘り込み，北コーナー部を第112号土坑に，西コーナー周辺を第113・126号土坑に，南コーナー周辺を第130・144号土坑に，東コーナー部を第118号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.0m，短軸2.7mの長方形で，主軸方向はＮ－30°－Ｅである。壁高は２～８㎝で，外傾して緩やかに立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。炉の周辺や南東コーナー寄りの出入り口部と考えられる高まりと，その北側が踏み固められている。出入り口部の高まりと床との比高は，約７㎝である。

炉　中央部の北東壁寄りに位置し，長径52㎝，短径43㎝の楕円形で，床面を20㎝ほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱でわずかに赤変硬化している。

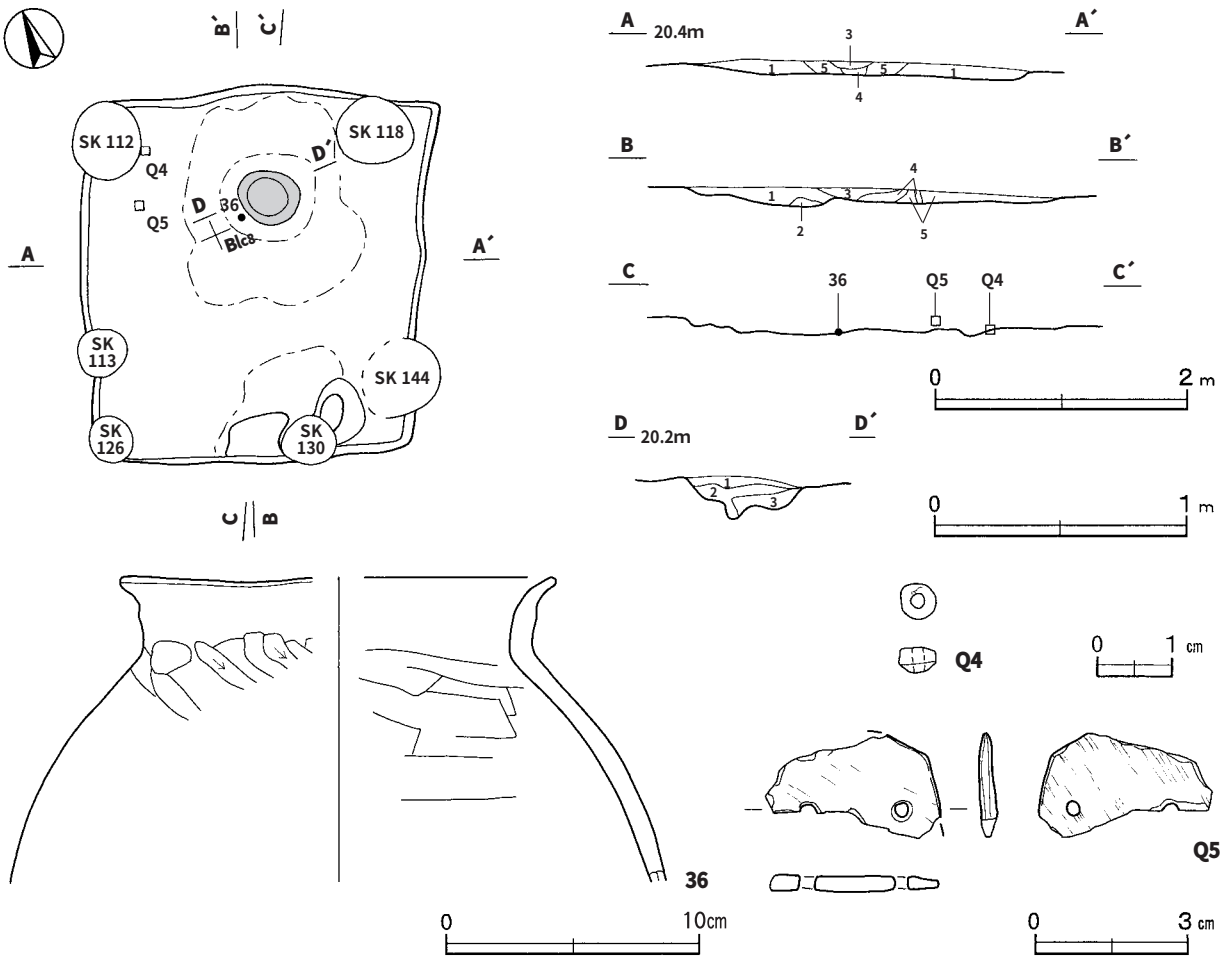
炉土層解説

1　暗 赤 褐 色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
2　にぶい赤褐色　焼土ブロック・ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量

覆土　５層に分層される。薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量



第37図　第18号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片485点（坏・椀類30，甕類414，高坏40，鉢１），石製品２点（双孔円板１，臼玉１）が出土している。底部片などから推定される個体数は，高坏２点，甕２点，鉢１点である。36は炉の西側，Ｑ４・５は北側コーナー近くの床面からそれぞれ出土している。他の遺物は，いずれも細片のため図示できなかった。

所見　時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
36	土師器	甕	［17.0］	(12.2)	―	石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	炉西側床面	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	臼玉	0.5	(0.3)	0.2	(0.1)	滑石	側面は円筒状，片面穿孔，一部欠損	北コーナー床面	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q5	双孔円板	(3.4)	(2.1)	0.3	(2.7)	滑石	孔径0.3，両面斜位の研磨，両面穿孔，1/2欠損	北コーナー床面	PL21

第19号住居跡（第38～40図）

位置　調査Ⅱ区中央部のＢ１a8区で，標高20.1mの台地縁辺部に位置している。

重複関係　中央部東側を第135号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸6.4m，短軸5.8mの長方形で，主軸方向はN－72°－Wである。壁高は７～12cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，南コーナー寄りの出入り口部と考えられる高まりとその北側が踏み固められている。出入り口部の高まりと床との比高は，約６cmである。壁溝は東壁と南コーナー，東コーナー部を除いて検出され，上幅14～24cm，深さ７～10cmで，断面形はU字状を呈している。また，東壁側に長さ120cm，幅22cm，深さ14cmの間仕切り溝が１条，北壁側に長さ100cm，幅30cm，深さ12cmと長さ130cm，幅30cm，深さ16cmの間仕切り溝が２条確認された。

炉　中央部の西壁寄りのＰ３とＰ４を結んだ線より西側に位置し，長径70cm，短径52cmの楕円形で，床面を６cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面はわずかに赤変硬化している。

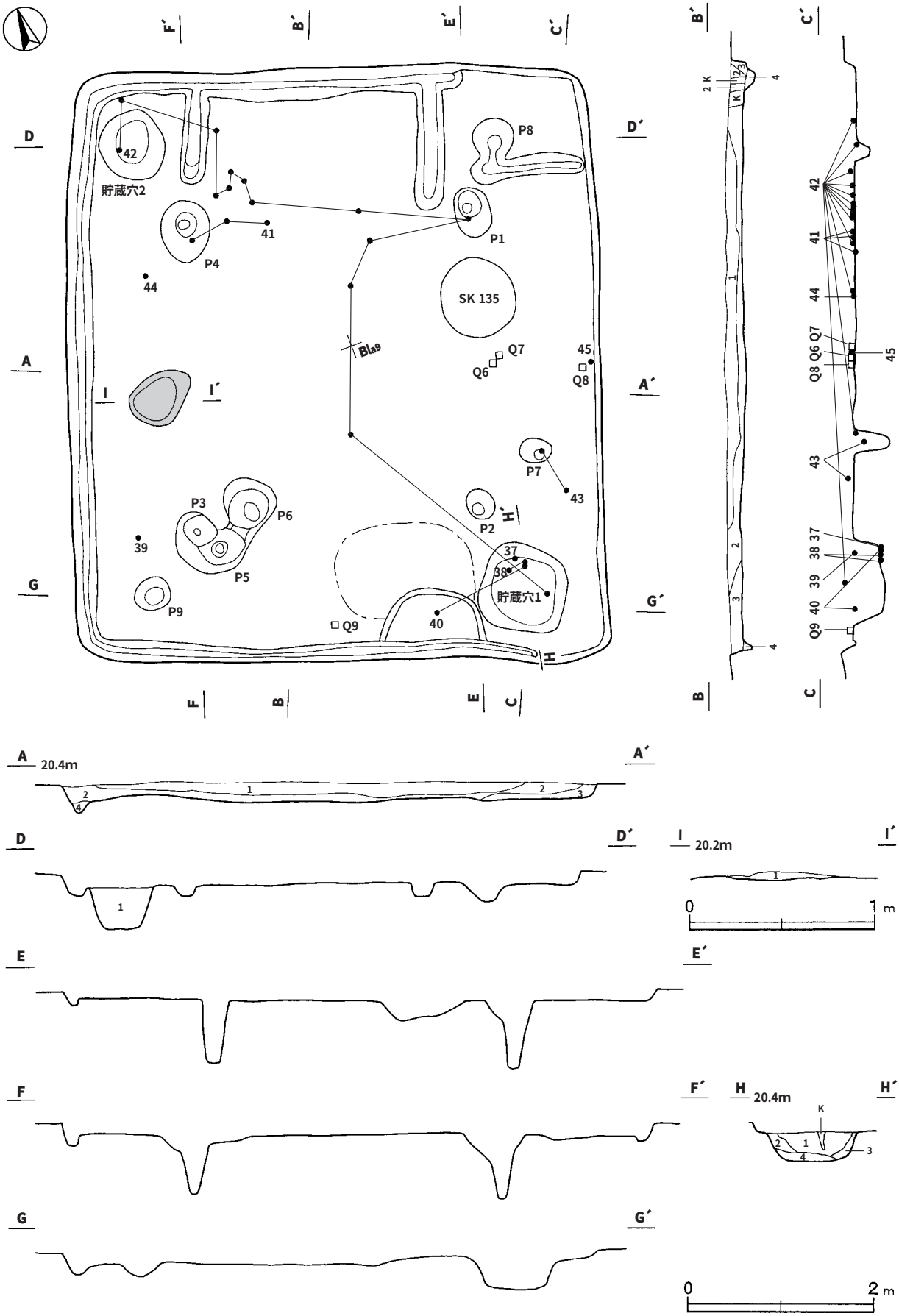
炉土層解説
1　にぶい赤褐　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量

ピット　９か所。主柱穴はＰ１～４が相当し，深さは61～72cmである。Ｐ５は深さ60cmで，Ｐ３の覆土を切るような形で検出されたことから，建て替えが行われたことが想定される。Ｐ８は深さ20cmで，間仕切り溝とつながっていることから，それに伴うピットと考えられる。Ｐ６・７・９は，深さが13～32cmであるが，性格は不明である。

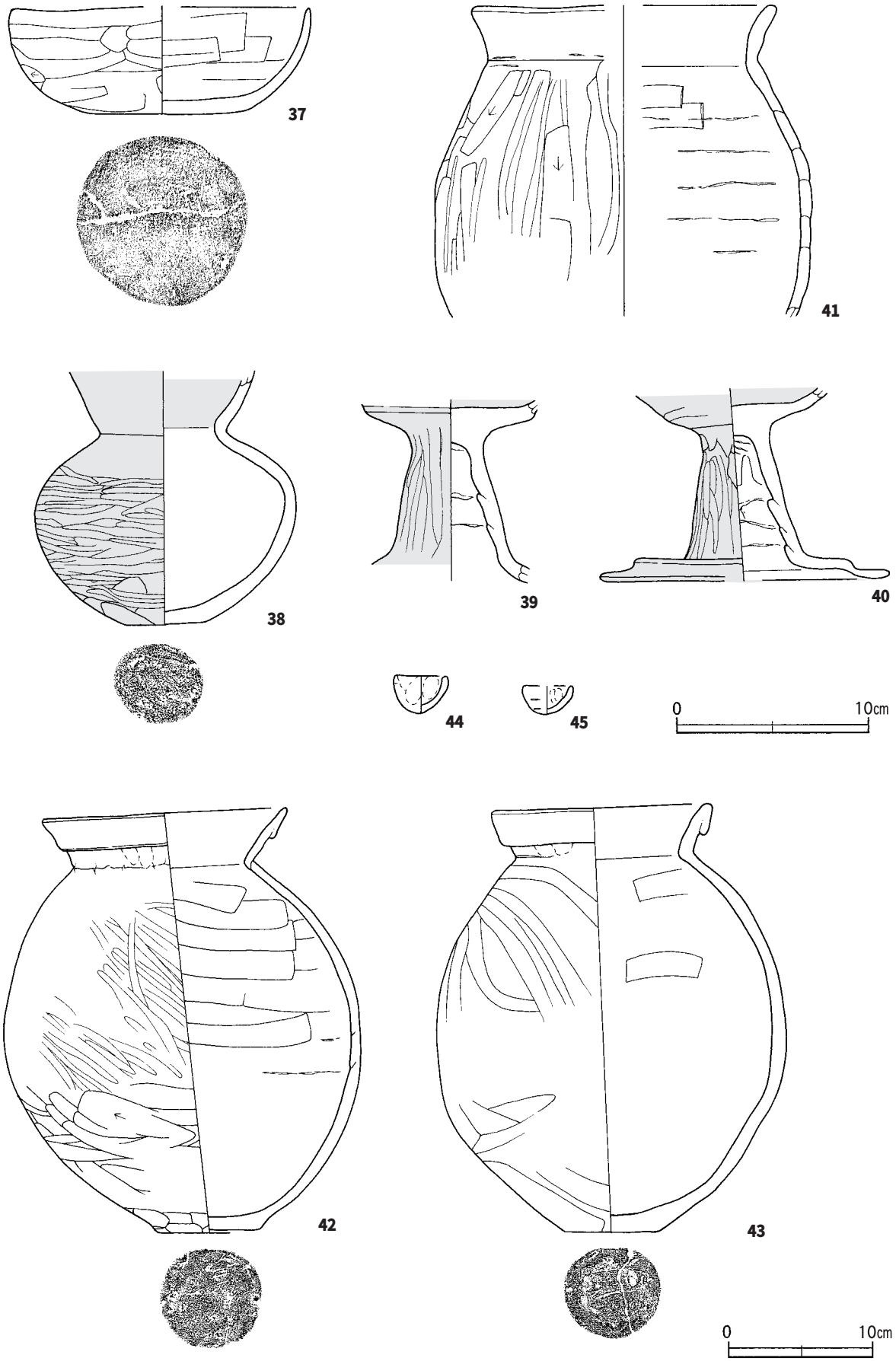
貯蔵穴　２か所。貯蔵穴１は南コーナー部に位置し，一辺が92cmの方形で，深さは34cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴２は北コーナー部に位置し，長径76cm，短径68cmの楕円形で，深さは46cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴１土層解説
1　黒　褐　色　炭化物・ローム粒子少量
2　黒　褐　色　炭化物・ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物中量
4　黒　褐　色　炭化物中量，ローム粒子・焼土粒子少量

貯蔵穴２土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量



第38図　第19号住居跡実測図



第39図　第19号住居跡出土遺物実測図(1)

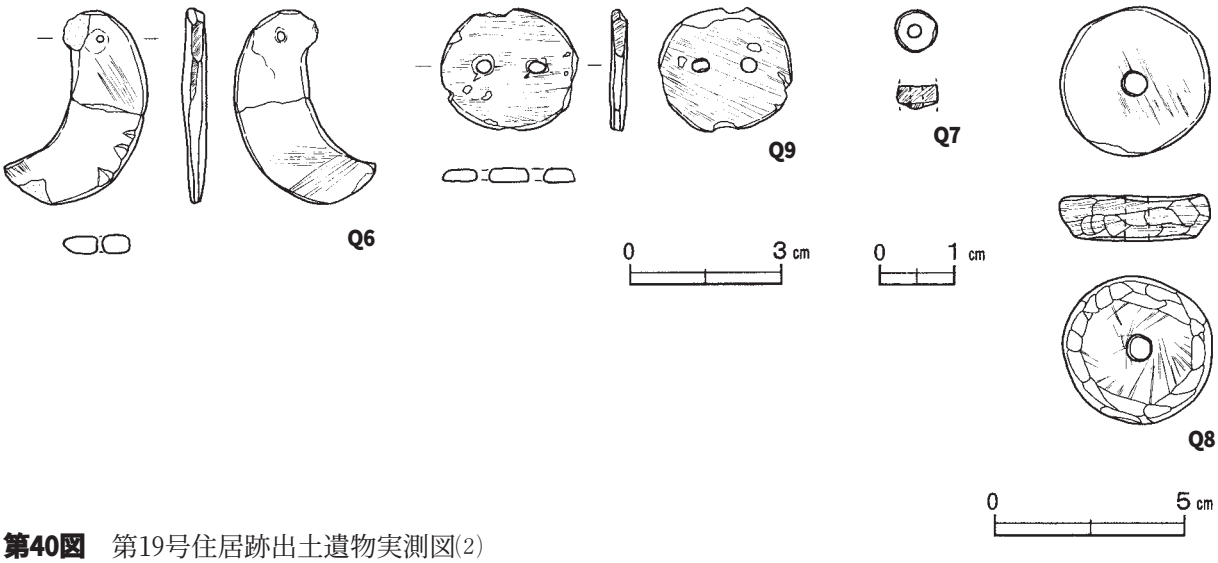
覆土　４層に分層される。ロームブロックを少量含み，埋め戻されたような状態を示すことから人為堆積である。

土層解説

1	黒		色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	3	暗　褐	色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
2	黒　褐		色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	4	暗　褐	色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片892点（坏・椀類66，甕類695，高坏123，坩６，ミニチュア椀２），石製品４点（勾玉１，双孔円板１，臼玉１，紡錘車１）が出土している。底部片などから推定される個体数は，坏２点，高坏６点，甕13点，坩２点，ミニチュア椀２点である。37・38は貯蔵穴１の底面，39は西コーナー付近，44は北コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。40は貯蔵穴１西側の床面と底面から出土した破片が，43は東壁際の覆土下層とＰ７内から出土した破片がそれぞれ接合したものである。また，41・42・Ｑ６～８は床面から散在して出土しており，本跡廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見　廃絶時期は，出土土器から中期（５世紀中葉）と考えられる。



第40図　第19号住居跡出土遺物実測図(2)

第19号住居跡出土遺物観察表（第39・40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
37	土師器	坏	[15.4]	5.5	9.0	石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	貯蔵穴１	60%　PL15
38	土師器	坩	—	(13.2)	4.2	石英	赤	普通	体部外面ヘラ磨き，下部ヘラ削り，内面ナデ	貯蔵穴１	90%　PL17
39	土師器	高坏	—	(9.5)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ磨き，内面輪積痕	西コーナー床面	30%
40	土師器	高坏	—	(10.1)	[13.8]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	脚部外面ヘラ磨き，内面輪積痕	貯蔵穴１	50%
41	土師器	甕	[15.6]	(16.2)	—	石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ・輪積痕	北コーナー床面	30%
42	土師器	甕	16.5	29.3	6.8	長石・雲母・微礫	にぶい橙	普通	複合口縁部横ナデ，頸部指頭痕，体部外面ヘラ磨き・ヘラ削り，内面ヘラナデ，輪積痕	中央部床面	60%　PL17
43	土師器	甕	15.0	29.5	6.2	石英・微礫・赤色粒子	橙	普通	複合口縁部横ナデ，頸部指頭痕，体部外面剥離，内面ヘラナデ	東壁下層	70%　PL17
44	土師器	ミニチュア椀	2.6	2.0	—	石英	にぶい黄橙	普通	体部内・外面指頭痕	北コーナー床面	100%　PL15
45	土師器	ミニチュア椀	[2.5]	1.5	—	石英	にぶい黄橙	普通	体部内・外面指頭痕	東壁床面	80%　PL15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q6	勾玉	3.9	2.8	0.4	4.6	滑石	孔径0.15，両面斜位の研磨，両面穿孔，剥離痕	中央部床面	PL21
Q9	双孔円板	2.5	2.6	0.4	3.7	滑石	孔径0.3，両面横位，斜位の研磨，片面穿孔	南壁床面	PL21

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q7	臼玉	0.55	(0.3)	0.4	(0.1)	滑石	側面は円盤状，片面穿孔	中央部床面	PL21
Q8	紡錘車	4.0	1.2	0.7	32.1	滑石	下面に微細な線刻，側面に工具による調整痕	東壁床面	PL21

第20号住居跡（第41・42図）

位置　調査Ⅱ区西部のＡ１j5区で，標高20.1mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状　南西コーナー部を含むおよそ１割は，調査区域外のため規模は不明である。長軸7.0m，短軸6.9mが確認された。確認された形状から想定される主軸方向はN－74°－Wである。壁高は10～16cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，炉の周辺を含めた中央部及び南コーナー寄りの出入り口部と考えられる高まりと，その北側が踏み固められている。出入り口部の高まりと床との比高は，約６cmである。壁溝は全周しており，上幅16～22cm，深さ12～24cmで，断面形はU字状を呈している。また，東壁側に長さ144cm，幅30cm，深さ16cmと長さ130cm，幅34cm，深さ12cmの間仕切り溝が２条，南壁側に長さ160cm，幅22cm，深さ12cmと長さ135cm，幅30cm，深さ22cmの間仕切り溝が２条，北壁側に長さ182cm，幅28cm，深さ10cmと長さ120cm，幅35cm，深さ10cmの間仕切り溝が２条確認された。

炉　Ｐ３とＰ４を結ぶ線上に位置し，長径130cm，短径102cmの不整楕円形で，床面を10cm掘りくぼめた地床炉であり，炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量

ピット　９か所。主柱穴はＰ１～４が相当し，深さは48～73cmほどである。Ｐ８は深さ42cmで炉に隣接して設置され，ピットと炉の間に硬化面が存在しないことから，炉に付随するピットの可能性が考えられる。Ｐ９は深さ22cmで，間仕切り溝とつながっていることから，それに伴うピットと考えられる。Ｐ５～７は深さが15～54cmであるが，性格は不明である。

貯蔵穴　南コーナー部に位置し，長軸106cm，短軸92cmの楕円形で，深さは50cmである。底面はU字状で，壁は外傾して立ち上がっている。

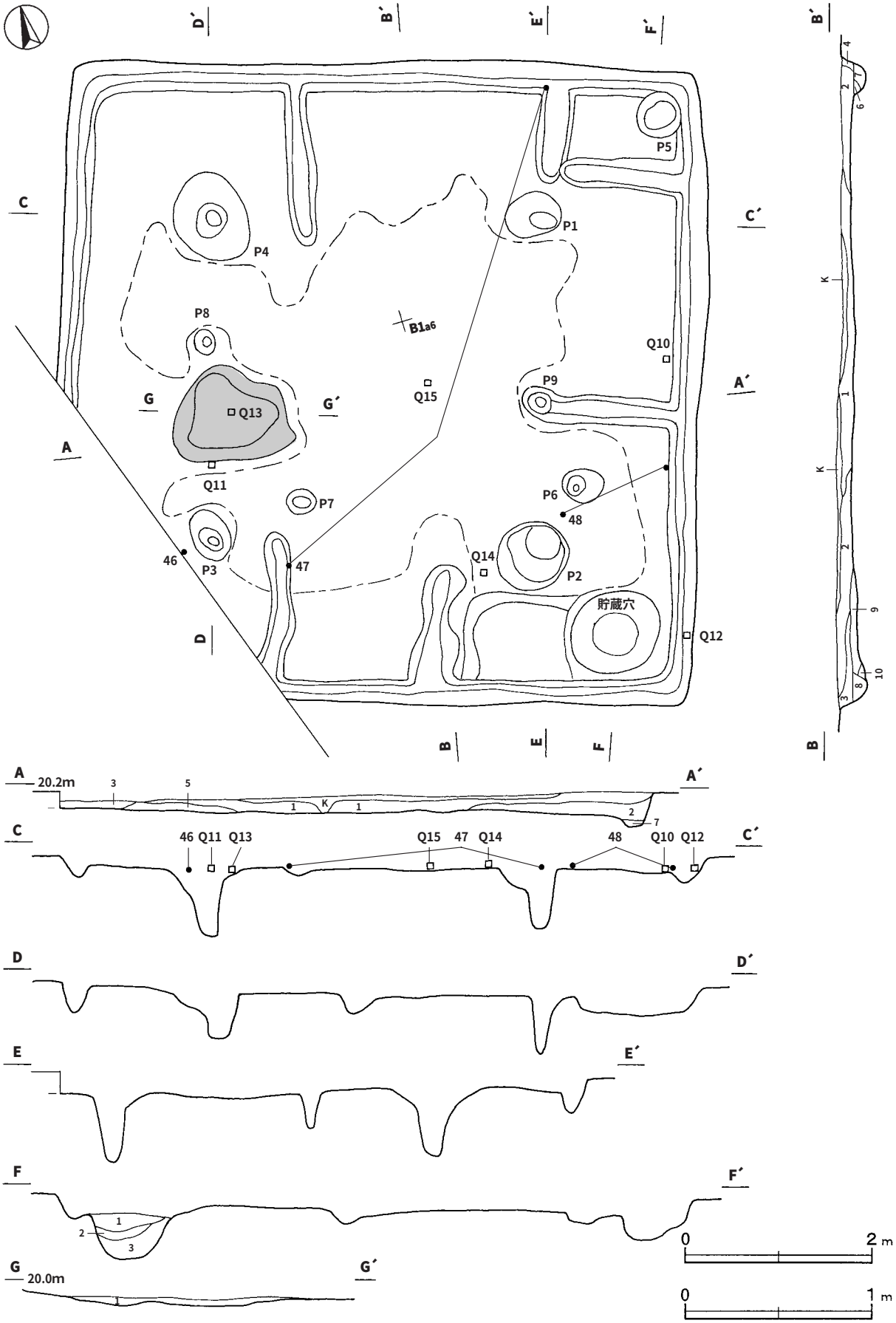
貯蔵穴土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　灰　褐　色　ロームブロック・粘土粒子少量
3　黒　褐　色　粘土ブロック少量，ローム粒子微量

覆土　10層に分層される。耕作による撹乱が見られるが，不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

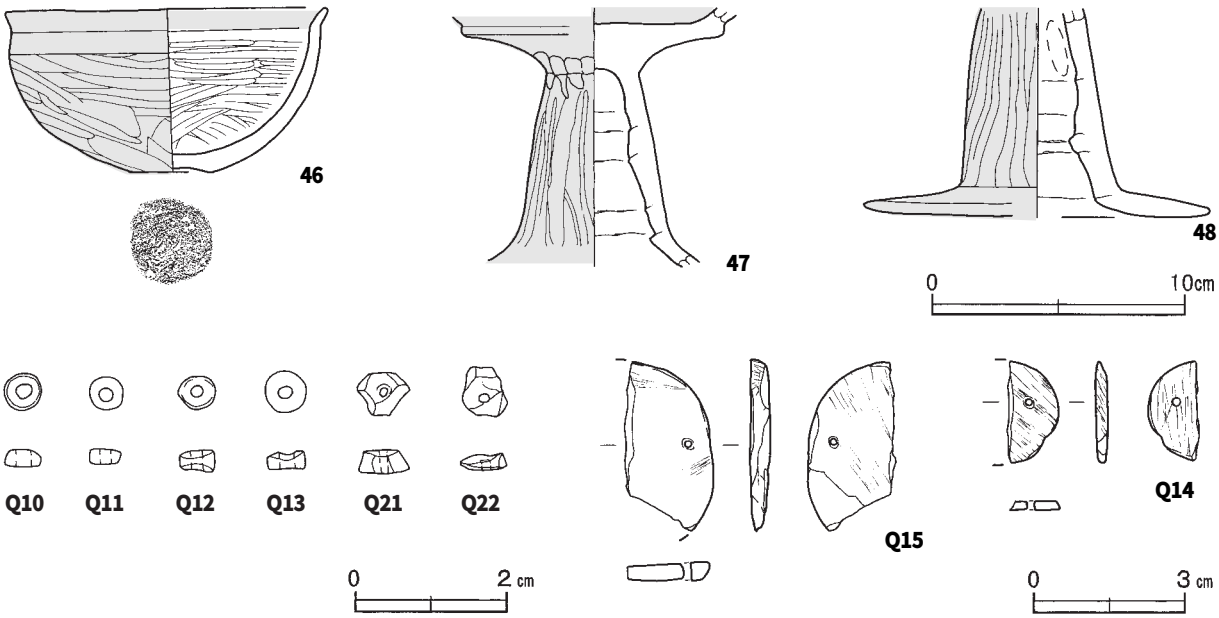
土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　極 暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量
4　褐　　色　ローム粒子中量
5　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
6　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
7　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
8　褐　　色　焼土粒子中量，ロームブロック少量
9　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量
10　褐　　色　焼土粒子中量，ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片1199点（坏・椀類249，甕類815，高坏115，坩20），石製品６点（双孔円板２，臼玉４）が出土している。底部片などから推定される個体数は，椀１点，甕11点，高坏10点，坩１点である。47・48・Q10～15は床面からそれぞれ散在して出土している上に，図示できなかったが滑石の破片（227片，60ｇ，４㎜以上の破片のみ採取）が住居南側から多く出土していることなどから，これらは廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見　廃絶時期は，出土土器から中期（５世紀中葉）と考えられる。また，出土した石製品や破片から，近隣に石製品工房跡の存在がうかがえる。



第41図　第20号住居跡実測図



第42図　第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表（第42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
46	土師器	椀	12.6	6.6	3.3	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ，体部内・外面ヘラ磨き	炉南側床面	70%　PL15
47	土師器	高坏	―	(10.3)	―	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	脚部外面ヘラ磨き，内面輪積痕	南壁床面	30%
48	土師器	高坏	―	(8.2)	(13.8)	石英・赤色粒子・微礫	明赤褐	普通	脚部外面ヘラ磨き，内面輪積痕・指頭痕	東壁床面	30%

番号	器　種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	臼玉	0.49	0.21	0.2	0.1	滑石	側面は円盤状，片面穿孔	東壁床面	PL21
Q11	臼玉	0.46	0.2	0.2	0.1	滑石	側面は円盤状，片面穿孔	炉南側床面	PL21
Q12	臼玉	0.46	0.28	0.1	0.1	滑石	側面は円盤状，片面穿孔	東壁壁溝	PL21
Q13	臼玉	0.54	0.25	0.1	0.1	滑石	側面は円盤状，片面穿孔，一部欠損	炉床面	PL21
Q21	臼玉	0.7	0.3	0.1	0.2	滑石	未製品，片面穿孔	覆土中	PL21
Q22	臼玉	0.65	0.2	0.1	0.1	滑石	未製品，片面穿孔	覆土中	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q14	双孔円板	2.0	(1.0)	0.2	(0.8)	滑石	孔径0.15，両面斜位，縦位の研磨，片面穿孔，一部欠損	南コーナー床面	PL21
Q15	双孔円板カ	(3.3)	(1.7)	0.4	(3.7)	滑石	孔径0.15，両面斜位の研磨，両面穿孔，一部欠損	中央部床面	PL21

(2) 土坑

第31号土坑（第43図）

位置　調査Ⅰ区北東部のＧ５a9区で，標高22.1mの台地縁辺部に位置している。また，南東側3.8mに第13号住居が位置している。

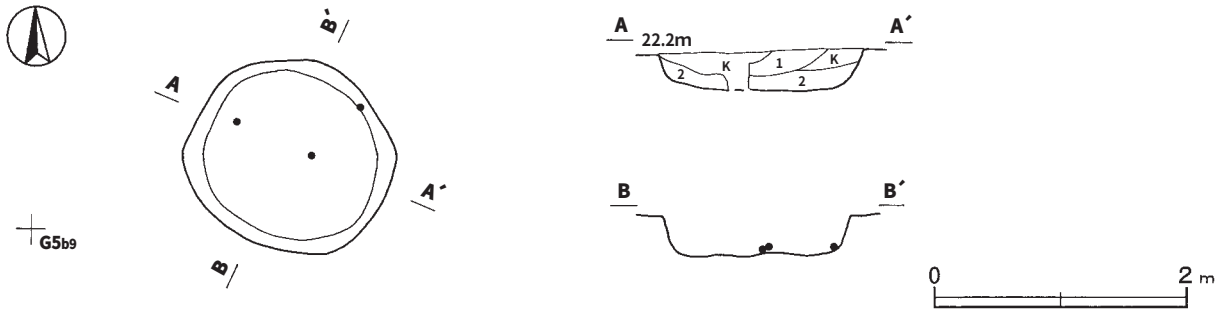
規模と形状　径1.6mほどの円形で，深さは34㎝である。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。耕作による撹乱のため堆積状況は不明である。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック微量

遺物出土状況　土師器片28点（坏・椀類13，甕類12，高坏3）が出土している。いずれも細片のため図示できなかったが，多くは覆土下層から底面にかけて出土している。

所見　時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられ，近接する同時期の第13号住居との関連性がうかがえる。



第43図　第31号土坑実測図

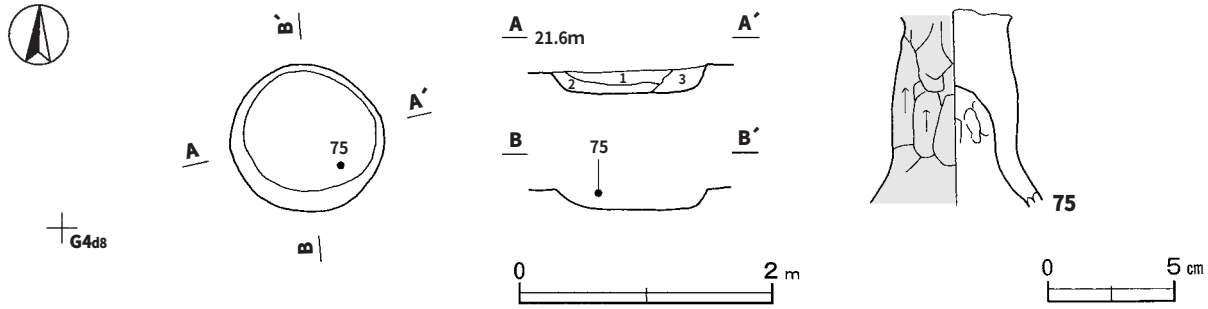
第56号土坑（第44図）

位置　調査Ⅰ区北西部のＧ４c8区で，標高21.3mの台地縁辺部に位置している。また，北西側2.8mに第15号住居が位置している。

規模と形状　径1.2mほどの円形で，深さは18㎝である。底面は平坦で，壁は緩斜して立ち上がっている。

覆土　３層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量



第44図　第56号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片10点（高坏１，甕類９）が出土している。いずれも細片で，図示できたのは75だけである。75は南側の覆土中層から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられ，近接する同時期の第15号住居との関連性がうかがえる。

第56号土坑出土遺物観察表（第44図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
75	土師器	高坏	―	(7.8)	―	長石・石英・微礫	橙	普通	脚部外面ヘラ削り，内面指頭痕	南部中層	20%

第59号土坑（第45図）

位置　調査Ｉ区北西部のＧ４c9区で，標高21.5mの台地縁辺部に位置している。また，北西側2.8mに第15号住居が位置している。

規模と形状　長径1.2m，短径0.9mの楕円形で，深さは15㎝ほどである。底面は凸凹が見られ，壁は緩斜して立ち上がっている。長径方向はN－50°－Wである。

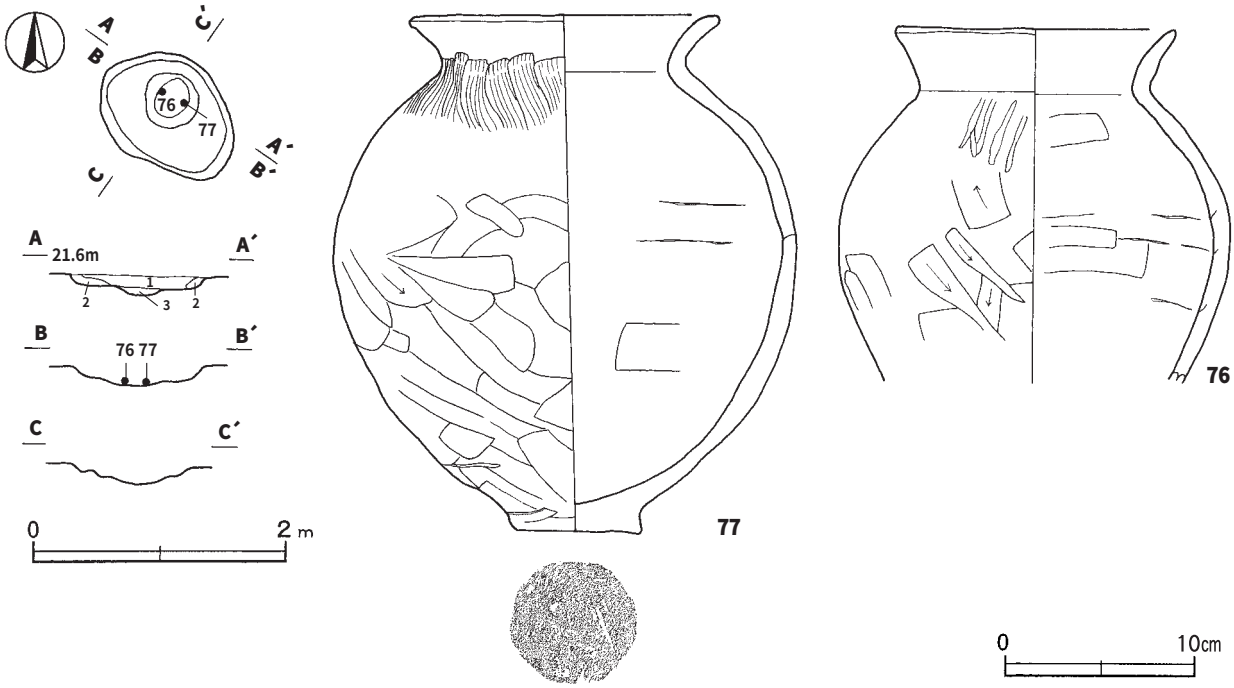
覆土　３層に分層される。ロームブロックや炭化物を比較的多く含んだ人為堆積である。

土層解説

1　極暗褐色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子中量
3　黒　褐　色　炭化物・ローム粒子・焼土粒子少量

遺物出土状況　土師器片101点（坏類２，甕類99）が出土している。76に77が一部重なるようにして底面から出土していることと遺物の破損状態から，はじめに76が投棄された後に77が投棄されたものと考えられる。

所見　時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられ，近接する同時期の第15号住居との関連性がうかがえる。



第45図　第59号土坑・出土遺物実測図

第59号土坑出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
76	土師器	甕	14.4	(18.7)	—	石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ・輪積痕	中央部底面	40% PL18
77	土師器	甕	16.0	27.5	4.8	石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部ナデ，体部外面上位刷毛目調整，ヘラ削り，内面ヘラナデ・輪積痕	中央部底面	80%

第72号土坑（第46図）

位置　調査Ⅰ区北西部のＧ５c2区で，標高21.7mの台地縁辺部に位置している。

重複関係　北東コーナー部を第３号溝に掘り込まれている。

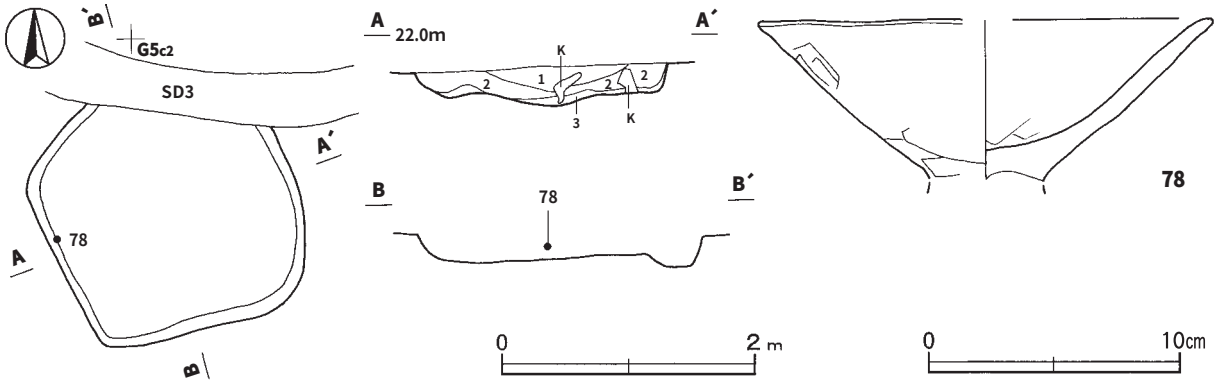
規模と形状　確認されたのは長軸2.0m，短軸2.0mの不整方形で，深さは21㎝である。底面は平坦で，壁は緩斜して立ち上がっている。長軸方向はN－23°－Wである。

覆土　３層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片３点（高坏）が出土している。78は西壁際の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられる。



第46図　第72号土坑・出土遺物実測図

第72号土坑出土遺物観察表（第46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
78	土師器	高坏	[17.8]	(6.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部ナデ，坏部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	西壁中層	40%

第113号土坑（第47図）

位置　調査Ⅱ区中央部のＢ１c7区で，標高20.1mの台地縁辺部に位置している。

重複関係　第18号住居跡の西コーナー寄りを掘り込んでいる。

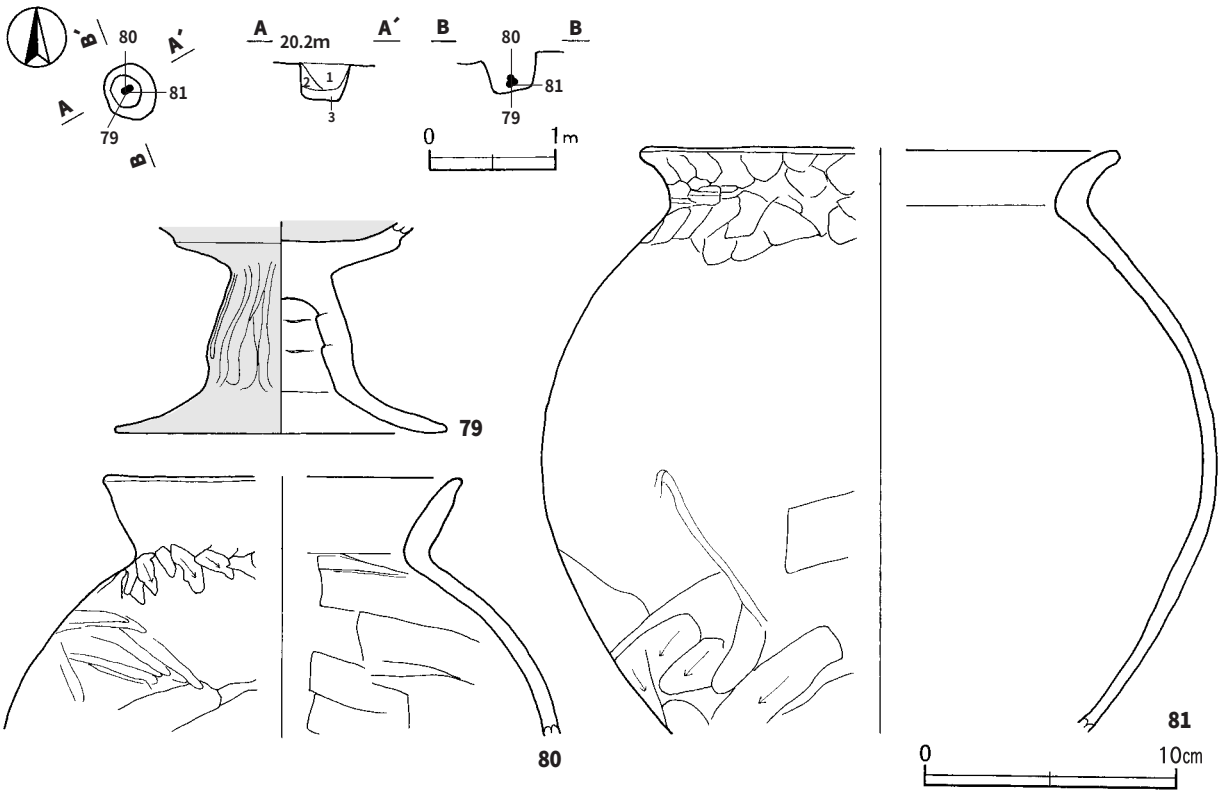
規模と形状　径0.4mほどの円形で，深さは28㎝である。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　３層に分層される。ロームブロックや炭化物を比較的多く含んだ人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　土師器片25点（高坏３，甕類22）が出土している。79・80・81は中央部の覆土下層から重なって出土している。

所見　時期は，第18号住居を掘り込んでいることと出土土器から中期（５世紀中葉）以降と考えられる。



第47図　第113号土坑・出土遺物実測図

第113号土坑出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
79	土師器	高坏	―	(8.4)	13.6	石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	脚部外面ヘラ磨き，内面輪積痕	中央部下層	70%　PL16
80	土師器	甕	[13.9]	(10.3)	―	長石	明赤褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	中央部下層	10%
81	土師器	甕	[18.4]	(23.1)	―	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部指頭痕，体部外面ヘラ削り，内面剥離	中央部下層	40%　PL17

第118号土坑（第48図）

位置　調査Ⅱ区中央部のＢ１b8区で，標高20.1mの台地縁辺部に位置している。

重複関係　第18号住居跡の東コーナー部を掘り込んでいる。

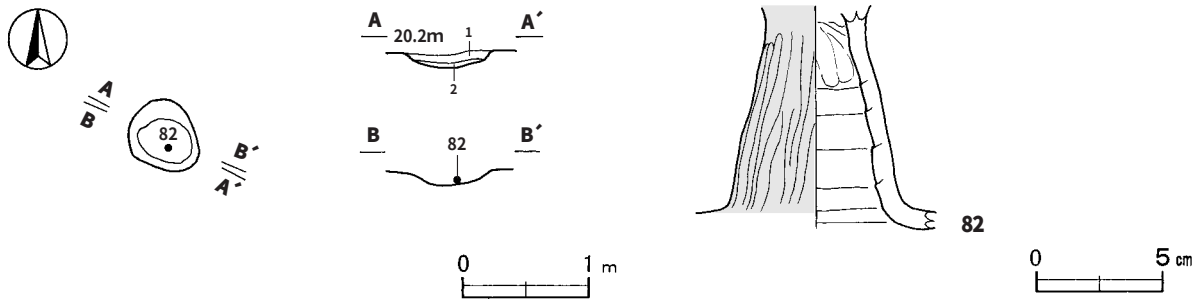
規模と形状　長径0.6m，短径0.5mの楕円形で，深さは12㎝である。底面は皿状で，壁は緩斜して立ち上がっている。長径方向はN－60°－Wである。

覆土　２層に分層される。薄いため，堆積状況は不明である。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量　　2　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片１点（高坏）が出土している。82は中央部の底面から出土している。

所見　時期は，第18号住居を掘り込んでいることと出土土器から中期（５世紀中葉）以降と考えられる。



第48図　第118号土坑・出土遺物実測図

第118号土坑出土遺物観察表（第48図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備　考
82	土師器	高坏	―	(8.8)	―	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	脚部外面ヘラ削り，内面輪積痕・指頭痕	中央部底面	20%

第125号土坑（第49図）

位置　調査Ⅱ区中央部のＢ１g0区で，標高20.2mの台地縁辺部に位置している。また，南側3.2mに第17Ａ号住居が位置している。

規模と形状　長軸1.4m，短軸1.3mの隅丸方形で，深さは50㎝である。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN－37°－Eである。

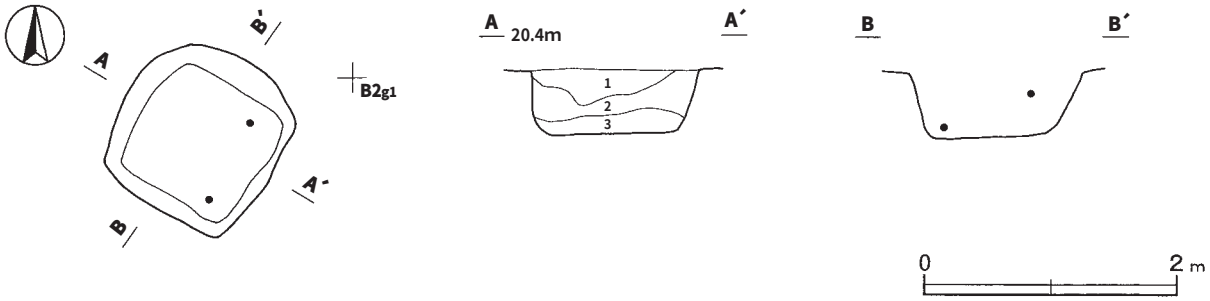
覆土　３層に分層される。ロームブロックや炭化物を比較的多く含んだ人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片７点（坏類４，甕類２，高坏１）が出土している。遺物はいずれも細片のため図示できなかったが，覆土中層から下層にかけて出土している。

所見　時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられ，近接する同時期の第17号住居との関連性がうかがえる。



第49図　第125号土坑実測図

第128号土坑（第50図）

位置　調査Ⅱ区中央部のＢ２a1区で，標高20.2mの台地縁辺部に位置している。また，西側4.8mに第19住居が位置している。

重複関係　東側を第129号土坑に掘り込まれている。

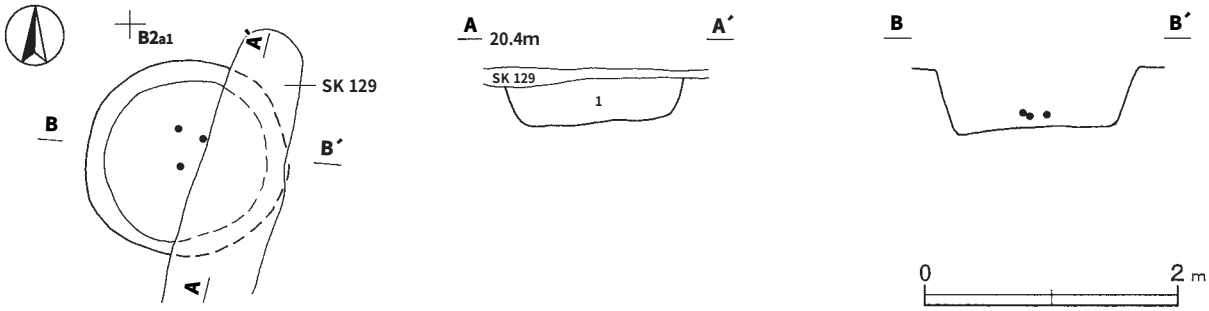
規模と形状　確認されたのは径1.6mほどの円形で，深さは52㎝である。底面はやや南西側に傾斜しており，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　単一層である。ロームブロックや炭化物を比較的多く含んだ人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片21点（坏・椀類６，甕13，坩２）が出土している。遺物は細片のため図示できなかったが，いずれも覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器からから中期（５世紀中葉）と考えられ，近接する同時期の第19号住居との関連性がうかがえる。



第50図　第128号土坑実測図

第130号土坑（第51図）

位置　調査Ⅱ区中央部のＢ１c7区で，標高20.1mの台地縁辺部に位置している。

重複関係　第18号住居跡の南コーナー付近を掘り込んでいる。

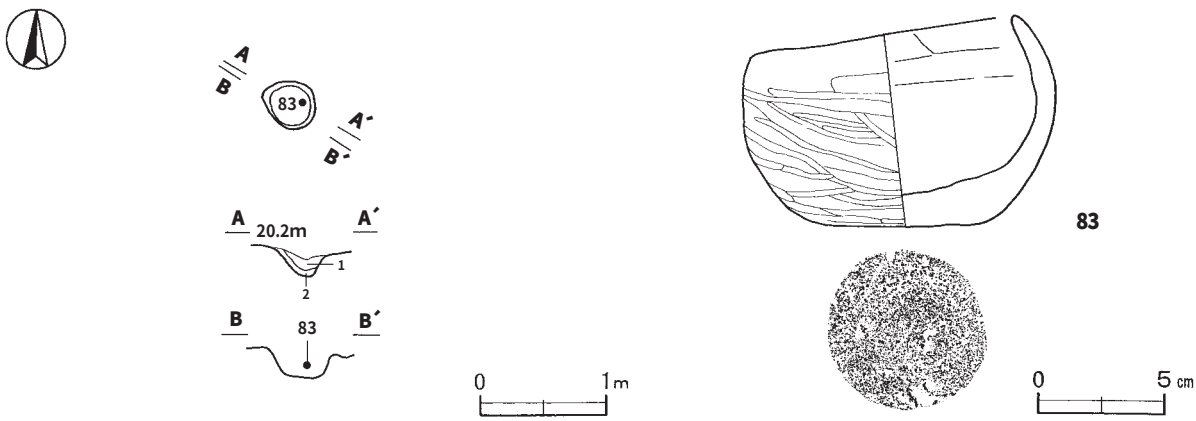
規模と形状　長径0.5m，短径0.4mの楕円形で，深さは10㎝である。底面は皿状で，壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN－61°－Wである。

覆土　２層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片２点（椀類，甕類）が出土している。83は覆土中層から斜位で出土している。

所見　時期は，第18号住居を掘り込んでいることと出土土器から中期（５世紀中葉）以降と考えられる。



第51図　第130号土坑・出土遺物実測図

第130号土坑出土遺物観察表（第51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
83	土師器	椀	10.4	8.2	6.0	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨き，内面ヘラナデ，内面底部指頭痕	東部中層	95%　PL15

第137号土坑（第52図）

位置　調査Ⅱ区中央部のＡ１j0区で，標高20.1mの台地縁辺部に位置している。また，南西側1.8mに第19号住居が位置している。

重複関係　南東側上部を第138号土坑に掘り込まれている。

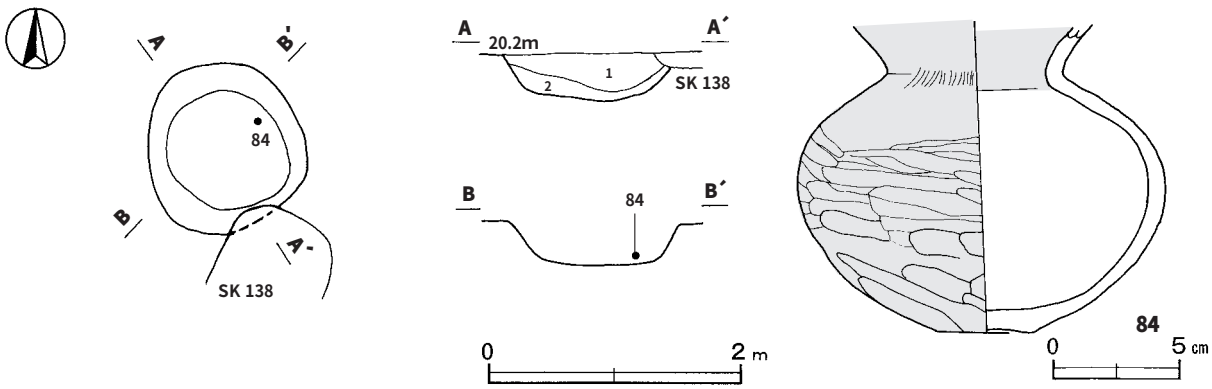
規模と形状　径1.3mほどの円形で，深さは39㎝である。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。ロームブロックや炭化物を比較的多く含んだ人為堆積である。

土層解説
1　黒　　色　ロームブロック・炭化粒子少量　　2　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片６点（甕類１，坩５）が出土している。84は北東部壁際近くの覆土下層から横位で出土している。

所見　時期は，出土土器から中期（５世紀中葉）と考えられ，近接する同時期の第19号住居との関連性がうかがえる。



第52図　第137号土坑・出土遺物実測図

第137号土坑出土遺物観察表（第52図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
84	土師器	坩	―	(12.3)	3.8	長石	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ磨き，内面ナデ	東部下層	85%　PL17

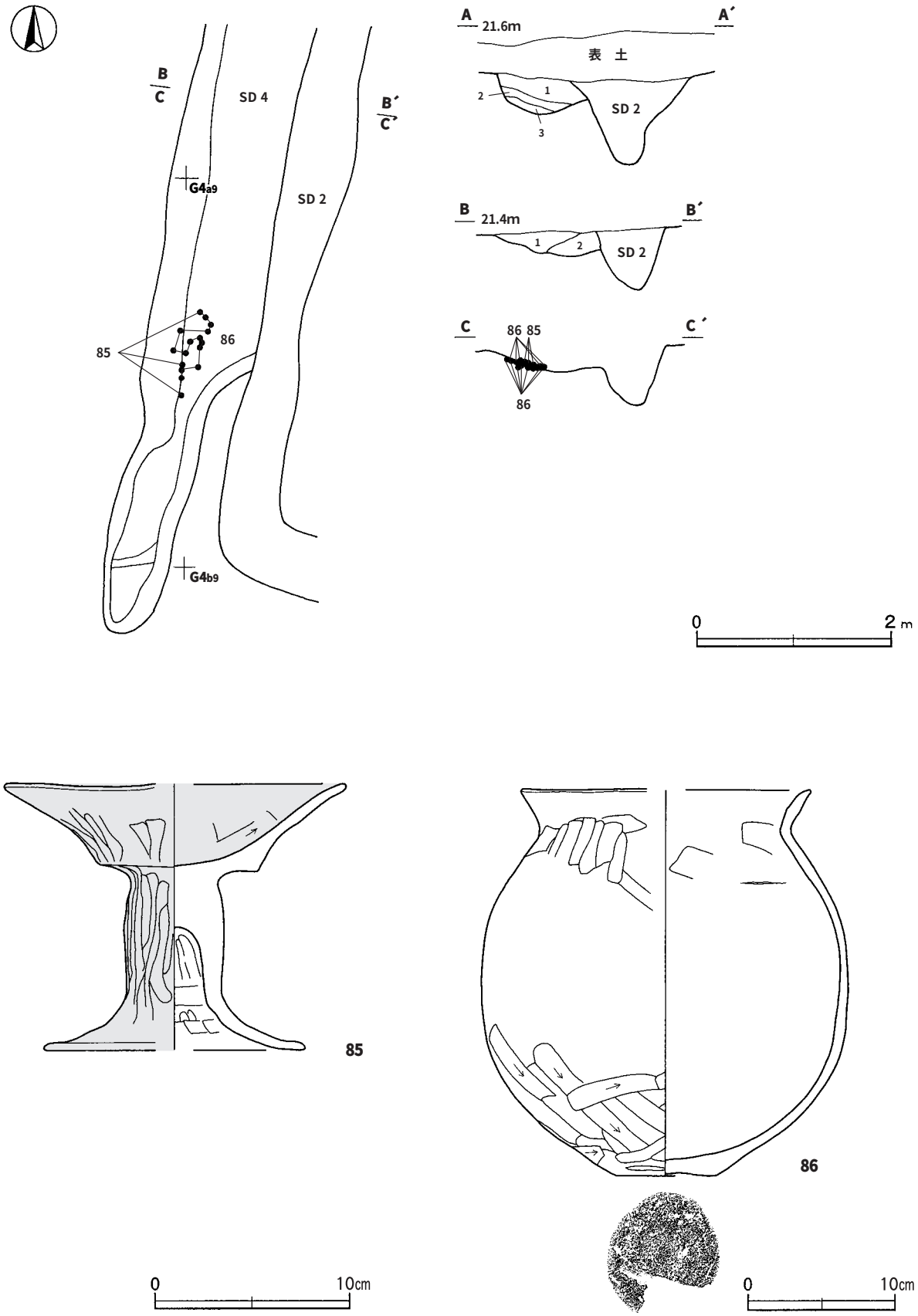
(3)　溝跡

第４号溝跡（第53図）

位置　調査Ⅰ区北西部のＦ３h1区～Ｇ４a0区で，遺構確認面の南部と北部の高低差が約30cmの傾斜地に位置している。また，南端の西側1.0mに第15号住居が位置している。

重複関係　東側上部を第２号溝に掘り込まれている。

規模と形状　Ｇ４a0区から北方向（Ｎ－７°－Ｅ）にほぼ直線的に延び，北側は調査区域外に延びているため，



第53図　第４号溝跡・出土遺物実測図

全体の規模は不明である。確認できた長さは8.1mで，上幅0.6～1.2m，下幅0.2～0.4m，深さ22～38㎝である。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。断面形はU字状を呈している。

覆土　３層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片71点（高坏12，甕類54，坩５）が出土している。底部片などから推定される個体数は高坏１点，甕２点である。85・86は南端部付近の底面から出土した破片が，それぞれ接合したものである。また，破片のうち底部や脚部など大きな破片は西側，細かな破片が東側に散在していることから，第15号住居側から投棄されたものと考えられる。

所見　調査区域外の北側は小野川に続く浅い谷部にあたり，遺構の立地から本跡は排水溝，もしくは雨水に対する暗渠と推定される。また，本跡から出土している遺物と西側に隣接する第15号住居から出土している遺物に接合関係が認められることから，本跡は第15号住居に関連する施設と推測される。時期は，出土土器から中期（５世紀前葉）と考えられる。

第4号溝跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
85	土師器	高坏	[17.4]	13.7	[13.4]	長石・石英・微礫	明赤褐	普通	口縁部ナデ，坏部外面・脚部ヘラ削り，坏部内面剥離	南端部底面	60%　PL1
86	土師器	甕	[19.6]	26.7	16.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	南端部底面	50%

３　平安時代の竪穴住居跡と遺物

今回の調査で，平安時代の竪穴住居跡９軒を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

第１号住居跡（第54図）

位置　調査Ⅰ区南東部のＨ７i1区で，標高21.0mの緩やかな斜面部に位置している。

重複関係　第７号住居跡全体を掘り込んでいる。

規模と形状　耕作による削平のため，南東コーナー付近は床面が露出した状態で確認された。長軸3.8m，短軸2.9mの長方形で，主軸方向はＮ－５°－Ｗである。壁高は５㎝で，緩やかに立ち上がっている。

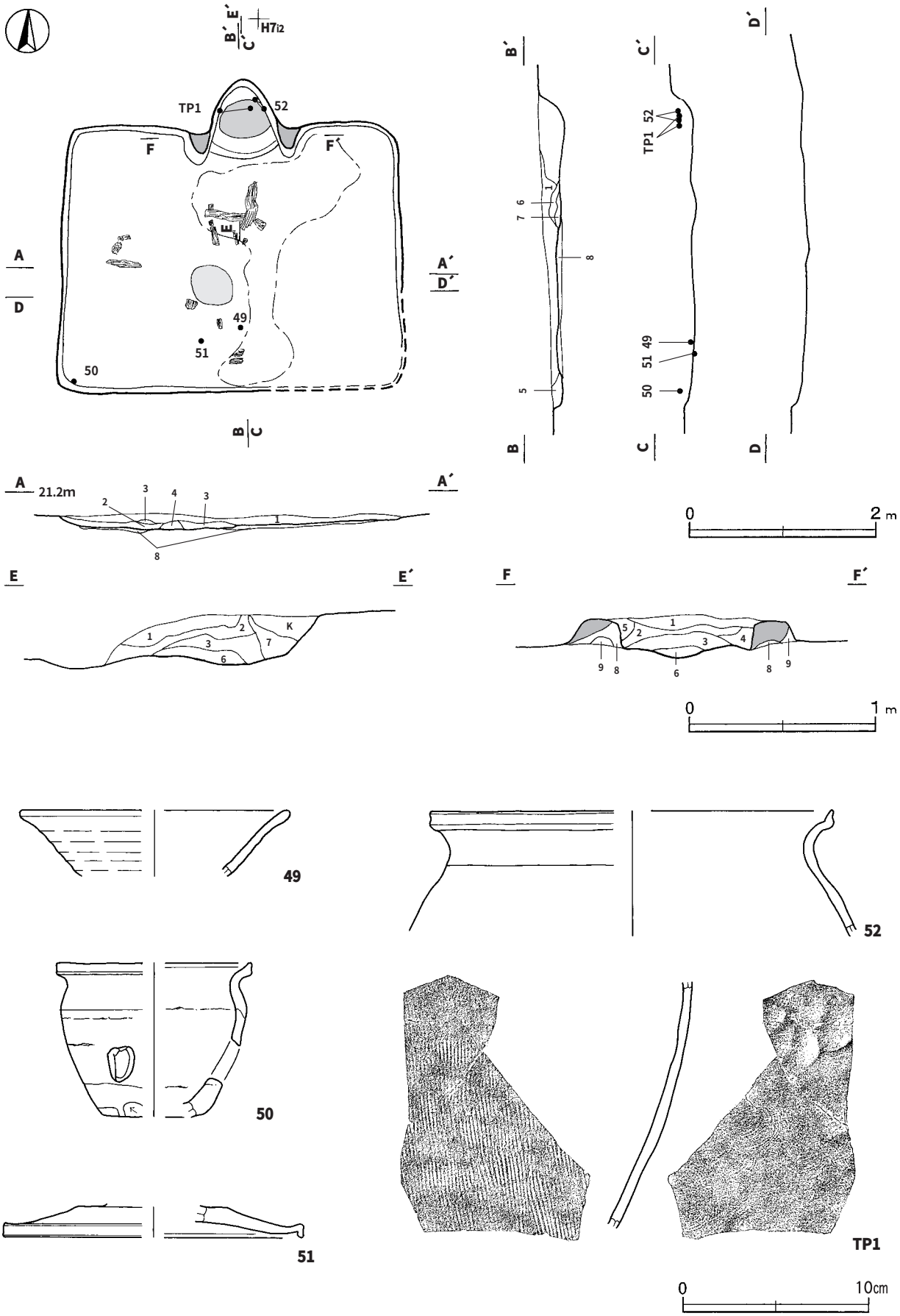
床　ほぼ平坦で，南側中央部付近から竈南側にかけて踏み固められている。床は大部分が貼床である。ロームブロックや粘土粒子を含む暗褐色土（覆土土層断面図，第８層）を２～６㎝ほど埋め土して作られている。また，丸材の炭化材や焼土塊が床面から検出されている。

竈　北壁の中央部を壁外に51㎝掘り込み，袖部はロームに砂質粘土と小砂利を混ぜて地山のロームの上に構築されている。規模は焚口部から煙道部まで86cm，袖部幅106cmである。火床部は床面を15㎝ほど掘りくぼめており，火床面が火熱で赤変硬化している。煙道は，緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗 赤 褐 色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
3　にぶい赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子微量
4　極 暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
5　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
6　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
7　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ローム粒子微量
8　褐　　色　ロームブロック・粘土粒子少量
9　暗　褐　色　ロームブロック少量，粘土粒子微量

覆土　８層に分層される。第１層は周囲からの土砂の流入を示す自然堆積で，第２～７層はロームブロック，炭化材



第54図　第１号住居跡・出土遺物実測図

や炭化物を比較的多く含んでおり，焼失や廃絶に伴って形成された人為堆積である。第８層は貼床の構築土である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック中量
3　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子少量
4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量
6　黒　褐　色　炭化材中量，ローム粒子少量，焼土粒子微量
7　黒　褐　色　ローム粒子少量
8　黒　褐　色　ロームブロック・粘土粒子少量

遺物出土状況　土師器片150点（坏類15，甕類135），須恵器片44点（坏類35，甕類５，蓋４）が出土している。底部片から推定される個体数は，土師器坏１点，土師器甕３点である。49・51は中央部南側の床面，50は南西コーナー部の覆土下層，52・ＴＰ１は竈内からそれぞれ出土している。また，細片のため図示することができなかったが，竈内から土師器甕の胴部の破片がまとまって出土している。これらの遺物は，出土状況から廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見　床面からの焼土塊や炭化材，炭化物の存在から，本跡は焼失住居の可能性が極めて高い。廃絶時期は，出土土器から９世紀前葉と考えられる。

第１号住居跡出土遺物観察表（第54図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
49	須恵器	坏	［14.1］	（3.6）	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口縁部横ナデ	中央部床面	10%
50	土師器	小形甕	［10.4］	8.3	［5.4］	長石・石英・雲母・微礫	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ，体部内・外面ロクロナデ，焼成後穿孔	南西コーナー下層	40%
51	須恵器	蓋	［15.9］	（1.6）	－	石英	褐灰	普通	口縁部・外周部内・外面ロクロナデ	中央部床面	10%
52	土師器	甕	［21.6］	（6.7）	－	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ	竈	5%
TP1	須恵器	甕	－	（13.3）	－	長石	灰黄	良好	体部外面縦位の平行叩き	竈	5%　PL22

第２号住居跡（第55・56図）

位置　調査Ｉ区南東部のＨ６i9区で，標高21.0mの緩やかな斜面部に位置している。

重複関係　第８号住居跡，第１号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸3.9m，短軸3.3mの長方形で，主軸方向はＮ－15°－Ｗである。壁高は10～26cmで，外傾して立ち上がっている。

床　平坦で中央部が踏み固められている。大部分が貼床で，ロームブロックや焼土粒子を含む褐色土（覆土土層断面図，第12層）を２～８㎝ほど埋め土して作られている。また，丸材の炭化材や焼土塊が床面から検出されている。

竈　２か所。竈１は北壁中央部を壁外に26㎝掘り込んで構築されている。規模は焚口部から煙道部まで101㎝で，袖部は認められない。火床部は床面を10㎝掘りくぼめており，火床面が火熱でわずかに赤変している。煙道部は，外傾して立ち上がっている。竈２は東壁の南東コーナー寄りを壁外に51㎝ほど掘り込み構築されている。袖部はロームに砂質粘土を混ぜて地山のロームの上に構築されている。規模は焚口部から煙道部まで98cm，袖部幅60cmである。火床部は床面を22㎝掘りくぼめており，火床面が火熱で赤変硬化している。また，煙道の立ち上がり部には土師器甕が支脚として据えられており，煙道は外傾して立ち上がっている。竈２が完存し，竈１は火床部と煙道部しか残存していないことから，竈１から竈２へ作り替えたと考えられる。

竈１土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
2　暗　褐　色　粘土粒子少量，ローム粒子微量
3　暗　赤　褐　色　焼土ブロック・粘土粒子少量
4　褐　　色　ローム粒子微量
5　褐　　色　ロームブロック少量
6　暗　褐　色　焼土ブロック少量，粘土粒子微量
7　暗　褐　色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量
8　黒　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
9　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量

竈２土層解説

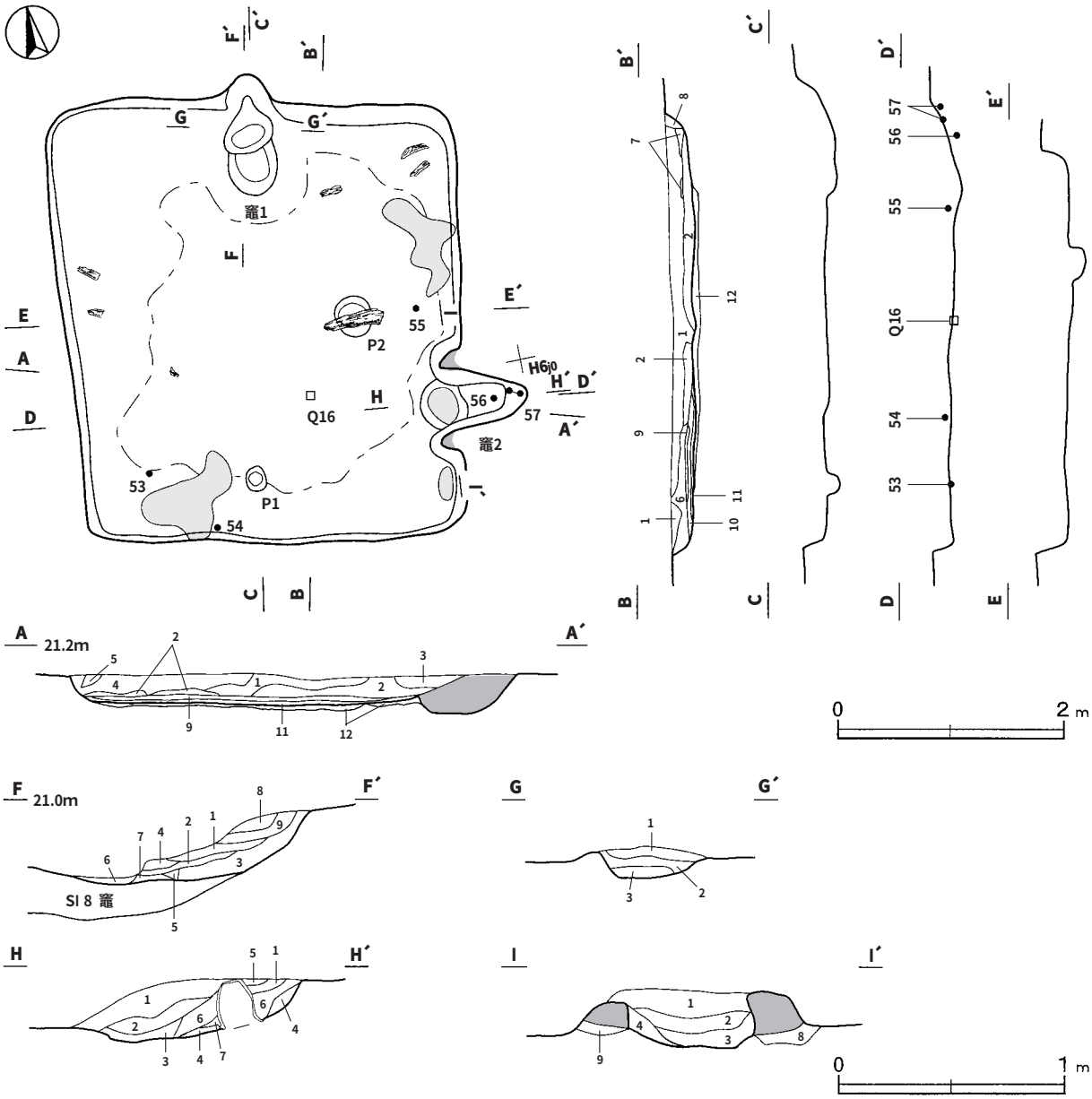
1　暗　褐　色　粘土粒子少量，ローム粒子微量
2　褐　　色　粘土粒子中量，焼土粒子微量
3　極 暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
5　暗　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子微量
6　暗 赤 褐 色　焼土粒子・粘土粒子中量，ローム粒子微量
7　暗 赤 褐 色　焼土ブロック・ローム粒子微量
8　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
9　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量

ピット　２か所。深さはＰ１が10㎝，Ｐ２が14㎝である。位置と形状からＰ１は出入り口施設に伴うピット，Ｐ２は主柱穴と考えられる。

覆土　12層に分層される。第１～９層はロームブロック，炭化材や炭化物を比較的多く含んでおり，焼失や廃絶に伴って形成された人為堆積である。第10・11層は各層に硬化面が見られることから，床面の修理痕であると考えられる。第12層は貼床の構築土である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化材微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量・焼土ブロック・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・炭化材少量

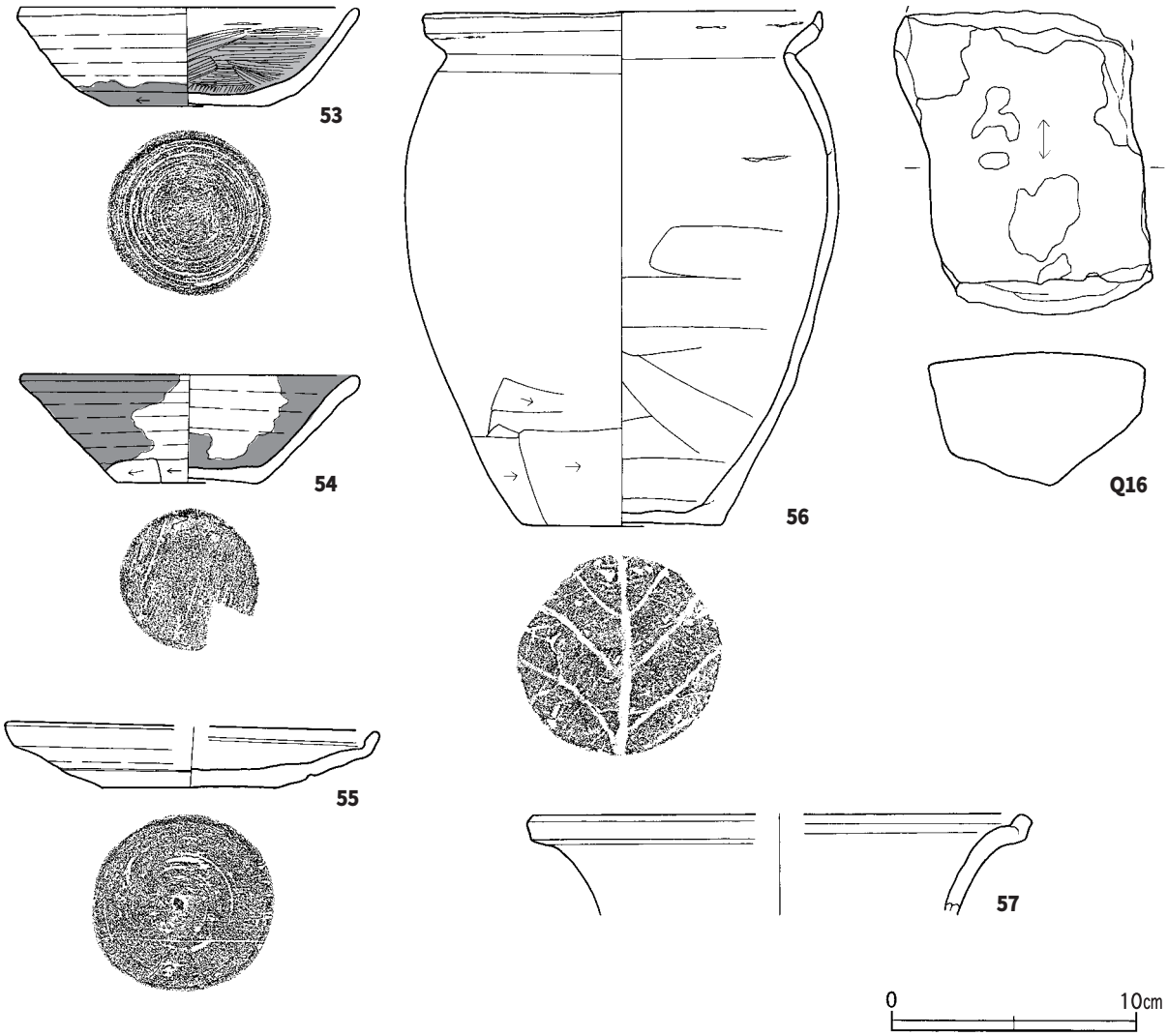


第55図　第２号住居跡実測図

5　極暗褐色　焼土ブロック・炭化粒子少量
6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
7　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
8　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化材・焼土ブロック微量
9　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック微量
10　極暗褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
11　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
12　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片378点（坏類62，甕類316），須恵器片40点（坏類27，甕類８，盤１，鉢４）が出土している。底部片などから推定される個体数は，土師器坏４点，土師器高台付坏１点，土師器甕17点，須恵器坏４点，須恵器高台付坏１点，須恵器盤１点，須恵器鉢１点である。53は南西コーナー付近の床面から正位で，54は南壁際の覆土下層，56・57は竈２の煙道部，Q16は中央部の床面からそれぞれ出土している。56は煙道の立ち上がり部に逆位で据えられており，火熱痕が見られる。周りの煙道部は火熱により赤変硬化しているにもかかわらず，甕のあった部分は火熱を受けた痕跡がないことから，支脚に転用された甕であると考えられる。また，細片のため図示することができなかったが，竈内から土師器甕の胴部の破片がまとまって出土している。

所見　床面からの焼土塊や炭化材，炭化物の存在から，焼失住居の可能性が極めて高い。廃絶時期は，出土土器から９世紀後葉と考えられる。



第56図　第２号住居跡出土遺物実測図

第２号住居跡出土遺物観察表（第56図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
53	土師器	坏	13.8	4.1	6.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	良好	体部下端回転ヘラ削り，底部回転ヘラ切り，内面黒色処理	南西コーナー床面	100% PL19
54	須恵器	坏	13.5	4.5	5.7	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り，底部一方向のヘラ削り，煤付着	南壁下層	80% PL19
55	須恵器	盤	[14.9]	2.8	7.3	石英・雲母	うすい黄橙	普通	底部回転ヘラ削り後，一方向のヘラ削り	東壁床面	80% PL20
56	土師器	甕	16.2	21.2	8.2	長石・石英・雲母・微礫	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面下部ヘラ削り，内面ヘラナデ	竈２	98% PL19
57	須恵器	甕	[20.0]	(4.1)	―	長石・石英・雲母	灰黄	普通	口縁部横ナデ	竈２	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q16	砥石	(12.5)	10.9	5.5	(1150)	雲母片岩	断面台形，砥面１面	中央部床面	

第３号住居跡（第57・58図）

位置　調査Ｉ区南東部のＨ６j8区で，標高21.1mの緩やかな斜面部に位置している。

規模と形状　長軸2.9m，短軸2.7mの方形で，主軸方向はＮ－104°－Ｅである。壁高は15～33cmで，外傾して立ち上がっている。

床　平坦で，中央部が踏み固められている。また，丸材の炭化材や焼土塊が床面から検出されている。

竈　東壁南東コーナー寄りを壁外に19cm掘り込んで構築されている。袖部はロームに砂質粘土を混ぜてロームの暗褐色土の上に構築されている。規模は焚口部から煙道部まで86cm，袖部幅52cmである。火床部は床面を６cm掘りくぼめており，火床面が火熱で赤変硬化している。煙道は，緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　褐　色　粘土粒子中量，炭化粒子・焼土粒子微量
2　極暗褐色　焼土ブロック少量，炭化物微量
3　暗　褐　色　焼土ブロック少量，炭化物・ローム粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック微量
5　極暗褐色　粘土粒子中量，炭化物少量
6　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
7　極暗赤褐色　焼土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子微量
8　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
9　暗赤褐色　焼土ブロック・粘土粒子少量

ピット　１か所。Ｐ１は深さが８cmであるが，性格は不明である。壁際に径が４～６㎝，深さ３～９㎝の円形状小ピットが12か所検出され，壁柱穴と考えられる。

貯蔵穴　北東コーナー部に位置し，長軸60㎝，短軸46㎝の長方形で，深さは24㎝である。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量

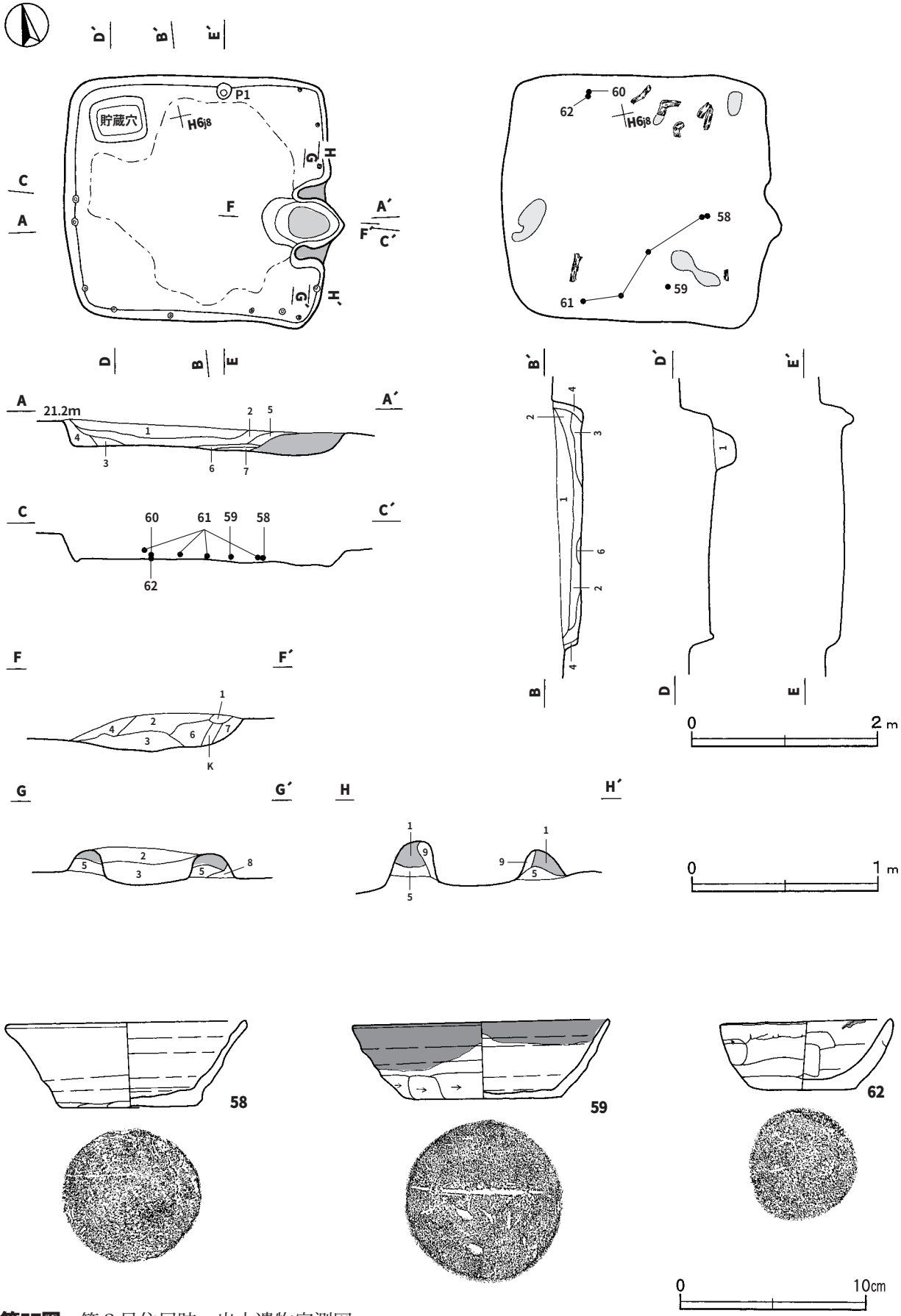
覆土　７層に分層される。第１～５層の堆積状況は，周囲からの土砂の流入を示す自然堆積である。第６・７層は，焼土塊や炭化物を比較的多く含んでおり，本跡の焼失や廃絶に伴って形成された人為堆積である。

土層解説

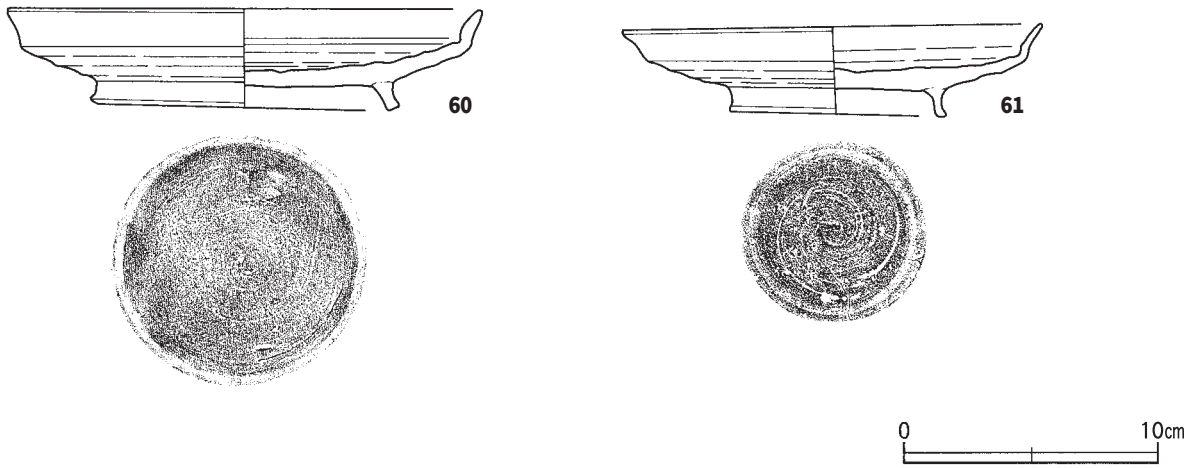
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　炭化物・ローム粒子・焼土粒子少量
3　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
4　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
5　黒　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
6　暗　褐　色　焼土ブロック・ロームブロック少量
7　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量

遺物出土状況　土師器片46点（坏類５，甕類41），須恵器片33点（坏類18，盤14，蓋１）が出土している。底部片などから推定される個体数は，土師器ミニチュア坏１点，土師器甕１点，須恵器坏３点，須恵器盤３点である。58は竈手前の覆土下層，59は南壁近くの覆土下層からそれぞれ出土している。62のミニチュア坏と60の盤は逆位で，北壁際の床面から重なった状態で出土している。61は南壁際から竈手前までの床面から覆土下層にかけて出土した破片が接合したものである。これらの遺物は，出土状況から廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見　床面からの焼土塊や炭化材，炭化物の存在から，焼失住居の可能性が極めて高い。廃絶時期は，出土土器から９世紀前葉と考えられる。



第57図　第３号住居跡・出土遺物実測図



第58図　第３号住居跡出土遺物実測図

第３号住居跡出土遺物観察表（第57・58図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
58	須恵器	坏	12.7	4.7	7.3	長石・石英・微礫	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り，底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラ削り	竈手前下層	95%　PL19
59	須恵器	坏	13.6	4.3	8.4	長石・雲母・微礫	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り，底部多方向のヘラ削り，油煙付着	南壁下層	90%　PL20
60	須恵器	高台付盤	18.5	4.2	12.2	長石	灰黄	普通	ロクロ整形，底部回転ヘラ削り後，高台貼付	北壁床面	90%　PL20
61	須恵器	高台付盤	16.4	3.8	8.6	長石・雲母・微礫	灰	良好	ロクロ整形，底部回転ヘラ削り後，高台貼付	南壁下層	90%　PL20
62	土師器	ミニチュア坏	8.9	3.8	5.7	長石・雲母	橙	普通	口縁部ナデ，体部外面下部ヘラ削り・輪積痕，内面ヘラナデ，油煙付着	北壁床面	100% PL19

第４号住居跡（第59・60図）

位置　調査Ｉ区南東部のＨ６i6区で，標高21.2mの緩やかな斜面部に位置している。

規模と形状　長軸3.1m，短軸2.5mの長方形で，主軸方向はＮ－38°－Ｅである。壁高は15～20cmで，緩やかに立ち上がっている。

床　全体的に軟弱である。また，丸材の炭化材や焼土塊が各壁側の床面から検出されている。

竈　北東コーナー部を16cmほど掘り込んで構築されている。規模は焚口部から煙道部まで58cm，袖部幅54cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は床面を３cmほど浅く掘りくぼめており，火床面が火熱でわずかに赤変している。

竈土層解説

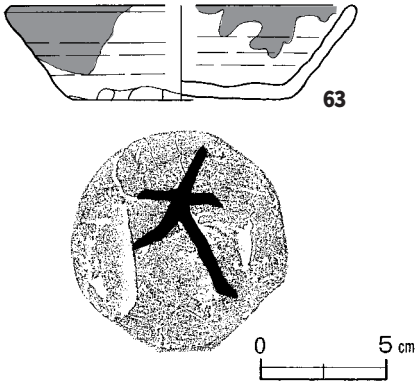
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量
2　暗 赤 褐 色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化物微量
3　黒　褐　色　焼土ブロック微量
4　極 暗 褐 色　焼土粒子・粘土粒子少量，ロームブロック微量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
6　極 暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
7　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ロームブロック微量
9　極 暗 褐 色　焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量

ピット　13か所。ピットは径が12～16cm，深さが10～30cmである。南側を除いてコの字状に配置されている。断面形状から各ピットとも掘り込んで柱を立てているのではなく，先端を尖らせたものを打ち込んでいると推測される。ピットに柱が入ったまま焼失している状態が，土層断面の焼土粒子と炭化物の様子からうかがえる。また，壁際に径が８～14cmの円形状で，深さ２～15cmの小ピットが22か所検出され，壁柱穴と考えられる。

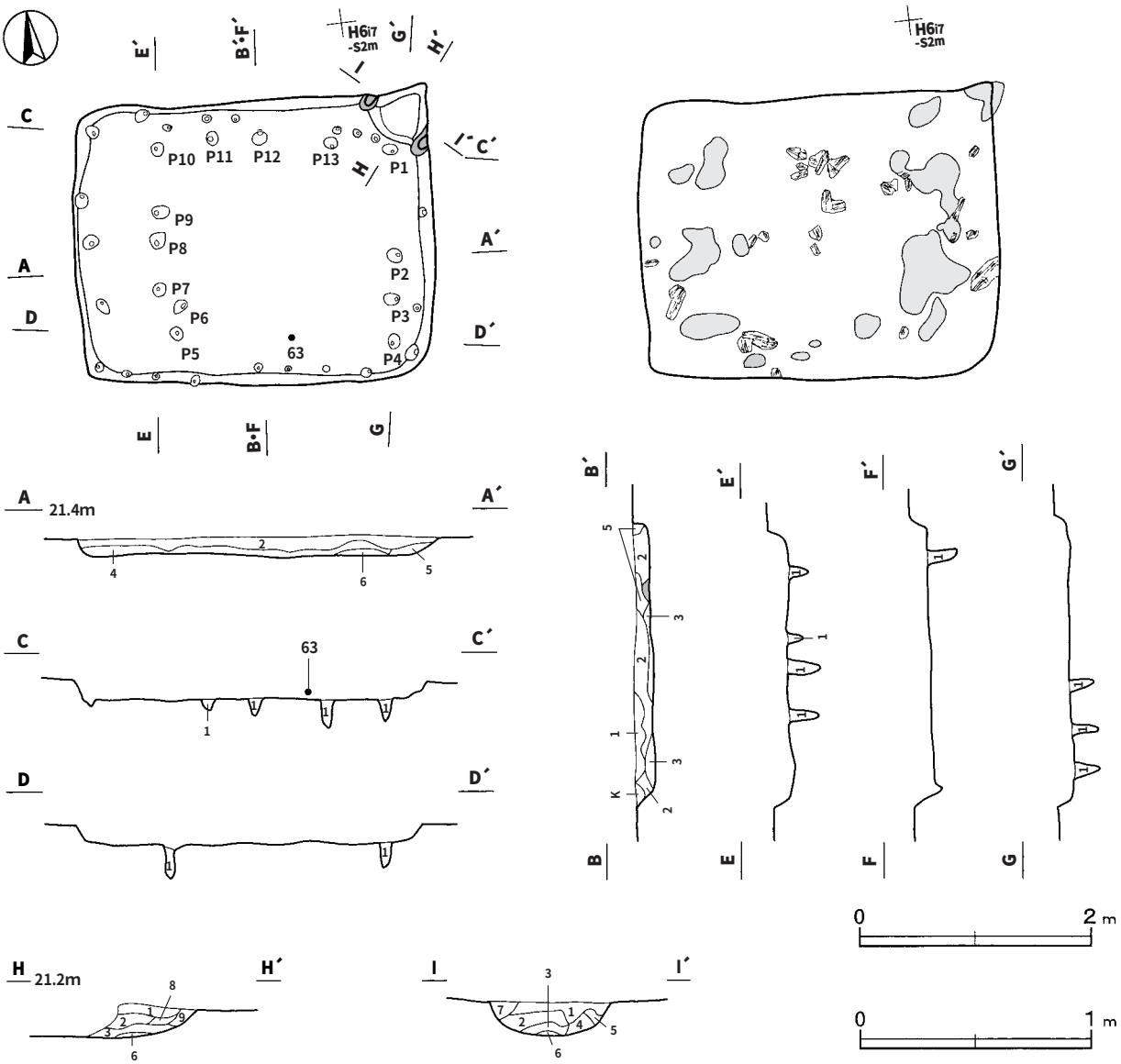
ピット土層解説
1　黒　　褐　　色　炭化物・焼土粒子中量，ローム粒子少量

覆土　６層に分層される。各層とも焼土塊や炭化物を比較的多く含み，焼失や廃絶に伴って形成された人為堆積である。

土層解説
1　黒　　褐　　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
2　黒　　褐　　色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　極　暗　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化物少量
4　黒　　褐　　色　焼土粒子中量，炭化物・ローム粒子少量
5　黒　　褐　　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
6　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量



第59図　第４号住居跡出土遺物実測図



第60図　第４号住居跡実測図

遺物出土状況　土師器片18点（坏類６，甕類12），須恵器片７点（坏類）が出土している。いずれも細片で，図示できたのは63だけである。63は中央部南壁近くの覆土中層から斜位で出土しており，出土状況から廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見　床面が軟弱であること，コの字状に杭を打ち込んだようなピットが並んでいることから，一部に床を貼っていたと推察される。また，床面からの焼土塊や丸材の炭化材，炭化物の存在から，焼失住居の可能性が極めて高い。廃絶時期は，出土土器から９世紀前葉と考えられる。

第４号住居跡出土遺物観察表（第59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
63	須恵器	坏	[13.5]	3.7	8.7	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り，底部多方向のヘラ削り，油煙付着	南壁中層	50% 墨書「大」PL20

第５号住居跡（第61・62図）

位置　調査Ⅰ区南東部のＨ６h4区で，標高21.3mの台地縁辺部に位置している。

重複関係　第９号住居跡，南西コーナー部で第２号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸2.9m，短軸2.6mの長方形で，主軸方向はＮ－99°－Ｅである。壁高は50cmで，外傾して立ち上がっている。

床　平坦で中央部が踏み固められている。また，丸材の炭化材や焼土塊が床面から検出されている。

竈　東壁南東コーナー寄りを壁外に30㎝掘り込み構築されている。袖部は褐色の粘土質のロームに小砂利を混ぜて粘性の高い地山のロームの上に構築されている。規模は焚口部から煙道部まで92cm，袖部幅49cmである。火床部は床面を８㎝ほど掘りくぼめており，火床面が火熱で赤変硬化している。煙道部は外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　粘土粒子少量，ロームブロック微量
2　暗　褐　色　粘土粒子少量，焼土ブロック・ローム粒子微量
3　黒　褐　色　焼土ブロック少量，炭化物微量
4　極暗褐色　焼土ブロック少量，炭化物微量
5　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック微量
6　黒　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子微量
7　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
8　黒　褐　色　ロームブロック少量

ピット　１か所。深さは17㎝で，位置と形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

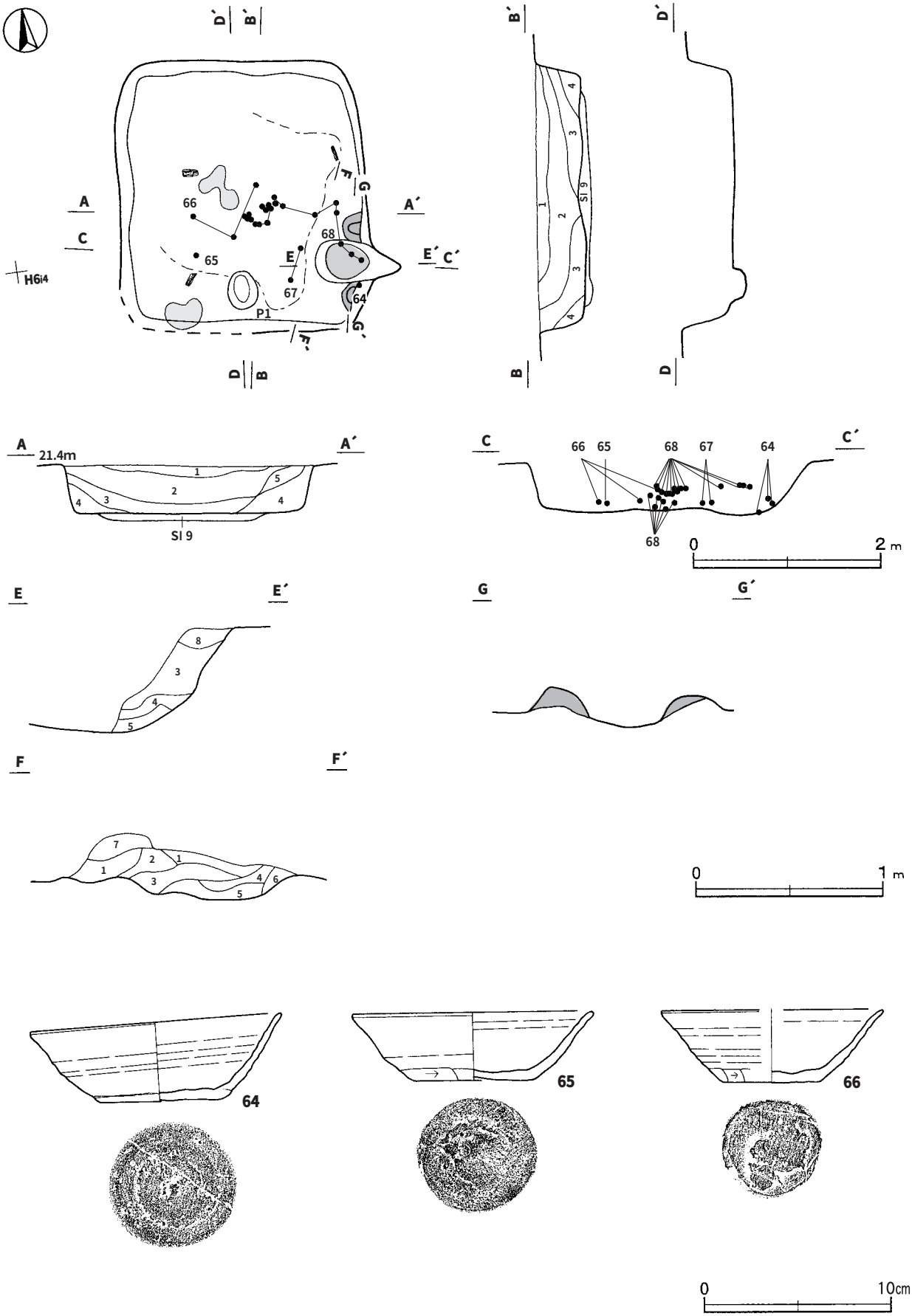
覆土　５層に分層される。第１・２層は土砂の流入した自然堆積を示し，第３～５層はロームブロックや焼土ブロック，炭化物を比較的多く含み，焼失や廃絶に伴って形成された人為堆積である。

土層解説

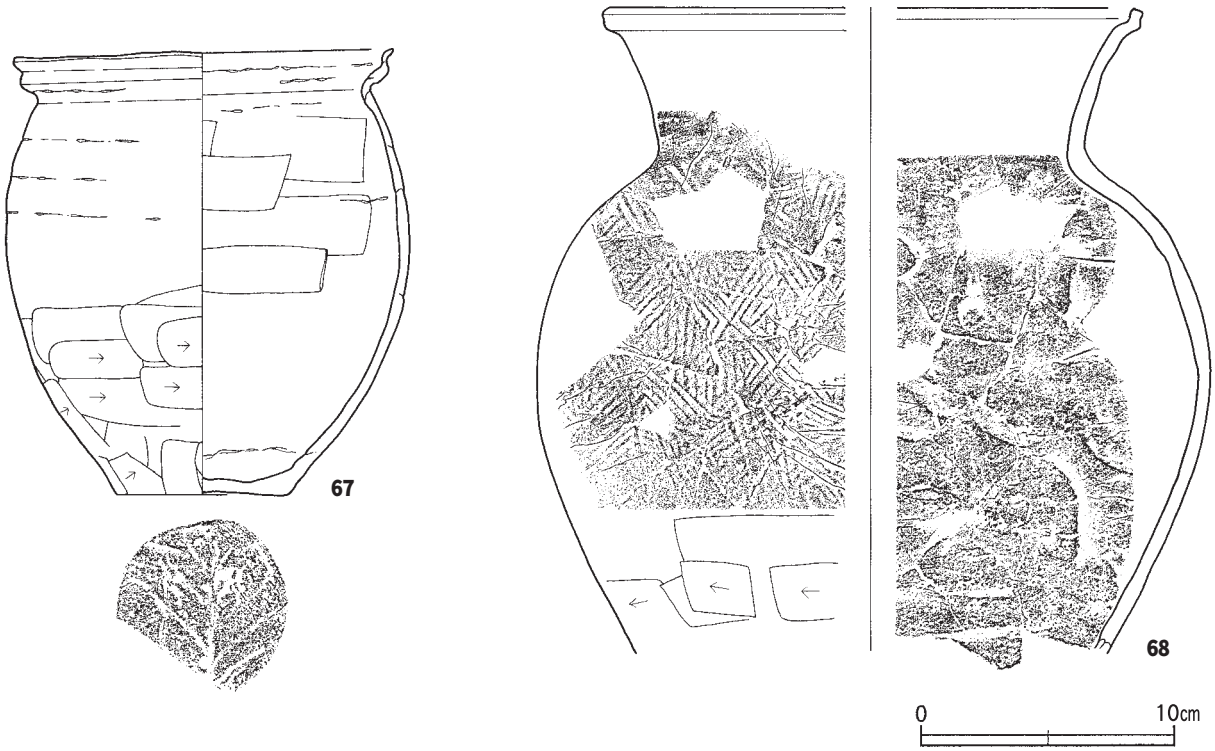
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土ブロック微量
3　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化物少量
4　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化材少量
5　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物中量，焼土粒子少量

遺物出土状況　土師器片318点（坏類13，甕類305），須恵器片39点（坏類27，甕類８，蓋４）が出土している。底部片などから推定される個体数は，土師器甕８点，須恵器坏５点，須恵器甕３点，須恵器蓋３点である。65は中央部の覆土下層から出土している。64は竈の袖部，66は中央部の覆土下層，67は竈手前の覆土下層，68は中央部の覆土下層と竈左袖の覆土中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。この他にも，細片のため図示できなかったが，竈手前の床面から覆土中層にかけて土師器甕の胴部の破片がまとまって出土している。これらは，出土状況から廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見　床面からの焼土塊や炭化材，炭化物の存在から，焼失住居の可能性が極めて高い。廃絶時期は，出土土器から９世紀後葉と考えられる。



第61図　第５号住居跡・出土遺物実測図



第62図　第５号住居跡出土遺物実測図

第５号住居跡出土遺物観察表（第61・62図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
64	須恵器	坏	13.3	4.7	6.4	長石・石英・雲母	灰黄褐	不良	体部下端回転ヘラ削り，底部回転ヘラ切り	竈	80%　PL19
65	須恵器	坏	13.0	3.7	6.3	長石・石英	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り，底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラ削り	中央部下層	70%　PL19
66	須恵器	坏	［11.9］	3.9	5.2	石英・雲母・黒色粒子	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り，底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラ削り	中央部下層	60%
67	土師器	小形甕	14.9	17.8	6.7	長石・石英・雲母・微礫	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面下部ヘラ削り，内面ヘラナデ・輪積痕	竈手前下層	70%　PL19
68	須恵器	甕	［20.6］	（25.6）	―	石英・雲母	にぶい黄	普通	口縁部横ナデ，体部外面下部ヘラ削り，格子状の叩き	中央部下層	20%　PL22

第６号住居跡（第63・64図）

位置　調査Ⅰ区南東部のＨ６f8区で，標高21.4mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状　耕作による削平のため，北東コーナー付近は床面がほぼ露出した状態で確認された。長軸3.8m，短軸3.5mの方形で，主軸方向はＮ－76°－Ｅである。壁高は10～18cmで，外傾して立ち上がっている。

床　平坦で，竈の手前が踏み固められている。また，丸材の炭化材や焼土塊が床面から検出されている。

竈　東壁南東コーナー寄りを壁外に66㎝掘り込み構築されている。袖部はロームに砂質粘土を混ぜてロームの暗褐色土の上に構築されている。規模は焚口部から煙道部まで101cm，袖部幅61cmである。火床部は床面を５㎝ほど掘りくぼめており，火床面が火熱で赤変硬化している。煙道は，緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　暗 赤 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック少量
4　黒　褐　色　ローム粒子少量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット　１か所。深さは17㎝で，位置と形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　３層に分層される。焼土塊や炭化物を比較的多く含み，本跡の焼失や廃絶に伴って形成された人為堆積

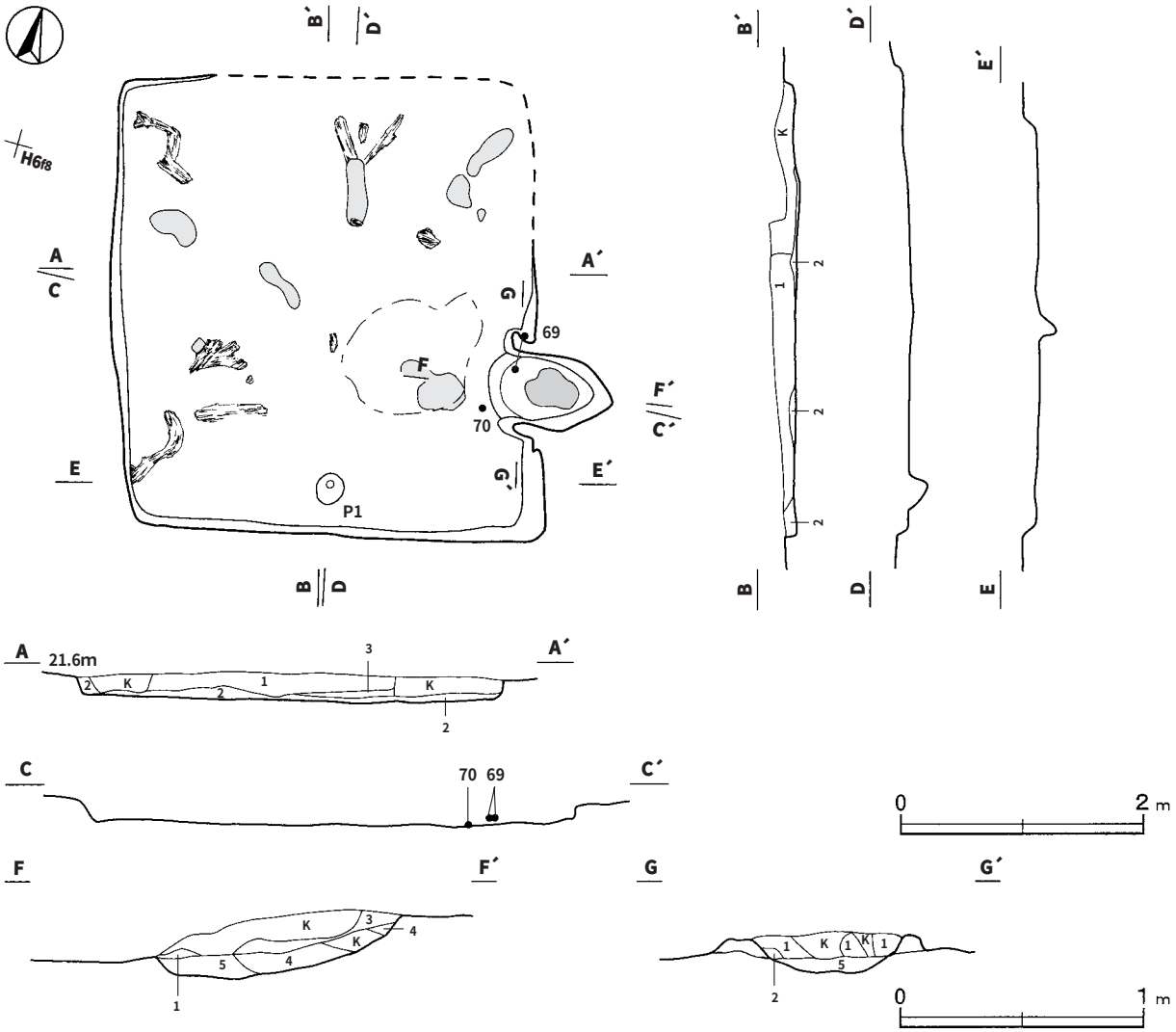
と考えられる。

土層解説

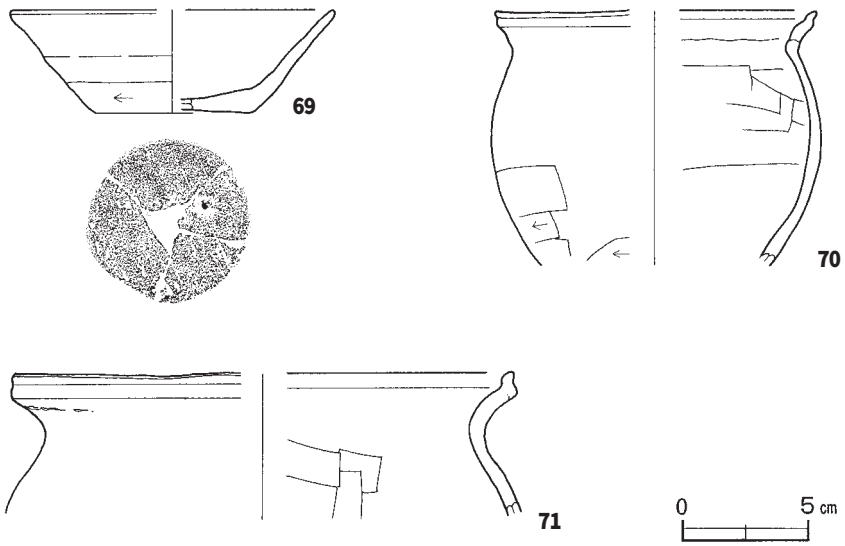
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片322点（坏類７，甕類315），須恵器片43点（坏類36，甕類６，高台付坏１）が出土している。底部片などから推定される個体数は，土師器甕１点，須恵器坏２点，須恵器高台付坏１点である。69は竈左袖と竈内の覆土下層から出土した破片が接合したものである。70は竈手前の床面から出土している。また，細片のため図示できなかったが，南東コーナー付近の覆土下層から土師器甕の胴部の破片がまとまって出土している。これらは，出土状況から廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見　床面からの焼土塊や炭化材，炭化物の存在から，焼失住居の可能性が極めて高い。廃絶時期は，出土土器から９世紀前葉と考えられる。



第63図　第６号住居跡実測図



第64図　第６号住居跡出土遺物実測図

第６号住居跡出土遺物観察表（第64図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
69	須恵器	坏	[12.8]	4.1	6.3	長石・石英	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り，底部一方向のヘラ削り	竈	60%
70	土師器	甕	[12.6]	(10.1)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面下部ヘラ削り，内面ヘラナデ	竈手前床面	15%
71	土師器	甕	[19.6]	(5.8)	—	長石・石英・雲母・微礫	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ，内面ヘラナデ	覆土中	5%

第７号住居跡（第65図）

位置　調査Ⅰ区南東部のＨ７i1区で，標高20.9mの緩やかな斜面部に位置している。

重複関係　第１号住居に上部を掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.2m，短軸2.3mの長方形で，主軸方向はＮ－119°－Ｅである。壁高は15～20cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，全体的に軟弱である。中央部は貼床で，ローム粒子を含む暗褐色土（覆土土層断面図，第10層）を２～４㎝ほど埋め土して作られている。

竈　南東コーナー部を壁外へ33㎝掘り込んで構築されている。規模は焚口部から煙道部まで75cm，袖部幅43cmである。袖部は南東コーナー部の壁の一部を利用して構築されている。火床部は床面を４㎝浅く掘りくぼめており，火床面が火熱でわずかに赤変している。

竈土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量
2　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量

ピット　２か所。深さはＰ１・２とも５㎝である。Ｐ１は位置と形状から出入り口施設に伴うピットの可能性が考えられるが，Ｐ２の性格は不明である。

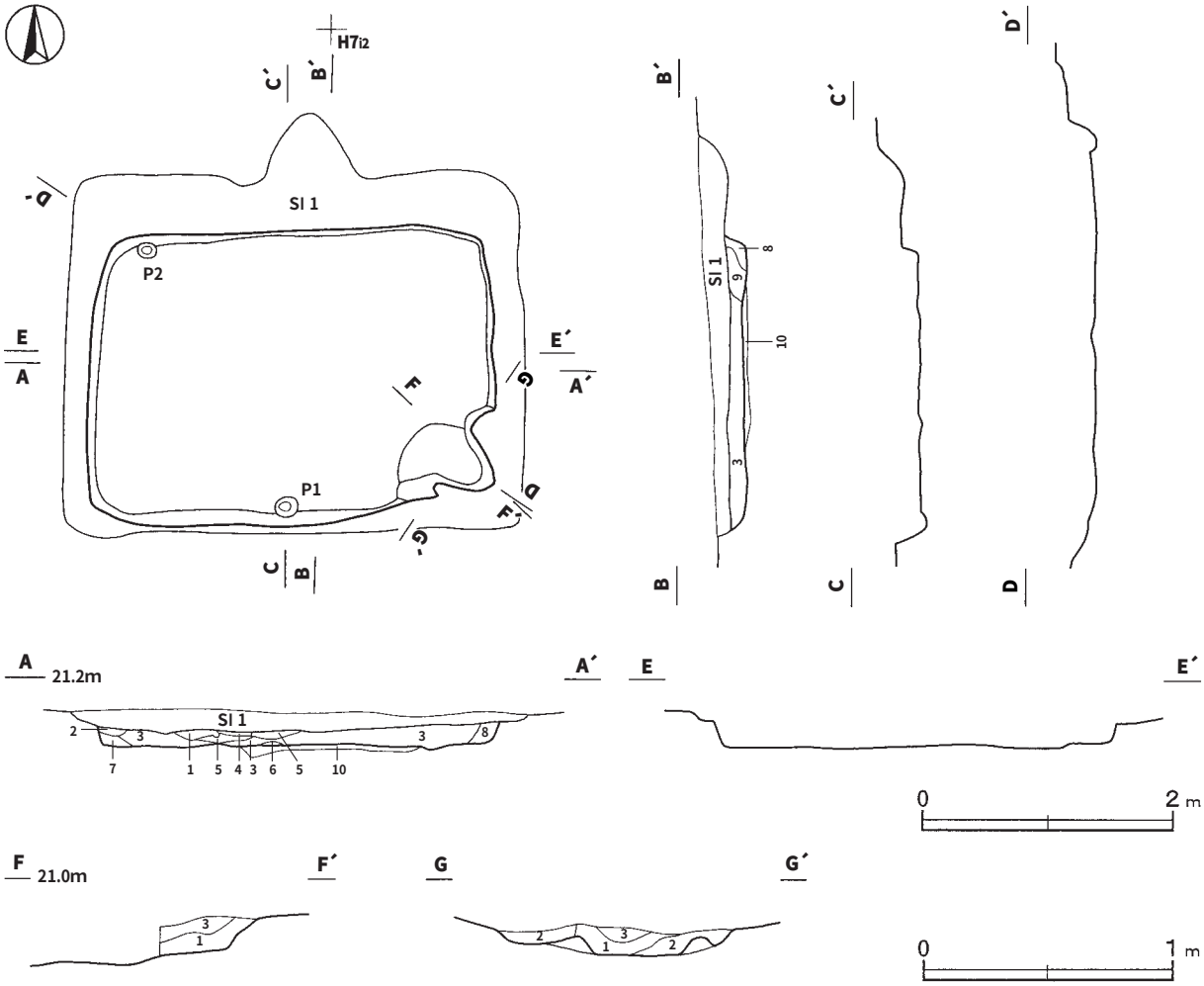
覆土　10層に分層される。ロームブロックを比較的多く含み，廃絶に伴って形成された人為堆積である。第10層は貼床の構築土である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
4　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
5　黒　褐　色　ロームブロック少量
6　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
7　褐　　色　ロームブロック中量
8　褐　　色　ロームブロック少量
9　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物微量
10　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物微量

遺物出土状況　土師器片27点（坏類１，甕類26），須恵器片4点（坏類２，蓋２）が出土している。底部片などから推定される個体数は，土師器甕１点である。重複で覆土も薄いため遺物の数も少なく，細片のため，図示することはできなかった。

所見　時期は，第１号住居に掘り込まれていることと出土土器から，８世紀後葉～９世紀前葉と考えられる。



第65図　第７号住居跡実測図

第８号住居跡（第66・67図）

位置　調査Ⅰ区南東部のＨ６i9区で，標高20.7mの緩やかな斜面部に位置している。

重複関係　第２号住居に上部を掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.0m，短軸2.7mの長方形で，主軸方向はN－18°－Eである。壁高は10～20cmで，緩やかに立ち上がっている。

床　平坦で，南壁から竈手前の中央部が帯状に踏み固められている。大部分が貼床で，ロームブロックや炭化材を含む暗褐色土（覆土土層断面図，第６層）を２～９㎝ほど埋め土して作られている。また，焼土塊が中央部の床面から検出されている。

竈　北壁中央部を壁外に58㎝掘り込んで構築されている。袖部はロームに砂質粘土を混ぜて地山のロームの上に構築されている。規模は焚口部から煙道部まで116cm，袖部幅75cmである。火床部は床面を15㎝掘りくぼめ

ており，火床面が火熱で赤変硬化している。煙道部は外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1	褐	色	ローム粒子・焼土粒子少量
2	暗褐	色	ロームブロック・焼土ブロック少量
3	暗褐	色	ロームブロック・焼土ブロック微量
4	暗赤褐	色	ロームブロック少量，炭化粒子微量
5	にぶい赤褐	色	ロームブロック中量
6	褐	色	ロームブロック中量，焼土ブロック微量
7	褐	色	粘土粒子中量，ロームブロック少量
8	暗褐	色	ロームブロック中量，焼土ブロック少量

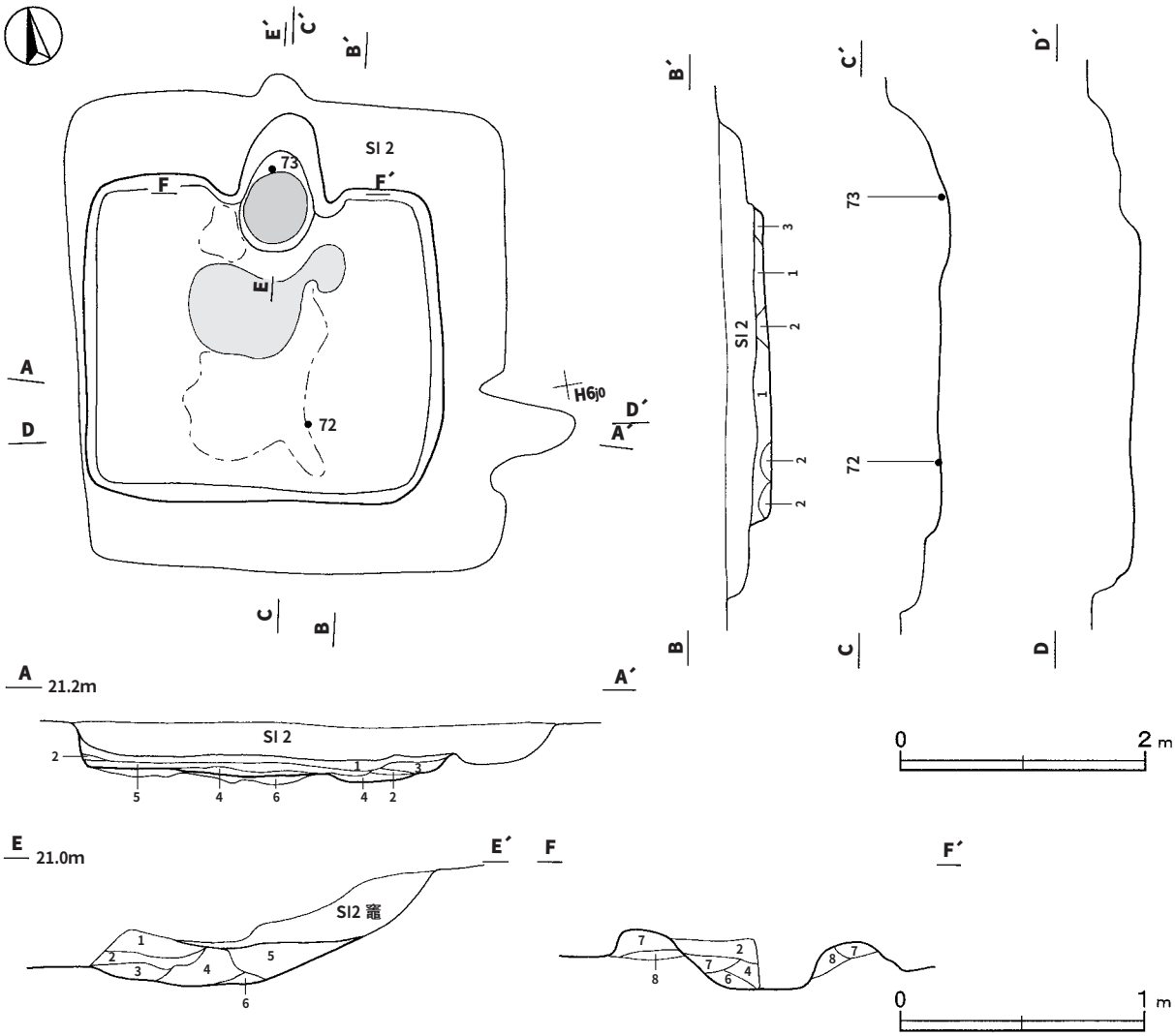
覆土　６層に分層される。第１～５層はロームブロック，炭化材や炭化物を比較的多く含む，焼失や廃絶に伴って形成された人為堆積である。第６層は貼床の構築土である。

土層解説

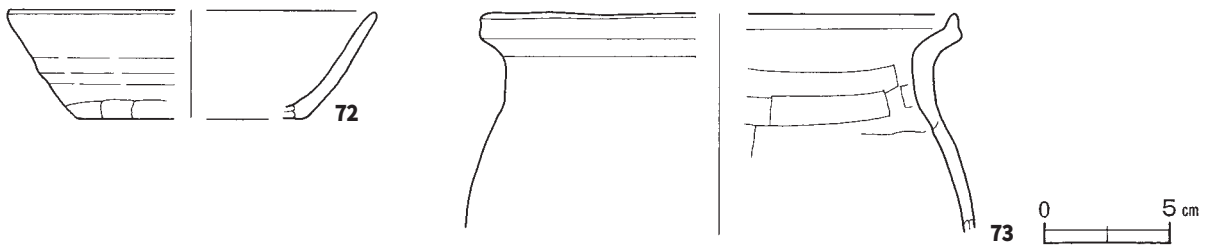
1	褐	色	ロームブロック少量，焼土粒子微量
2	暗褐	色	ロームブロック中量，炭化粒子微量
3	褐	色	ロームブロック中量，焼土ブロック微量
4	暗褐	色	ロームブロック・炭化材少量
5	褐	色	ロームブロック中量，焼土ブロック少量
6	暗褐	色	ロームブロック少量，炭化材微量

遺物出土状況　土師器片57点（坏類５，甕類52），須恵器片17点（坏類７，甕類９，蓋１）が出土している。ほとんどが細片で，図示できたのは72・73だけである。72は中央部の南壁近く，73は竈煙道部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見　床面からの焼土塊や覆土中の炭化材，炭化物の存在から，焼失住居の可能性が高い。廃絶時期は，第２号住居に掘り込まれていることと出土土器から９世紀前葉と考えられる。



第66図　第８号住居跡実測図



第67図　第８号住居跡出土遺物実測図

第８号住居跡出土遺物観察表（第67図）

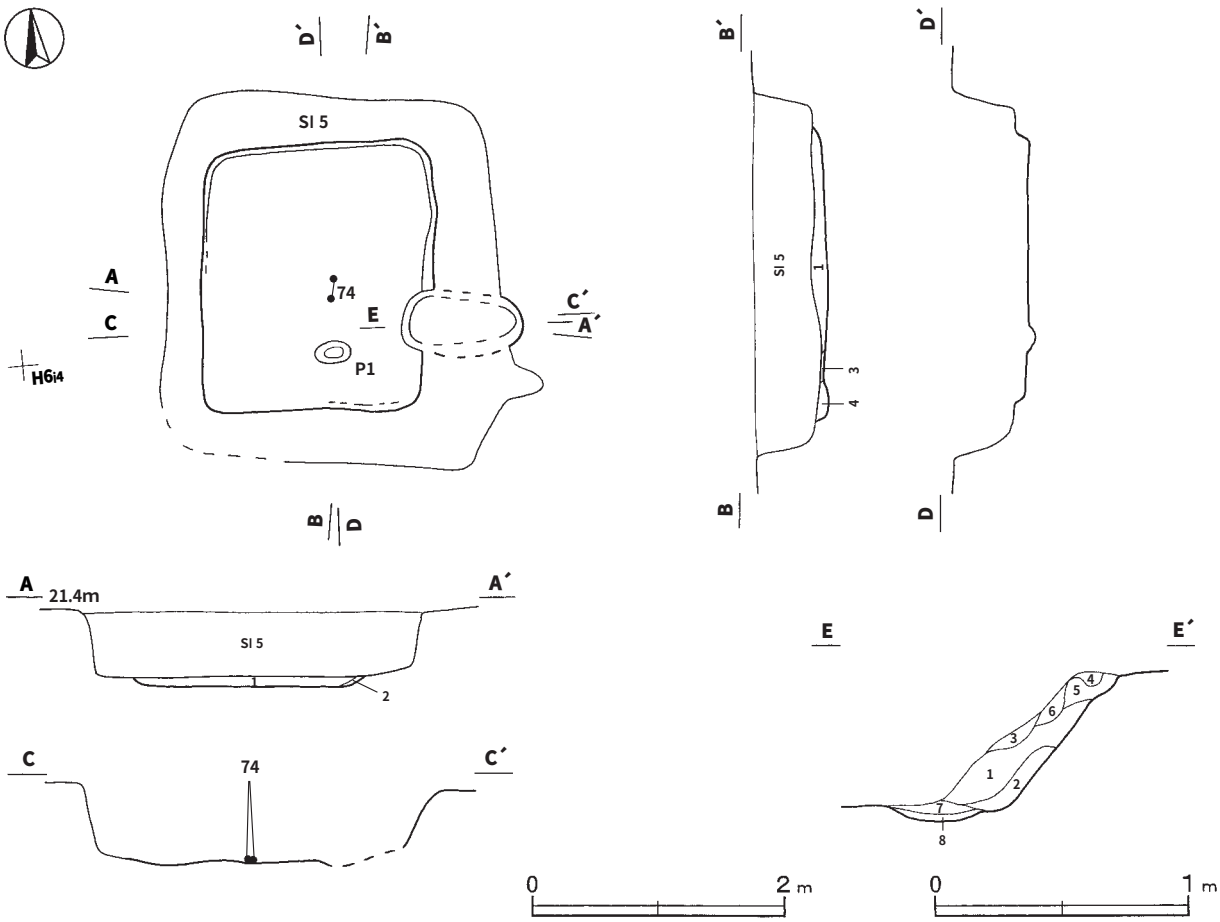
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
72	須恵器	坏	[14.4]	4.3	[8.9]	雲母	灰白	不良	体部下端手持ちヘラ削り	南壁下層	15%
73	土師器	甕	[18.6]	(8.7)	―	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ，内面ヘラナデ	竈	10%

第９号住居跡（第68・69図）

位置　調査Ⅰ区南東部のＨ６h4区で，標高20.8mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係　第５号住居に上部を掘り込まれている。

規模と形状　長軸2.2m，短軸1.9mほどの長方形で，主軸方向はN－８°－Eである。壁高は６～10cmで，緩やかに立ち上がっている。



第68図　第９号住居跡実測図

床　ほぼ平坦で，全体的に軟弱である。

竈　東壁南東コーナー寄りを壁外に73㎝ほど掘り込んで構築されている。規模は焚口部から煙道部まで97㎝で，袖部は認められない。火床部は床面を12㎝ほど掘りくぼめており，火床面が火熱でわずかに赤変している。煙道は，外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗　褐　色　粘土粒子少量，ロームブロック微量
2　黒　褐　色　焼土ブロック少量，炭化物微量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
4　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
5　褐　　色　ロームブロック・焼土粒子少量
6　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
7　暗　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック少量
8　黒　褐　色　炭化物中量，粘土粒子少量

ピット　１か所。深さは８㎝で，性格は不明である。

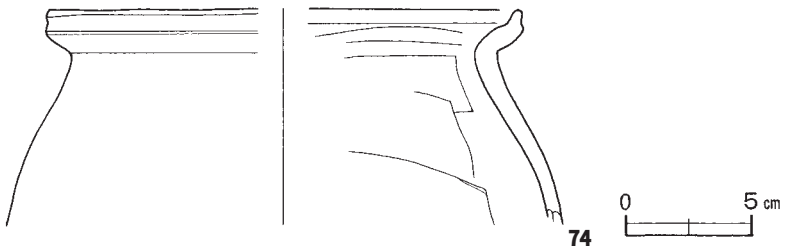
覆土　４層に分層される。薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　炭化物・粘土粒子少量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
4　黒　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片19点（甕類），須恵器片10点（坏類２，甕類５，蓋３）が出土している。ほとんどが細片で図示できたのは74だけで，中央部の床面から出土した破片が接合したものである。

所見　時期は，第５号住居に掘り込まれていることと出土土器から９世紀前葉と考えられる。



第69図　第９号住居跡出土遺物実測図

第９号住居跡出土遺物観察表（第69図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
74	土師器	甕	[18.5]	(8.5)	―	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ，内面ヘラナデ	中央部床面	5%

４　近世の墓壙と遺物

今回の調査で，近世の墓壙を２基確認した。骨片が出土していなくとも出土遺物と遺構の形状から墓壙と判断した。以下，遺構及び遺物について記述する。

第２号墓壙（SK103）（第70図）

位置　調査Ⅰ区北部のＦ５e6区で，標高22.4mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状　長軸1.3m，短軸1.2mの不整方形で，深さは123㎝である。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がっている。長軸方向はN－28°－Eである。

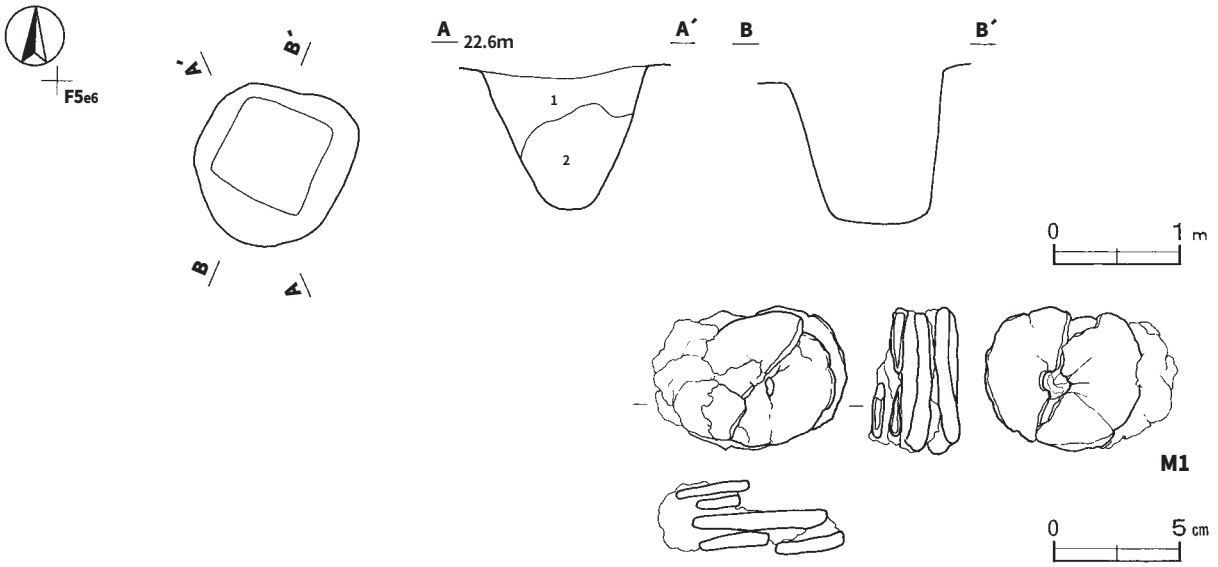
覆土　２層に分層される。ロームブロックを多く含んでいることから，人為的に埋め戻されたと考えられる。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　部位不明の骨片が底面から，古銭５枚が覆土中から出土している。

所見　錆で付着した寛永通寶の鉄銭は，六道銭と考えられる。形状及び骨片と古銭から墓壙と判断した。鉄銭の鋳造は元文期以降であるので，時期は18世紀中葉以降である。



第70図　第２号墓壙・出土遺物実測図

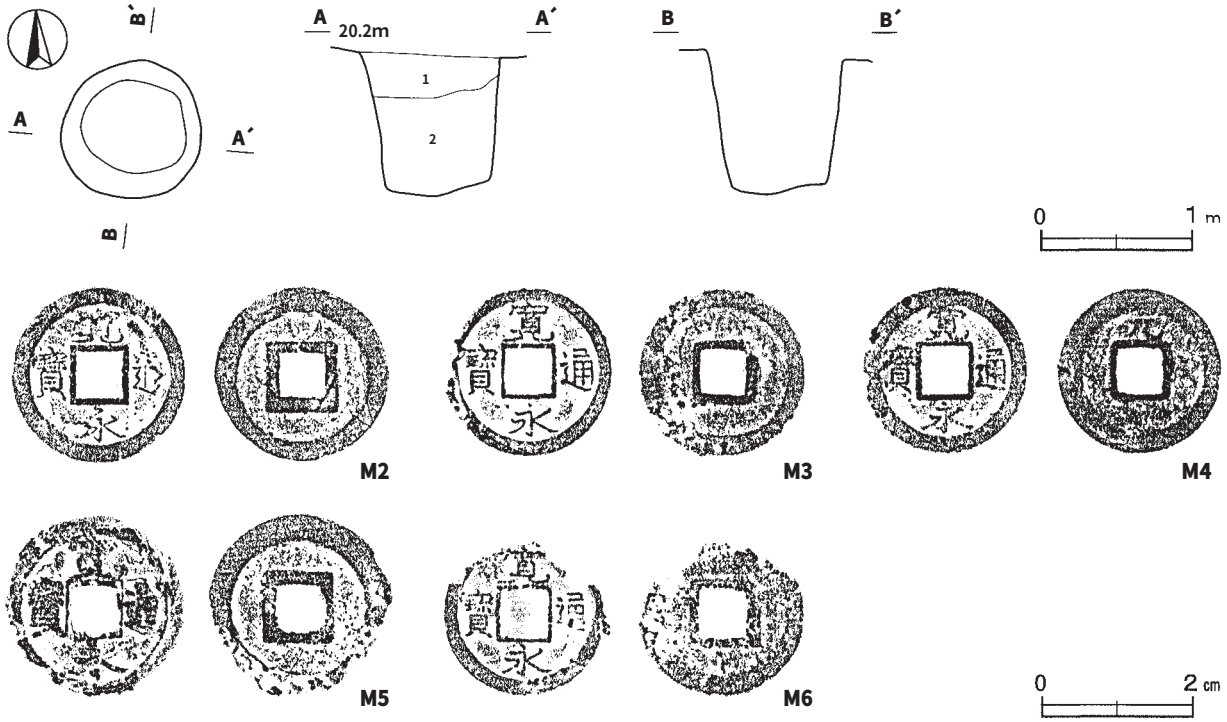
第2号墓壙出土遺物観察表（第70図）

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M1	寛永通寶	―	―	15.30	1739	鉄	５枚が銹着	覆土中	

第４号墓壙（SK141）（第71図）

位置　調査Ⅱ区北部のＡ２g1区で，標高20.1mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状　径1.1mの円形で，深さは141㎝である。底面は平坦で，壁は直立している。



第71図　第４号墓壙・出土遺物実測図

覆土　２層に分層される。ロームブロックを多く含んでいることから，人為的に埋め戻されていると考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量･焼土ブロック･炭化物微量　　2　黒　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　古銭５枚が覆土中から出土している。

所見　古銭は六道銭と考えられ，形状と古銭から墓壙と判断した。古銭は４枚が新寛永通寶であることから，時期は17世紀末以降である。

第4号墓壙出土遺物観察表（第71図）

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M2	寛永通寶	2.3	0.6	2.81	1697	銅	厚さ0.1，新寛永，無背銭	覆土中	PL21
M3	寛永通寶	2.2	0.6	2.18	1697	銅	厚さ0.1，新寛永，無背銭	覆土中	PL21
M4	寛永通寶	2.2	0.6	2.14	1697	銅	厚さ0.1，新寛永，背「元」銭	覆土中	PL21
M5	寛永通寶	2.4	0.6	2.17	1636	銅	厚さ0.1，古寛永，無背銭	覆土中	PL21
M6	寛永通寶	2.2	0.7	(1.3)	1697	銅	厚さ0.1，新寛永，無背銭	覆土中	PL21

５　その他の遺構と遺物

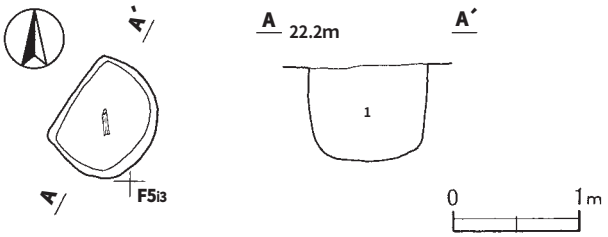
今回の調査で，時期の明確でない墓壙３基，溝跡３条，土坑85基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

(1)　墓壙

第１号墓壙（SK85）（第72図）

位置　調査Ⅰ区北部のＦ５h2区で，標高21.9mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状　長径0.９m，短径0.7mの不整楕円形で，深さは74㎝である。底面は皿状で，壁は直立している。長径方向はN－25°－Eである。



第72図　第１号墓壙実測図

覆土　単一層である。ロームブロックを多く含んでいることから，人為的に埋め戻されていると考えられる。

土層解説
1　褐　　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　部位不明の骨片が底面から出土している。

所見　骨片が検出されていることや形状などから墓壙と考えられる。時期は，伴う遺物が出土していないため不明である。

第３号墓壙（SK121）（第73図）

位置　調査Ⅰ区北西部のＦ４j7区で，標高21.１mの台地縁辺部に位置している。

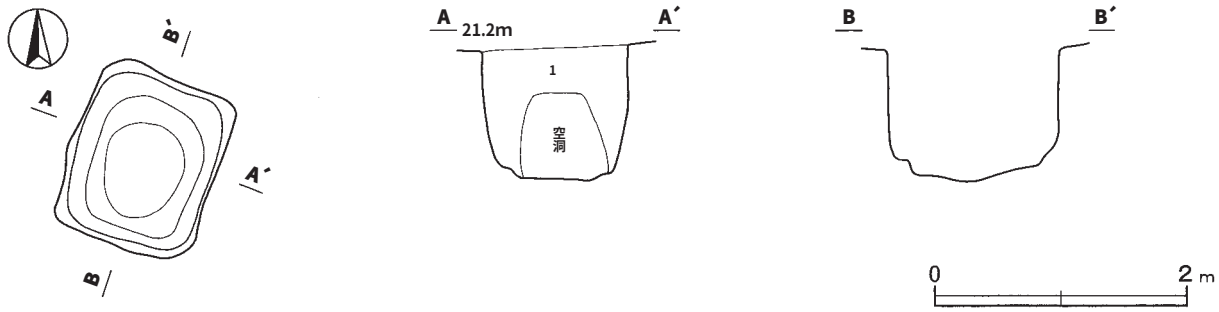
規模と形状　長軸1.4m，短軸1.2mの隅丸長方形で，深さは104㎝である。底面は皿状で，壁は直立している。長軸方向はN－18°－Eである。

覆土　単一層である。ロームブロックや粘土ブロックを多く含んだ黒褐色土であることから，人為的に埋め戻されていると考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量

遺物出土状況　第１層の下には空洞が残存しており，底面から骨片（部位不明）が出土している。棺の材は検出できなかった。

所見　骨片が検出されていることや形状などから墓壙と考えられる。時期は，伴う遺物が出土していないため不明である。



第73図　第３号墓壙実測図

第５号墓壙（SK145）（第74図）

位置　調査Ⅰ区北東部のＦ４j7区で，標高20.8mの台地縁辺部に位置している。

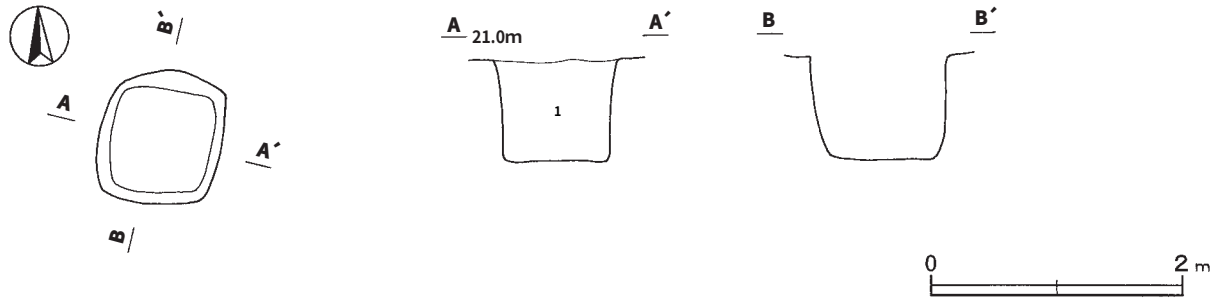
規模と形状　長軸1.1m，短軸1.0mの方形で，深さは80㎝である。底面は平坦で，壁は直立している。長軸方向はN－13°－Eである。

覆土　単一層である。ロームブロックを多く含んでいることから，人為的に埋め戻されていると考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，粘土粒子少量

遺物出土状況　部位不明の骨片が底面から出土している。

所見　骨片が検出されていることや形状などから墓壙と考えられる。時期は，伴う遺物が出土していないため不明である。



第74図　第５号墓壙実測図

(2) 溝跡

第１号溝跡（第75図）

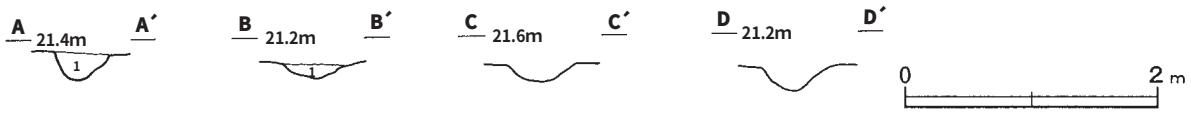
位置　調査Ｉ区南西部のＨ５h6区～Ｉ５a5区で，遺構確認面の南部と北部の高低差が約40cmの傾斜地に位置している。

規模と形状　Ｈ５h6区から南西方向（Ｎ－21°－Ｅ）にほぼ直線的に延び，規模は長さ12.1m，上幅0.4～0.6m，下幅0.1～0.2m，深さ10～21㎝である。壁は外傾して立ち上がり，断面形がU字状を呈している。

覆土　単一層である。薄いため堆積状態は不明である

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量

所見　調査区域外の南側は小野川に続く浅い谷部にあたり，遺構の立地からして排水溝，もしくは暗渠と推定される。時期は，伴う遺物が出土していないため不明である。



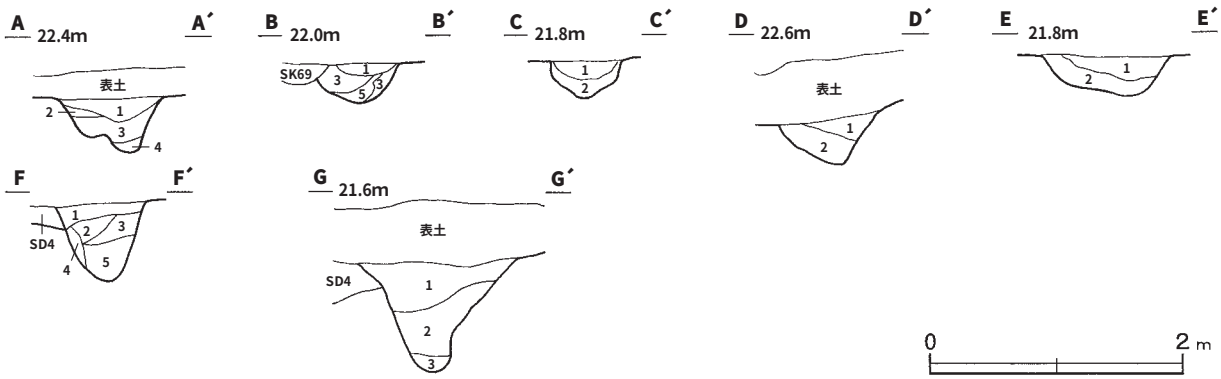
第75図　第１号溝跡土層断面図

第２号溝跡（第76図）

位置　調査Ｉ区北西部のＦ３h1区～Ｇ５c3区で，遺構確認面の南部と北部の高低差が約１mの傾斜地に位置している。

重複関係　第81号土坑の南部，第４号溝跡の東部を掘り込み，南部を第61・69号土坑，第３号溝に掘り込まれている。

規模と形状　Ｇ５a6区から西方向（Ｎ－75°－W）へ直線的に18.4m延び，その付近でほぼ直角に屈曲し北方向（Ｎ－５°－Ｅ）へ直線的に15.8m延びている。北方向に向かう溝に，Ｆ５j5区から西方向（Ｎ－70°－W）へ直線的に21.0m延びる溝がほぼ直角に合流している。末端が調査区域外に延びているため，全体の規模は不明である。確認できた規模は長さ55.2m，上幅0.5～1.2m，下幅0.2～0.4m，深さ30～85cmで，壁は外傾して立ち上がり，断面形がU字状とV字状を呈している。



第76図　第２号溝跡土層断面図

覆土　５層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す自然堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
5　黒　褐　色　ロームブロック中量，褐色粘土粒子少量

所見　調査区域外の北側は小野川に続く浅い谷部にあたり，遺構の立地から根切り溝，もしくは排水溝と推測される。形状と覆土から２本の溝が合流して１本の溝として機能していたと考えられる。伴う遺物が出土していないため，時期は不明である。

第３号溝跡（第77図）

位置　調査Ⅰ区北西部のＧ５b1区～Ｇ５c2区で，遺構確認面の南部と北部の高低差が約0.1mの穏やかな傾斜地に位置している。

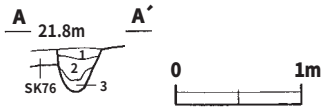
重複関係　第72号土坑の北部，第２号溝跡の南部を掘り込んでいる。

規模と形状　Ｇ５c2区の第２号溝から分岐し西方向（Ｎ－75°－Ｗ）に弧状に延び，また第２号溝に合流している。長さは7.3mで，上幅0.3～0.5m，下幅0.1～0.2m，深さ36㎝である。壁は外傾して立ち上がり，断面形はＵ字状を呈している。

覆土　３層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す堆積状態のため，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ロームブロック中量



第77図　第３号溝跡土層断面図

所見　第２号溝を迂回するような形状である。排水溝の可能性が考えられる。時期は，本跡に伴う遺物が出土していないため不明である。

⑶　土坑

ここでは，１基の土坑について記述し，その他の時期及び性格が不明な84基の土坑については一覧表で示し，あわせて実測図と土層解説を記載する。

第６号土坑（第78図）

位置　調査Ⅰ区南東部のＨ６i4区で，標高22.2mの台地縁辺部に位置している。また，北側1.4mに第５号住居が位置している。

規模と形状　長径1.9m，短径1.5mの不整楕円形で，深さは69㎝である。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　５層に分層される。第１～２層は周囲からの土砂が流入した様相を呈する自然堆積で，第３～５層は不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

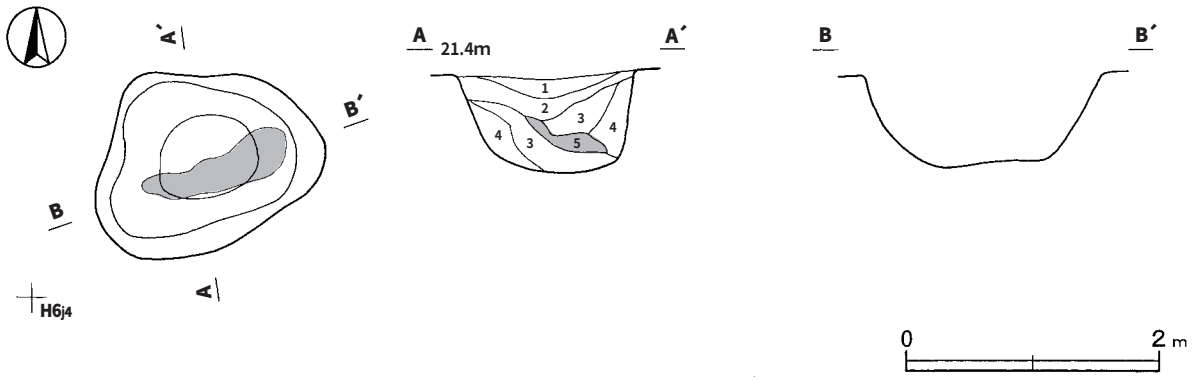
土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・粘土粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量
4　褐　　色　ローム粒子多量
5　灰　褐　色　粘土粒子中量

遺物出土状況　粘土塊が覆土中層から出土している。

所見　時期は，本跡に伴う遺物が出土していないため不明である。粘土塊は調査Ⅰ区南部で採集できる灰褐

色もので，近接する第５号住居の竈材と同一のものと見られ，関連性がうかがえる。



第78図　第６号土坑実測図

第１号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子少量
4　褐　　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

第２号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化物少量
3　褐　　色　ローム粒子少量

第３号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子微量

第４号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック少量

第５号土坑土層解説
1　極暗褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量
4　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量

第７号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック中量

第９号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子多量

第12・13号土坑土層解説
1　暗　褐　色　炭化物・ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量
4　暗　褐　色　ローム粒子微量
5　黒　褐　色　ローム粒子微量
6　黒　褐　色　ロームブロック微量
7　暗　褐　色　ローム粒子中量

第14号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック微量

第15・16号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ローム粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック少量
5　褐　　色　ローム粒子少量
6　暗　褐　色　ローム粒子少量

第17号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量

第18号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
5　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
6　黒　褐　色　ロームブロック中量

第19号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量

第20号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化物少量
3　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
4　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
5　黒　　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量

第21号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子多量

第28号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
2　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　炭化物・ローム粒子少量，焼土粒子微量

第29号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量

第30号土坑土層解説
1　暗　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化物少量

第32号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
4　黒　褐　色　炭化粒子中量
5　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量

第33号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量

第34号土坑土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量

第35・36号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ロームブロック少量
4　黒　褐　色　ローム粒子少量
5　褐　　色　ロームブロック中量

第38号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック中量
2　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

第41・42号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量
3　褐　　色　ロームブロック少量

第43号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック中量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量

第44号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第45号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量

第46号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

第48号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第49号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック中量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量

第50号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック微量
4　褐　　色　ロームブロック少量

第51号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ローム粒子中量

第53号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量

第54号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量

第55号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量

第58号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量

第60号土坑土層解説
1　黒　褐　色　粘土粒子多量，ローム粒子中量
2　暗　褐　色　ローム粒子多量

第61号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量

第62・71号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子中量

第66号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子中量

第67・68号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化粒子少量

第69号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

第73号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第75号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ローム粒子中量

第76号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック微量

第77号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ロームブロック中量

第78号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第79号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子多量

第82号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量・炭化物微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック中量

第84号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量

第86号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック少量

第87号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量

第91土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第93号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量

第94号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量

第95号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量

第96号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量

第97号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量

第98号土坑土層解説
1　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
2　黒　褐　色　焼土粒子中量，炭化物・ローム粒子少量
3　褐　　色　ローム粒子中量

第99号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック少量

第100号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック中量

第101号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック少量

第102号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子微量

第104号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック・炭化粒子少量

第105号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量，炭化物微量

第108号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量

第112号土坑土層解説
1　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
2　黒　褐　色　炭化粒子中量，ロームブロック少量

第114号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量

第120号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量

第126号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量

第129号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量，炭化物・焼土粒子微量

第135号土坑土層解説
1　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量，
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量

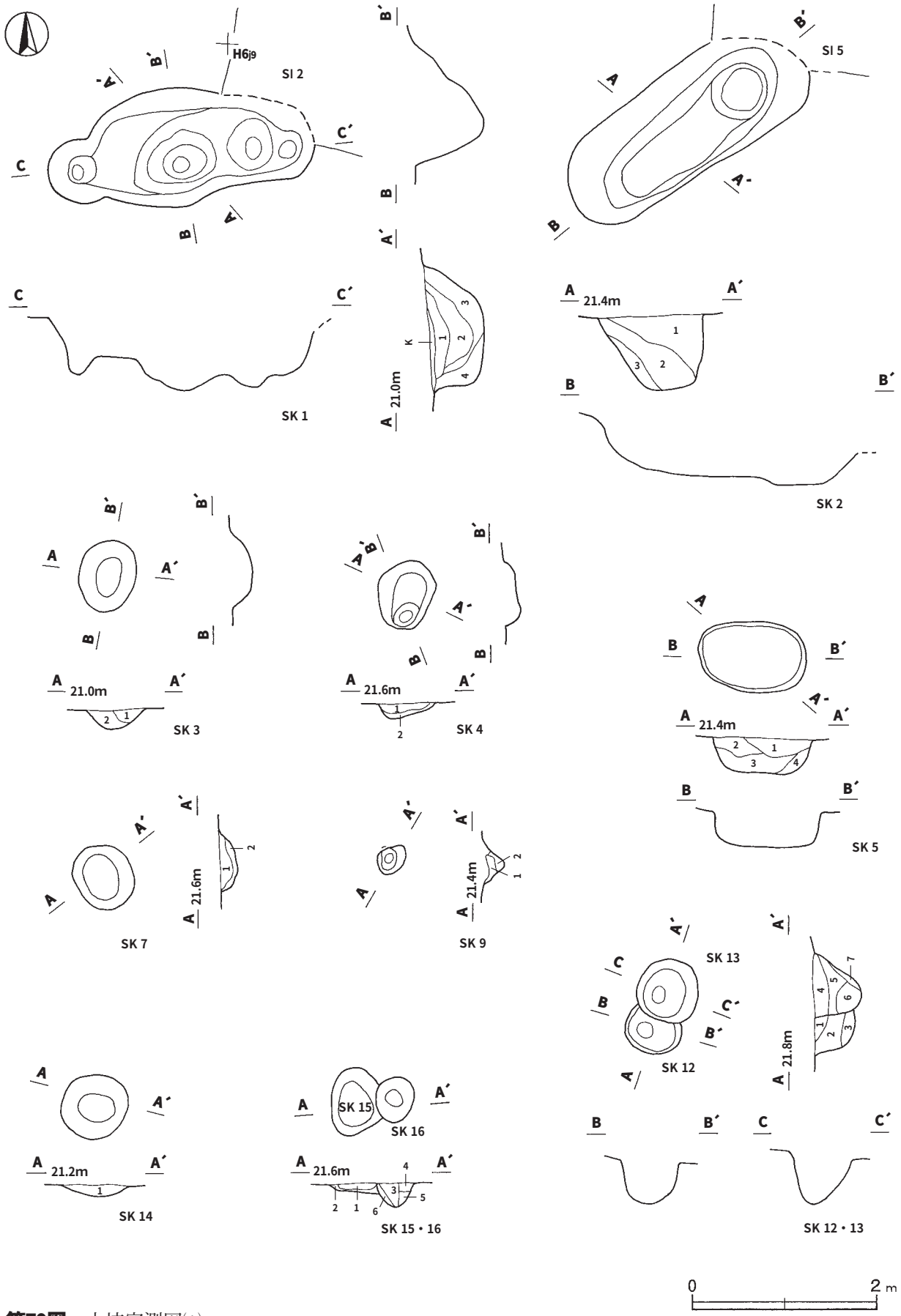
第138号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　炭化粒子少量

第139号土坑土層解説
1　黒　褐　色　炭化粒子中量，ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量

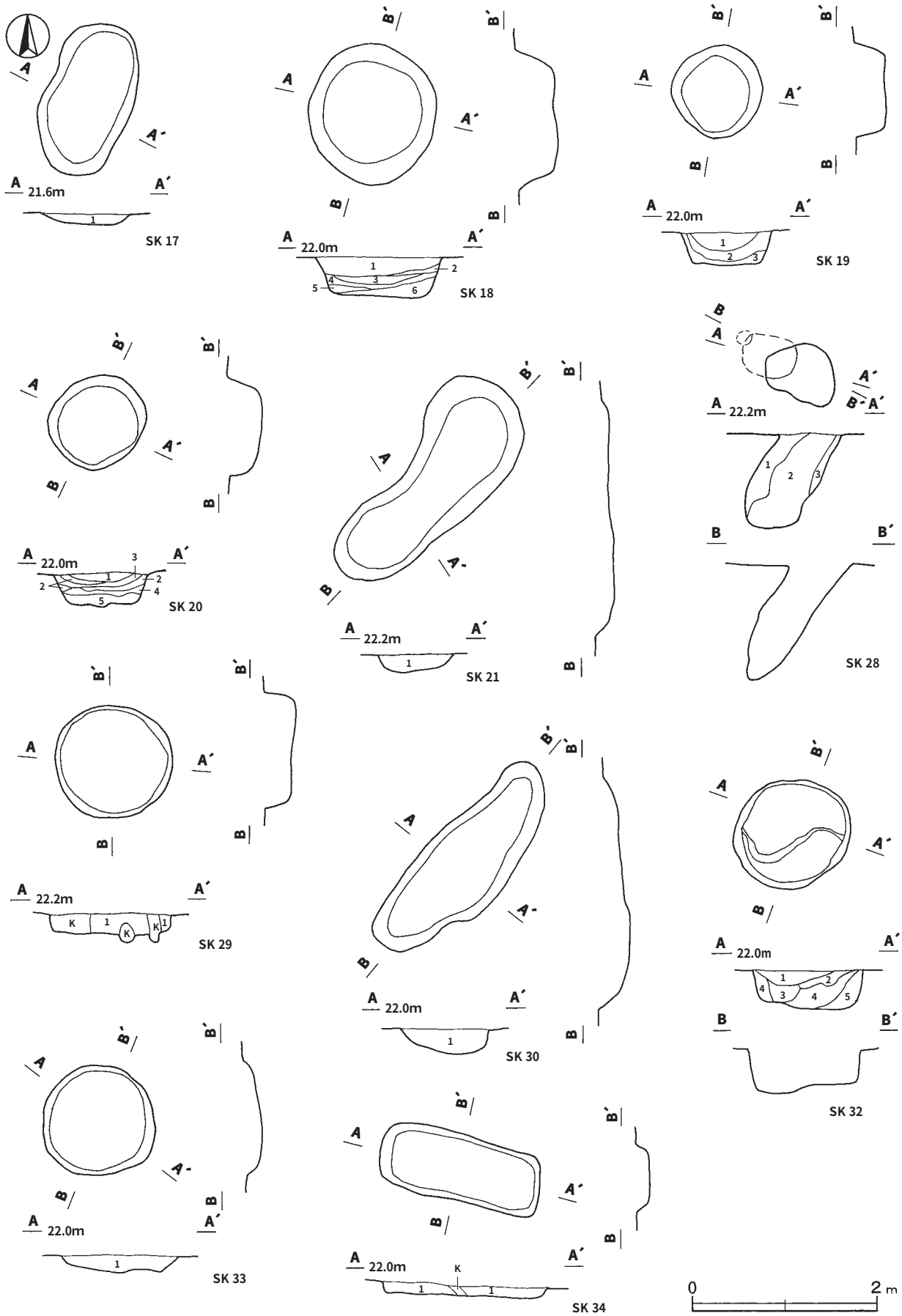
第140号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子多量
2　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
3　黒　褐　色　炭化粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量

第142号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物少量

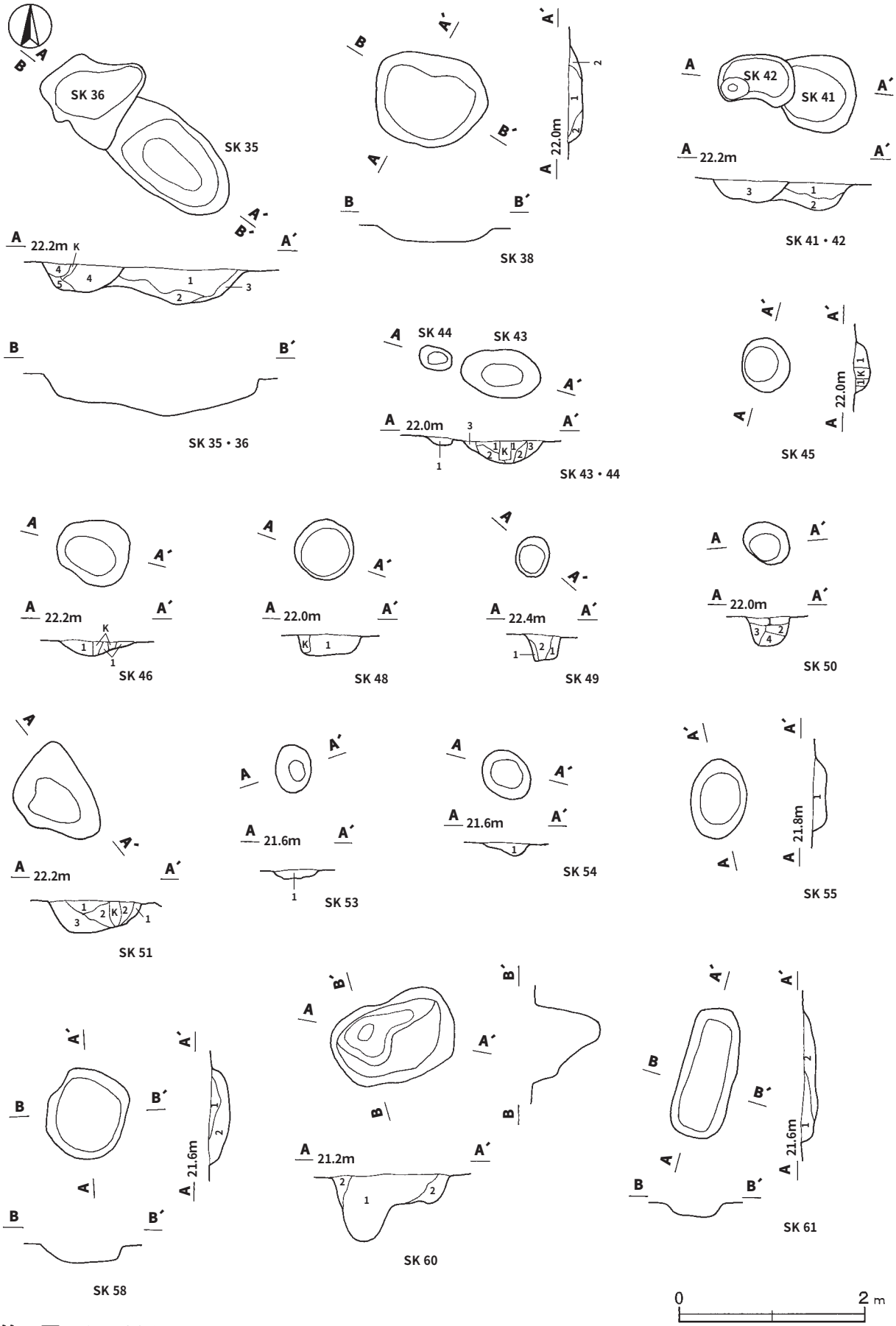
第144号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量


SI 2
H6j9
SI 5
SK 1
SK 2
SK 3
SK 4
SK 5
SK 7
SK 9
SK 12
SK 13
SK 14
SK 15
SK 16
SK 15・16
SK 12・13
21.0m
21.4m
21.6m
21.2m
21.8m
0
2 m

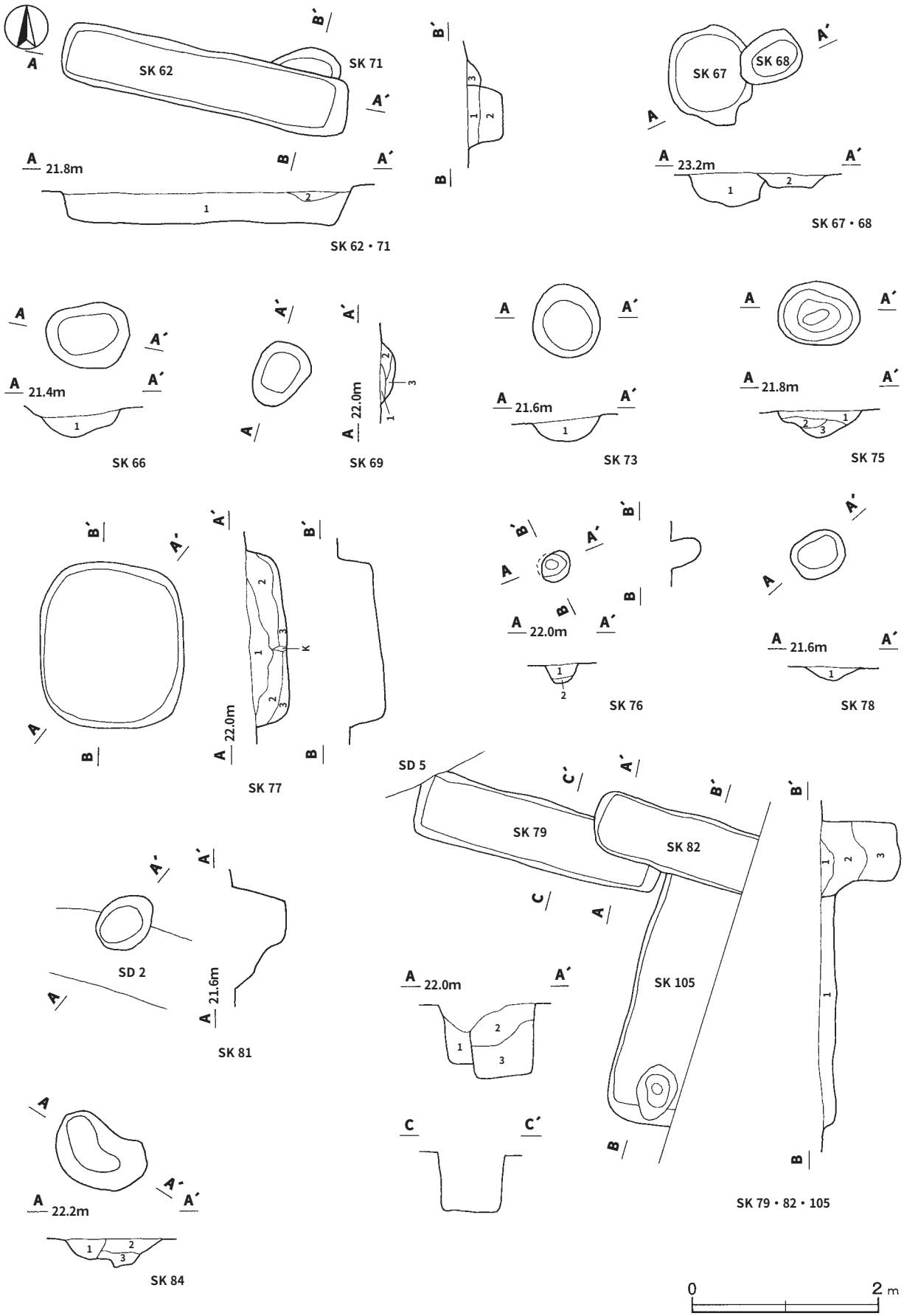
第79図　土坑実測図(1)



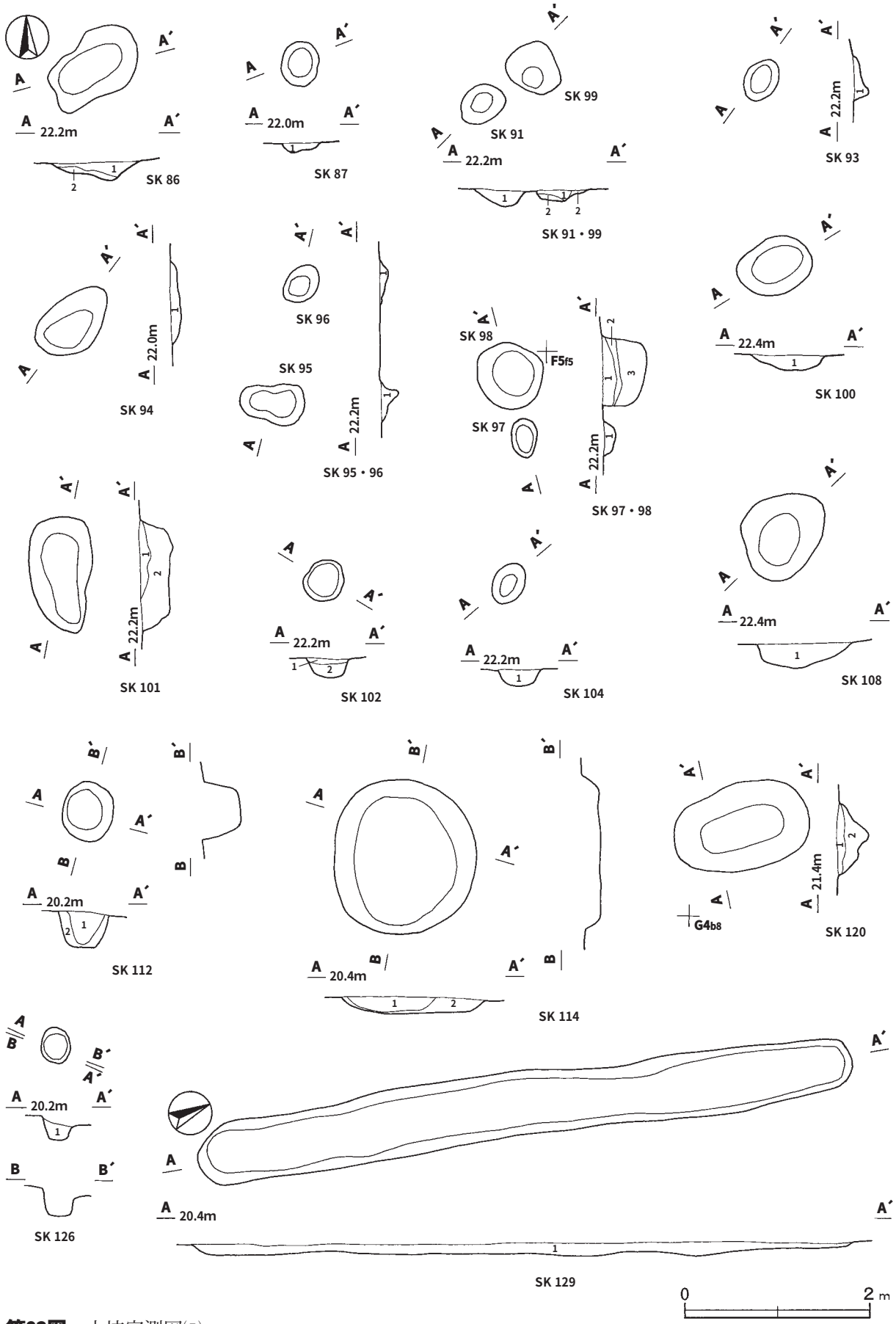
第80図　土坑実測図(2)


SK 36
SK 35
SK 35・36
SK 38
SK 42
SK 41
SK 41・42
SK 44
SK 43
SK 43・44
SK 45
SK 46
SK 48
SK 49
SK 50
SK 51
SK 53
SK 54
SK 55
SK 58
SK 60
SK 61
0
2 m

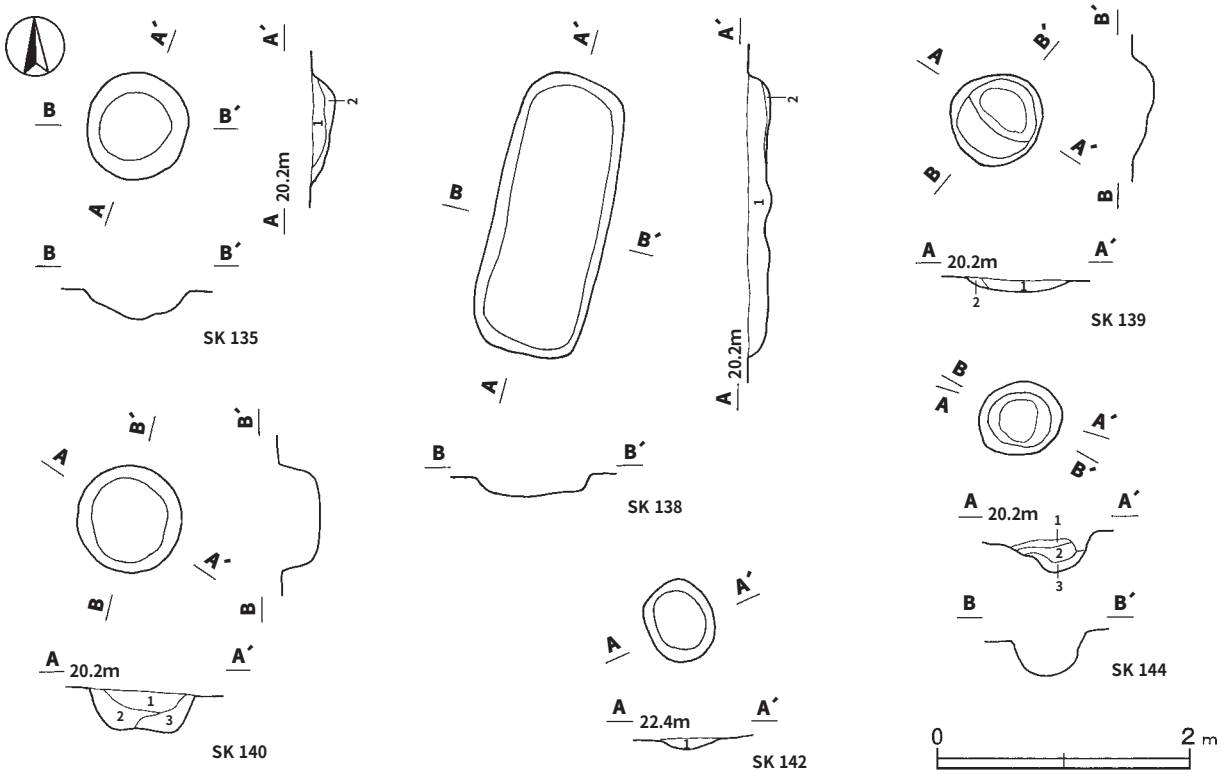
第81図　土坑実測図(3)


SK 62
SK 71
SK 62・71
SK 67
SK 68
SK 67・68
SK 66
SK 69
SK 73
SK 75
SK 77
SK 76
SK 78
SD 5
SK 79
SK 82
SK 105
SK 79・82・105
SD 2
SK 81
SK 84
0
2 m

第82図　土坑実測図(4)


SK 86
SK 87
SK 91
SK 99
SK 91・99
SK 93
SK 94
SK 96
SK 95
SK 95・96
SK 98
F5f5
SK 97
SK 97・98
SK 100
SK 101
SK 102
SK 104
SK 108
SK 112
SK 114
SK 120
G4b8
SK 126
SK 129
0
2 m

第83図　土坑実測図(5)



第84図　土坑実測図(6)

(4)　遺構外出土遺物

当遺跡から出土した遺構に伴わない主な遺物について，実測図及び出土遺物観察表で記載する。

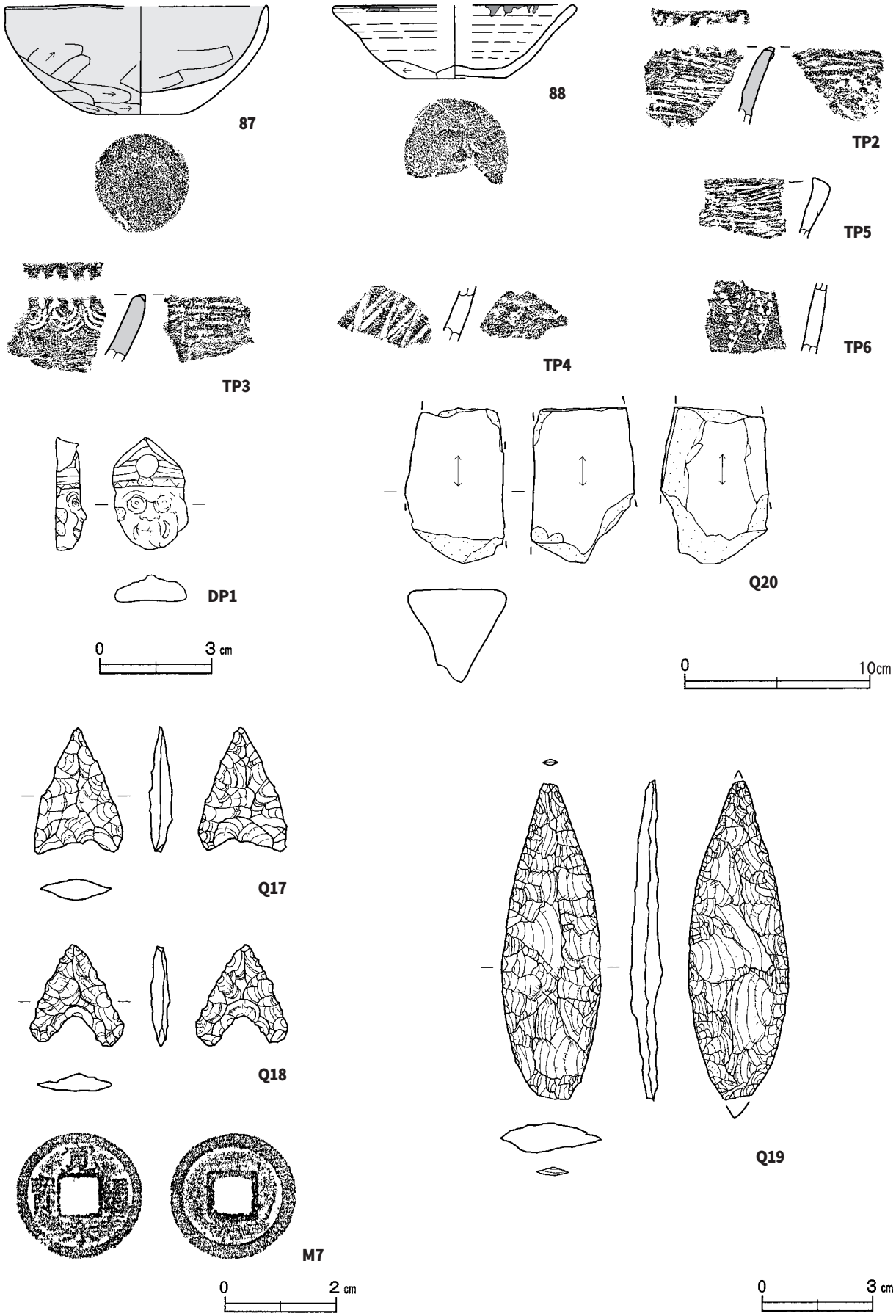
遺構外出土遺物観察表（第85図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
87	土師器	坏	[14.1]	5.8	4.9	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	B 1 c8	70%
88	須恵器	坏	[12.8]	3.9	5.4	石英・雲母	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り，底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラ削り，煤付着	H 6 j8	50%　PL20
TP2	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	長石・石英・雲母・微礫・繊維	にぶい赤褐	普通	口縁部押圧文，内・外面貝殻条痕文	H 6	3% 早期後葉 PL22
TP3	縄文土器	深鉢	—	(3.6)	—	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	口縁部押圧文，内・外面貝殻条痕文	B 2	3% 早期後葉 PL22
TP4	縄文土器	深鉢	—	(3.1)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	斜沈線	B 2	3% 早期後葉 PL22
TP5	縄文土器	深鉢	—	(3.3)	—	長石・雲母	にぶい橙	良好	口縁部外面貝殻条痕文，貝殻腹縁文を施文	H 6	3% 前期後半 PL22
TP6	縄文土器	深鉢	—	(3.8)	—	長石・石英	にぶい黄橙	普通	貝殻腹縁文を施文	H 6	3% 前期後半 PL22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
DP7	泥面子	3.0	(2.0)	0.8	(3.8)	白色粒子	橙	普通	猿の太閤	G 4 b7	95%　PL22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q17	石鏃	2.2	1.5	0.4	1.1	チャート	両面押圧剥離による加工，無茎	B 1	PL22
Q18	石鏃	1.8	1.7	0.3	0.7	黒曜石	両面押圧剥離による加工，無茎	I 6 b0	PL22
Q19	尖頭器	(8.6)	2.7	0.8	(14.7)	硬質頁岩	主要剥離面を一部残し，両側縁を調整，先端部欠損	G 3 j6	PL22
Q20	砥石	(8.4)	(5.8)	5.0	(270.0)	安山岩	断面三角形，砥面３面	G 5	PL21

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M7	寛永通寶	2.3	0.7	2.12	1697	銅	厚さ0.1，新寛永，無背銭	B 1	



第85図　遺構外出土遺物実測図

表２　古墳時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模（m）（長軸×短軸）	壁高（cm）	床面	壁溝	内部施設					覆土	出土遺物	時代
								主柱穴	出入口ピット	ピット	炉・竈	貯蔵穴			
10	G６i3	N-58°-E	長方形	4.76×3.35	18～22	平坦	－	－	－	－	炉２	1	人為	土師器，ガラス小玉	５世紀前葉
11	H５a7	－	－	(6.08)×(1.68)	13～17	平坦	－	－	－	3	－	－	不明	土師器	５世紀前葉
12	G６d2	N-５°-E	－	5.50×(4.32)	32～36	平坦	－	2	1	4	－	－	自然	土師器，須恵器	５世紀前葉
13	G５c0	N-29°-W	方形	5.43×5.32	8～20	平坦	－	4	－	2	炉２	1	不明	土師器，須恵器	５世紀前葉
14	H４a0	N-８°-E	方形	6.47×6.45	20～47	平坦	－	3	－	2	炉２	1	人為	土師器	５世紀前葉
15	G４b7	N-65°-E	方形	5.02×4.98	2～16	平坦	－	－	－	－	－	1	不明	土師器，石製品	５世紀前葉
16	B１f9	N-８°-W	－	5.74×(3.95)	37～44	平坦	一部	1	－	1	炉２	1	人為	土師器，石製模造品	５世紀前葉
17A	B１c0	N-78°-E	長方形	3.92×3.05	42～48	平坦	－	1	－	4	炉１	1	人為	土師器，石製品	５世紀前葉
17B	B１c0	N-78°-E	長方形	3.72×2.73	8～50	平坦	－	1	－	8	炉１	1	人為	土師器	５世紀前葉
18	B１c8	N-30°-E	長方形	2.96×2.67	2～8	平坦	－	－	－	－	炉１	－	不明	土師器，石製品	５世紀前葉
19	B１a8	N-72°-W	長方形	6.38×5.76	7～12	平坦	ほぼ全周	4	－	5	炉１	2	人為	土師器，石製品	５世紀中葉
20	A１j5	N-74°-W	方形	6.95×6.88	10～16	平坦	全周	4	－	5	炉１	1	人為	土師器，石製品	５世紀中葉

表３　平安時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模（m）（長軸×短軸）	壁高（cm）	床面	壁溝	内部施設					覆土	出土遺物	時代
								主柱穴	出入口ピット	ピット	炉・竈	貯蔵穴			
1	H７i1	N-５°-W	長方形	3.75×2.86	5	平坦	－	－	－	－	竈１	－	人為・自然	土師器，須恵器	９世紀前葉
2	H６i9	N-15°-W	長方形	3.88×3.32	10～26	平坦	－	1	1	－	竈２	－	人為	土師器，須恵器	９世紀後葉
3	H６j8	N-104°-E	方形	2.86×2.65	15～33	平坦	－	－	－	1	竈１	1	人為・自然	土師器，須恵器	９世紀前葉
4	H６i6	N-38°-E	長方形	3.12×2.50	8～15	平坦	－	－	－	13	竈１	－	人為	土師器，須恵器	９世紀前葉
5	H６h4	N-99°-E	方形	2.90×2.64	50	平坦	－	－	1	－	竈１	－	人為・自然	土師器，須恵器	９世紀後葉
6	H６f8	N-76°-E	方形	3.80×3.45	10～18	平坦	－	－	1	－	竈１	－	人為	土師器，須恵器	９世紀前葉
7	H７i1	N-119°-E	長方形	3.22×2.34	15～20	平坦	－	－	1	1	竈１	－	人為	土師器，須恵器	８世紀後葉
8	H６i9	N-18°-E	方形	2.92×2.68	10～20	平坦	－	－	－	－	竈１	－	人為	土師器，須恵器	９世紀前葉
9	H６n4	N-８°-E	長方形	2.92×2.68	6～10	平坦	－	－	－	1	竈１	－	不明	土師器，須恵器	９世紀前葉

表４　古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模	深さ	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時代	備考・重複関係
				長径×短径(m)	(cm)						
31	G５a9	－	円形	1.62×1.52	34	外傾	平坦	不明	土師器	５世紀前葉	
56	G４c8	－	円形	1.22×1.16	18	緩斜	平坦	自然	土師器	５世紀前葉	
59	G４c9	N－50°－W	楕円形	1.20×0.92	15	緩斜	凸凹	人為	土師器	５世紀前葉	
72	G５c2	N－23°－W	〔不整方形〕	(2.03)×1.99	21	緩斜	平坦	自然	土師器	５世紀前葉	本跡→SD３
113	B１c7	－	円形	0.43×0.40	28	外傾	平坦	人為	土師器	５世紀中葉	SI 18→本跡
118	B１b8	N－60°－W	楕円形	0.60×0.50	12	緩斜	皿状	不明	土師器	５世紀中葉	SI 18→本跡
125	B１g0	N－37°－E	隅丸方形	1.38×1.30	50	外傾	平坦	人為	土師器	５世紀前葉	
128	B２a1	－	円形	1.58×1.52	52	外傾	平坦	人為	土師器	５世紀中葉	本跡→SK129
130	B１c7	N－61°－W	楕円形	0.45×0.40	21	外傾	平坦	自然	土師器	５世紀中葉	SI 18→本跡
137	A１j0	－	円形	1.32×1.26	39	外傾	平坦	人為	土師器	５世紀中葉	本跡→SK138

表５　土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模	深さ	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考・重複関係
				長径×短径(m)	(cm)					
1	Ｈ６ｊ８	Ｎ－79°－Ｅ	［楕円形］	(2.33)×1.30	75	垂直	凸凹	自然		本跡→ＳＩ２
2	Ｈ６ｊ４	Ｎ－58°－Ｅ	楕円形	2.90×1.13	80	緩斜	平坦	自然		本跡→ＳＩ５
3	Ｈ６ｆ３	Ｎ－14°－Ｅ	楕円形	0.80×0.62	20	緩斜	皿状	自然		
4	Ｈ６ｇ7	Ｎ－15°－Ｅ	楕円形	0.76×0.59	17	垂直	平坦	自然		
5	Ｈ６ｈ５	Ｎ－71°－Ｗ	楕円形	1.20×0.77	39	垂直	平坦	人為		
6	Ｈ６ｉ４	Ｎ－74°－Ｅ	不整楕円形	1.89×1.52	69	垂直	平坦	人為		
7	Ｈ６ｈ１	Ｎ－36°－Ｗ	楕円形	0.70×0.60	16	緩斜	平坦	自然		
9	Ｈ６ｇ１	Ｎ－29°－Ｅ	楕円形	0.38×0.30	22	緩斜	皿状	自然		
12	Ｈ６ｅ２	Ｎ－67°－Ｗ	［楕円形］	0.60×(0.40)	46	外傾	皿状	自然		本跡→ＳＫ13
13	Ｈ６ｅ２	－	円形	0.68×0.68	55	緩斜	皿状	自然		ＳＫ12→本跡
14	Ｉ６ａ１	Ｎ－71°－Ｅ	楕円形	0.77×0.69	15	緩斜	皿状	不明		
15	Ｈ６ｆ４	Ｎ－５°－Ｅ	［楕円形］	0.72×(0.52)	10	緩斜	平坦	自然		本跡→ＳＫ16
16	Ｈ６ｆ４	Ｎ－10°－Ｅ	楕円形	0.50×0.40	30	緩斜	皿状	人為		ＳＫ15→本跡
17	Ｈ５ｉ７	Ｎ－20°－Ｅ	楕円形	1.68×0.95	13	緩斜	平坦	不明		
18	Ｇ６ｈ４	Ｎ－0°	楕円形	1.55×1.38	42	外傾	平坦	人為		
19	Ｇ６ｇ３	－	円形	0.99×0.98	34	外傾	平坦	自然		
20	Ｇ６ｈ５	－	円形	1.10×1.03	35	外傾	平坦	人為		
21	Ｇ５ｆ７	Ｎ－43°－Ｅ	楕円形	2.60×1.17	21	緩斜	平坦	不明		
28	Ｇ５ｆ８	Ｎ－57°－Ｗ	楕円形	0.82×0.60	122	外傾	凹状	人為		
29	Ｇ５ｂ８	－	円形	1.28×1.26	32	外傾	平坦	不明		
30	Ｇ５ｊ７	Ｎ－40°－Ｅ	楕円形	2.50×0.94	26	緩斜	平坦	不明		
32	Ｇ６ｇ３	Ｎ－59°－Ｅ	楕円形	1.30×1.16	46	外傾	平坦	人為		
33	Ｇ５ｉ３	－	円形	1.24×1.20	18	緩斜	平坦	不明		
34	Ｇ６ｇ２	Ｎ－74°－Ｗ	長方形	1.76×0.72	12	緩斜	平坦	不明		
35	Ｇ５ｃ５	Ｎ－52°－Ｗ	［楕円形］	(1.42)×0.86	36	緩斜	皿状	自然		本跡→ＳＫ36
36	Ｇ５ｃ５	Ｎ－74°－Ｅ	不定形	1.07×1.08	30	緩斜	皿状	人為		ＳＫ35→本跡
38	Ｇ５ｈ９	Ｎ－52°－Ｗ	楕円形	1.20×1.08	14	緩斜	平坦	自然		
41	Ｇ５ｈ８	Ｎ－５°－Ｅ	楕円形	0.82×(0.68)	28	緩斜	皿状	自然		本跡→ＳＫ42
42	Ｇ５ｈ８	Ｎ－85°－Ｗ	楕円形	0.80×0.50	22	緩斜	皿状	人為		ＳＫ41→本跡
43	Ｇ６ｅ１	Ｎ－73°－Ｗ	楕円形	0.88×0.52	26	緩斜	皿状	人為		
44	Ｇ６ｅ１	Ｎ－73°－Ｗ	楕円形	0.38×0.26	8	緩斜	皿状	不明		
45	Ｇ６ｅ１	Ｎ－13°－Ｅ	楕円形	0.58×0.50	18	緩斜	皿状	人為		
46	Ｇ５ｇ９	Ｎ－43°－Ｗ	楕円形	0.82×0.70	14	緩斜	皿状	不明		
48	Ｇ６ｂ３	－	円形	0.68×0.64	20	外傾	平坦	不明		
49	Ｆ５ｊ８	Ｎ－２°－Ｅ	楕円形	0.42×0.35	28	外傾	平坦	不明		
50	Ｇ６ｈ３	Ｎ－46°－Ｗ	楕円形	0.50×0.42	32	外傾	皿状	人為		
51	Ｇ６ｈ５	Ｎ－37°－Ｗ	不定形	1.05×0.78	37	外傾	皿状	人為		
53	Ｇ４ｊ８	Ｎ－７°－Ｅ	楕円形	0.52×0.38	10	緩斜	凸凹	不明		
54	Ｇ４ｊ９	Ｎ－39°－Ｗ	楕円形	0.56×0.48	14	緩斜	皿状	不明		
55	Ｇ５ｄ１	Ｎ－11°－Ｅ	楕円形	0.80×0.61	14	緩斜	平坦	不明		
58	Ｇ４ｂ９	Ｎ－15°－Ｅ	楕円形	0.98×0.86	19	外傾	平坦	自然		
60	Ｇ４ｂ７	Ｎ－80°－Ｅ	楕円形	1.36×0.89	69	垂直	皿状	人為		
61	Ｇ４ｂ０	Ｎ－12°－Ｅ	楕円形	1.42×0.59	14	緩斜	平坦	自然		ＳＤ２→本跡
62	Ｇ４ｂ０	Ｎ－76°－Ｗ	長方形	3.12×0.66	37	垂直	平坦	人為		
66	Ｇ４ｂ８	Ｎ－79°－Ｗ	楕円形	0.89×0.72	20	外傾	皿状	不明		

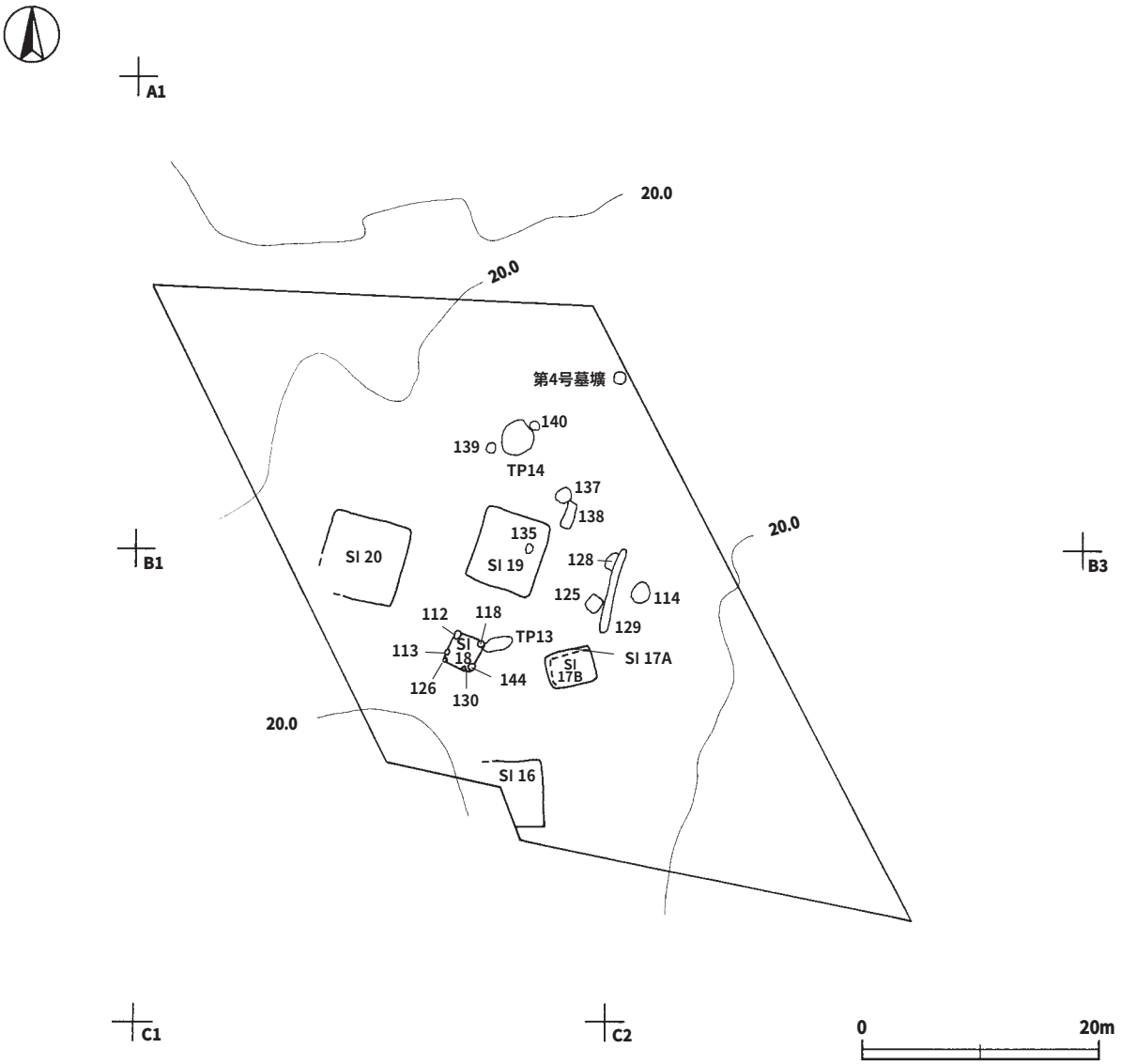
番号	位置	長径方向	平面形	規模	深さ	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考・重複関係
				長径×短径(m)	(cm)					
67	G4b8	N－0°	楕円形	1.14×(0.90)	19	外傾	平坦	不明		本跡→SK68
68	G4b8	N－65°－E	楕円形	0.72×0.56	13	緩斜	平坦	不明		SK67→本跡
69	G5b2	N－18°－E	不整楕円形	[0.72]×0.56	17	緩斜	皿状	人為		SD2→本跡
71	G4b0	－	[楕円形]	(0.77×0.25)	13	外傾	平坦	不明		
73	F5j0	－	円形	0.79×0.74	24	緩斜	皿状	不明		
75	G4a0	N－90°－E	楕円形	0.90×0.69	29	緩斜	皿状	人為		
76	G5b1	N－70°－E	楕円形	0.33×0.29	31	外傾	皿状	自然		
77	G5b2	N－0°	隅丸長方形	1.79×1.54	35	垂直	平坦	自然		
78	F4j0	N－54°－E	楕円形	0.59×0.48	21	緩斜	平坦	不明		
79	G5c3	N－72°－W	長方形	2.73×0.72	61	垂直	平坦	人為		
81	G4a9	N－40°－E	楕円形	0.67×0.54	55	外傾	平坦	不明		本跡→SD2
82	G5c3	N－72°－W	長方形	(1.74)×0.68	84	垂直	平坦	人為		SK79・105→本跡
84	F5i2	N－57°－W	不整楕円形	1.02×0.66	29	緩斜	凸凹	人為		
85	F5h2	N－25°－E	不整楕円形	0.93×0.74	74	垂直	皿状	人為	骨片	第1号墓壙
86	F5h2	N－57°－E	不整楕円形	1.00×0.72	20	緩斜	凸凹	自然		
87	F5h2	N－9°－E	楕円形	0.51×0.40	11	緩斜	凸凹	不明		
91	F5h2	N－41°－E	楕円形	0.51×0.41	17	緩斜	皿状	不明		
93	F5e4	N－21°－E	楕円形	0.48×0.37	16	外傾	皿状	不明		
94	F5f3	N－55°－E	楕円形	0.94×0.58	12	外傾	平坦	不明		
95	F5f3	N－77°－W	楕円形	0.70×0.49	21	外傾	凸凹	不明		
96	F5e3	N－41°－E	楕円形	0.42×0.35	21	緩斜	皿状	不明		
97	F5f4	N－12°－W	楕円形	0.43×0.30	12	外傾	平坦	不明		
98	F5f4	－	円形	0.77×0.70	47	垂直	平坦	人為		
99	F5h2	N－42°－W	不整楕円形	0.58×0.52	13	外傾	平坦	人為		
100	F5e5	N－83°－E	楕円形	0.83×0.62	17	外傾	皿状	不明		
101	F5e5	N－10°－W	楕円形	1.26×0.70	36	外傾	平坦	自然		
102	F5e4	－	円形	0.46×0.43	19	垂直	平坦	自然		
103	F5e6	N－28°－E	不整円形	1.30×1.21	123	垂直	平坦	人為	古銭	第2号墓壙
104	F5e4	N－31°－E	楕円形	0.49×0.34	17	垂直	平坦	不明		
105	G5c3	N－17°－E	長方形	(2.66)×0.83	19	緩斜	平坦	不明		
108	F5e5	N－36°－E	楕円形	1.00×0.82	27	垂直	皿状	不明		
112	B1b7	N－16°－E	楕円形	0.64×0.55	38	外傾	皿状	人為		SI18→本跡
114	B2a1	－	円形	1.68×1.55	18	緩斜	平坦	自然		
120	G4a8	N－69°－E	楕円形	1.48×0.94	35	緩斜	皿状	自然		SI15→本跡
121	F4j7	N－18°－E	隅丸長方形	1.40×1.16	104	垂直	皿状	人為	骨片	第3号墓壙
126	B1c7	N－60°－E	楕円形	0.40×0.32	26	外傾	平坦	人為		SI18→本跡
129	B2a1	N－13°－E	長楕円形	7.18×0.68	10	緩斜	平坦	不明		SK128→本跡
135	B1a9	－	円形	0.85×0.82	20	緩斜	皿状	自然		SI19→本跡
138	A1j0	N－13°－E	長方形	2.24×0.92	16	外傾	平坦	人為		SK137→本跡
139	A1h8	－	円形	0.75×0.75	14	緩斜	平坦	人為		
140	A1h9	－	円形	0.85×0.85	31	垂直	平坦	人為		
141	A2g1	－	円形	1.10×1.08	141	垂直	平坦	人為	古銭	第4号墓壙
142	F5e6	N－32°－W	楕円形	0.64×0.54	8	緩斜	皿状	不明		
144	B1c8	N－50°－W	楕円形	0.65×0.58	30	緩斜	皿状	人為		SI18→本跡
145	F4j7	N－13°－E	方形	1.10×1.00	80	垂直	平坦	人為	骨片	第5号墓壙

表６　陥し穴一覧表

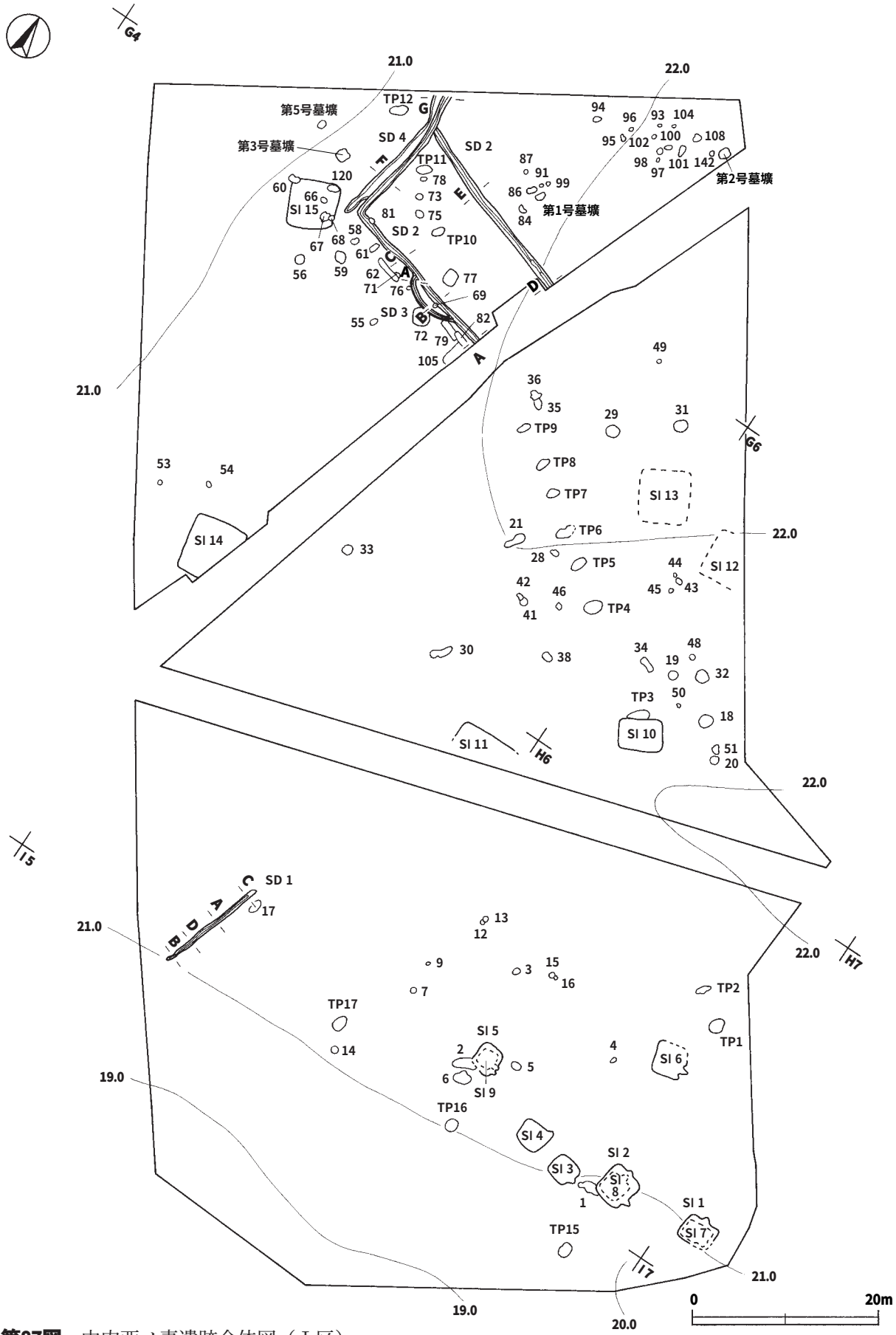
番号	位置	標高（m）	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	深さ（cm）	底面長径（m）	短径方向断面	底面	覆土	主な出土遺物	形態	備考・重複関係
1	H６d9	21.6	N－33°－E	楕円形	2.92×1.44	146	1.3	V字状	平坦	自然	縄文土器，土師器	B２	旧ＳＫ11
2	H６e8	21.6	N－34°－E	楕円形	2.14×0.86	132	2.2	Y字状	平坦	自然	剥片	A２	旧ＳＫ10
3	G６h2	21.8	N－32°－E	楕円形	2.22×1.50	128	1.68	U字状	平坦	自然		C	旧ＳＫ57　本跡→ＳＩ－10
4	G５g0	21.0	N－37°－E	楕円形	2.09×1.50	132	1.3	U字状	平坦	自然		C	旧ＳＫ80
5	G５f9	22.0	N－20°－E	楕円形	2.00×1.02	120	1.66	U字状	平坦	自然		C	旧ＳＫ27
6	G５e8	22.0	N－29°－E	楕円形	2.44×1.11	120	1.94	V字状	平坦	自然	土師器，磁器	B１	旧ＳＫ65
7	G５e7	22.0	N－32°－E	楕円形	1.64×1.10	126	1.38	V字状	平坦	自然		B２	旧ＳＫ37
8	G５d6	22.0	N－26°－E	楕円形	1.79×0.81	124	1.52	V字状	平坦	自然		B１	旧ＳＫ24
9	G５d6	21.8	N－37°－E	楕円形	1.68×0.63	113	1.64	V字状	平坦	自然		B１	旧ＳＫ23
10	G５a1	21.7	N－25°－E	楕円形	1.66×0.96	106	1.24	V字状	平坦	自然		B２	旧ＳＫ63
11	F４i9	21.3	N－38°－E	楕円形	1.70×0.88	85	1.34	V字状	平坦	自然		B２	旧ＳＫ109
12	F４h8	21.0	N－47°－E	楕円形	2.18×1.24	173	1.38	V字状	平坦	自然		B２	旧ＳＫ110
13	B１b8	20.1	N－61°－E	楕円形	2.54×1.21	136	2.04	V字状	凸凹	自然		B１	旧ＳＫ111　本跡→ＳＩ18→ＳＫ118
14	A１h9	20.1	N－９°－E	楕円形	2.90×2.40	(160)	(2.0)	U字状	平坦	自然		C	旧ＳＫ127
15	Ｉ６b9	20.6	N－８°－E	楕円形	1.78×1.40	156	1.08	U字状	平坦	自然		CD	旧ＳＥ１
16	H６j4	21.0	N－14°－E	楕円形	1.71×1.45	129	0.96	U字状	平坦	自然		CD	旧ＳＥ２
17	H５j0	21.4	N－３°－E	楕円形	1.80×1.35	97	1.34	U字状	凸凹	自然		CD	旧ＳＥ３

表７　溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)	断面形	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考・重複関係
1	H5h6～I5a5	N－21°－E	直線	12.1	0.40～0.52	0.08～0.20	10～21	U字状	外傾	皿状	不明		
2	F3h1～G5c3	N－70°－W N－５°－E	コの字状	55.2	0.50～1.23	0.20～0.40	30～85	U字状 V字状	外傾	平坦	自然		SD４→本跡→SK61・69・SD３
3	G5b1～G5c2	N－75°－W	弓なり状	7.3	0.32～0.50	0.12～0.18	36	U字状	外傾	皿状	自然		SK72・SD２→本跡
4	F3h1～G4a0	N－７°－E	直線	8.1	0.60～1.15	0.20～0.36	22～38	U字状	外傾	皿状	自然	土師器	５世紀前葉　本跡→SD２



第86図　中内西ノ妻遺跡全体図（Ⅱ区）



第87図　中内西ノ妻遺跡全体図（Ⅰ区）

第４節　まとめ

今回の調査では，遺構外遺物の旧石器も含め，縄文時代から近世にかけての多様な遺構がそれらを特徴づける遺物とともに確認された。

ここでは，縄文時代の陥し穴と当遺跡の主体である古墳時代の時期区分と集落の変遷に焦点を当て，いくつかの考察を加えてまとめとしたい。

１　縄文時代の陥し穴について

陥し穴は，調査１区から15基，調査２区から２基が検出されている。これらは，小野川左岸の標高20～22mの台地縁辺部に位置し，掘り方や配置，配列に規則性がうかがえるものが多く，該期の陥し穴猟を考える上で好資料になり得るものである。ここでは，茨城県内の陥し穴状遺構を検討した鈴木素行氏の論考[1]をもとに，当遺跡の陥し穴についての分類を試みる。

⑴　陥し穴の形態と規模

鈴木素行氏は，茨城県内において検出されている陥し穴状遺構の標準的な形態を，短軸の断面形状と平面形状との組み合わせに視点を置き，次のように分類している[2]。

A類……断面形状がＹ字状，平面形状が長楕円形から楕円形を呈する。

B類……断面形状がＶ字状，平面形状が長楕円形から楕円形を呈する。

C類……断面形状がＵ字状，平面形状が楕円形を呈する。

D類……断面形状がＵ字状，平面形状が隅丸長方形を呈する。

E類……断面形状がＵ字状，平面形状が隅丸方形を呈する。

当遺跡ではＥ類は検出されておらず，代わりにＣ類とＤ類の中間的な陥し穴が検出されている。そのため，ここではＣＤ類として分類することとする。

ＣＤ類……断面形状がＵ字状，確認面の平面形状が楕円形で，中位から底面が隅丸長方形を呈する。

断面形状は，遺構の遺存状態により異なるので，深さを考慮して分類した。

また，遺構の規模からＡ類とＢ類を次のように分類している。

Ａ１類……Ａ類のうち底面の長軸長が３m以上のもの。

Ａ２類……Ａ類のうち底面の長軸長が１m以上で３m未満のもの。

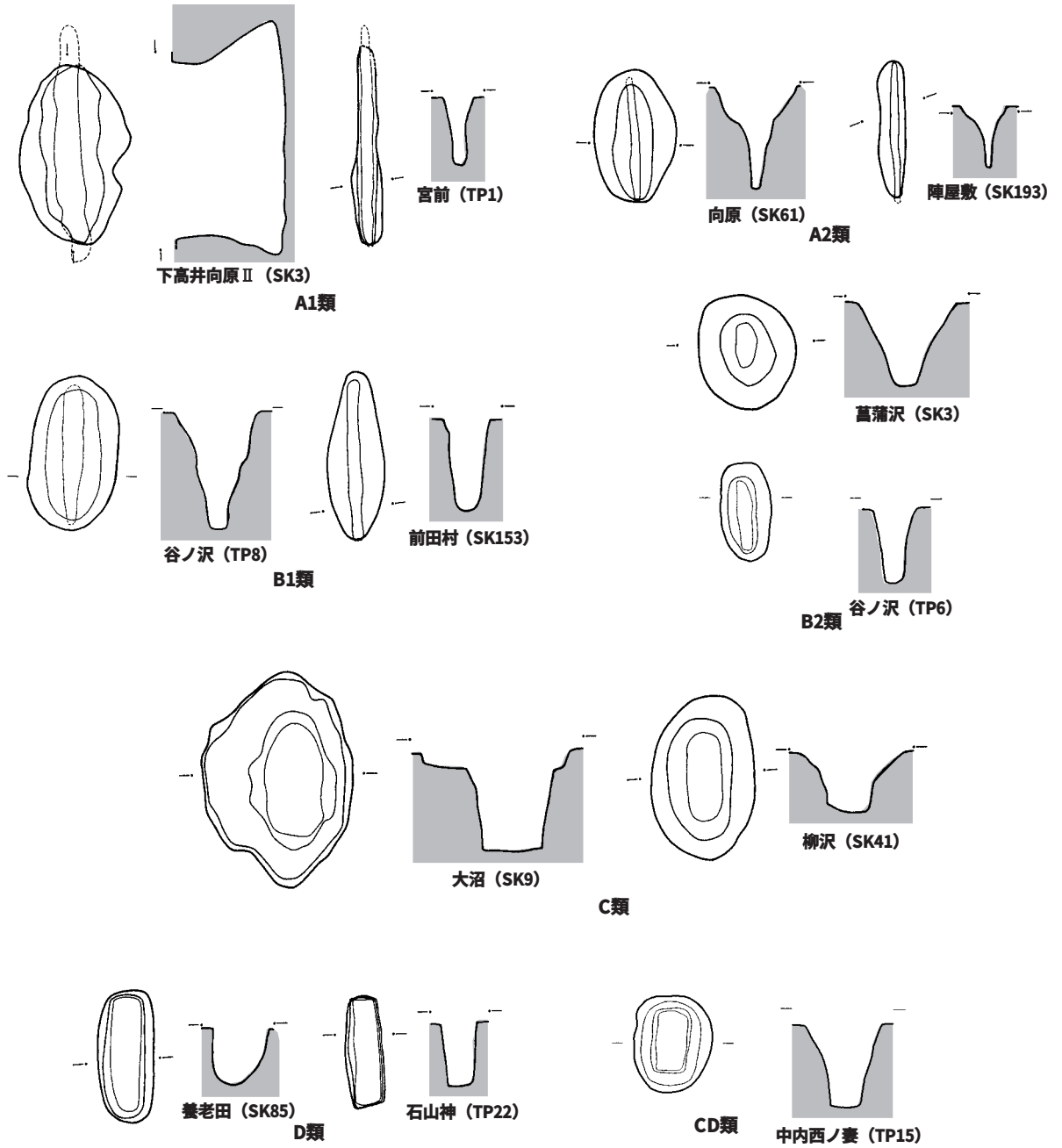
Ｂ１類……Ｂ類のうち底面の長軸長が1.5m以上で３m未満のもの。

Ｂ２類……Ｂ類のうち底面の長軸長が1.5m未満のもの。

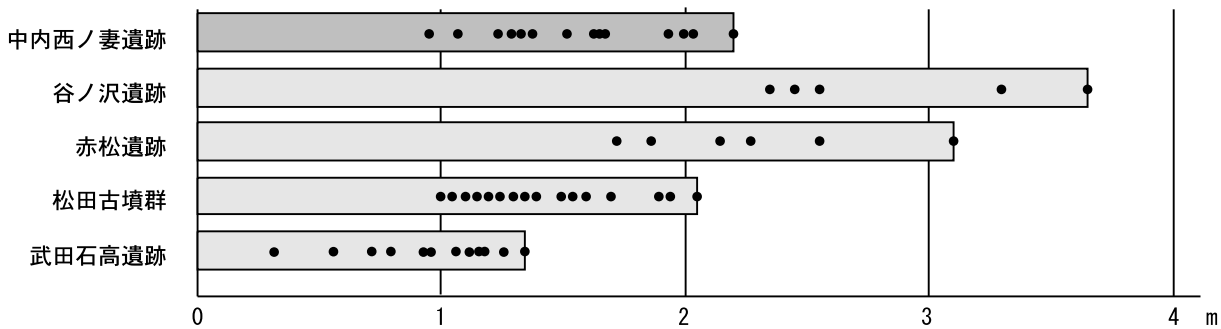
当遺跡ではＡ１類は検出されておらず，また，底面に小ピットのあるものも検出されていない。第２号陥し穴がＡ２類，第６・８・９・13号陥し穴がＢ１類，第１・７・10～12号陥し穴がＢ２類，第３～５・14号陥し穴がＣ類，第15～17号陥し穴がＣＤ類に相当する。Ｂ類が半数以上を占め，それにＣ類，ＣＤ類，Ａ２類という異なる形態が含まれている。

⑵　陥し穴の配置と配列

当遺跡の陥し穴は，配置や配列に何らかの規則性をうかがうことができるものである。規則性が認められる陥し穴の分布を次のように分類する[3]。



第88図　茨城県における陥し穴状遺構の分類（註１文献第261図一部改変）



第89図　底面長軸長による陥し穴状遺構の規模の比較（註１文献第262図一部改変）

Ⅰ型……２基の配置。

Ⅱ型……３基以上の配置。

また，Ⅱ型には間隔が密なものと疎なものがあり，これを次のように分類する。

Ⅱａ型……Ⅱ型のうち間隔が10m以上の疎な配置。

Ⅱｂ型……Ⅱ型のうち間隔が10m未満の密な配置。

当遺跡では，これらを単位とする配置を連続的に配列していることが認められた。大きな配列としては，Ａ・Ｂの２列に分類することができる。

Ａ列……12基の陥し穴が105mの範囲内に直線的に並ぶことから，これらは同一配列と考えられる。Ⅰ型とⅡｂ型の配置単位によって構成されており，①第１・２号陥し穴（Ⅰ型），②第３～９号陥し穴（Ⅱｂ型），③第10～12号陥し穴（Ⅱｂ型）の３つの配置単位である。

①はＡ２類とＢ２類という形態の異なる２基の構成である。遺構間の距離が３mほどであること，覆土の堆積状況に類似性が見られることから同じ配置単位と考えられる。また，第１号陥し穴の南東側が調査区域外であり，第２号陥し穴の北西側に大きな撹乱部分が存在することから，２基以上の構成も推測される。

②は７基の構成である。第３号陥し穴だけ11mと離れているが，第４・５号陥し穴と形態が同じことから同一配置単位と考えた。しかし，第３号陥し穴の南東側に大きな撹乱部分が存在するため，第３号陥し穴は別単位の可能性も考えられる。他の遺構間の距離は2.2～3.5mである。この配列の中には，形態の異なるＢ類とＣ類，規模の異なるＢ１類とＢ２類が混在している。

③は３基の構成である。形態や規模もＢ２類で同一であるとともに，覆土の堆積状況も類似性を持ち，遺構間の距離も5.8mである。この配列は，北西側の調査区域外まで続く可能性がある。

Ｂ列……３基の陥し穴が36mの範囲の中に直線的に並ぶ。Ⅱｂ型の配置単位によって構成されており，第13～15号陥し穴が相当する。

３基で構成される。遺構間の距離は15mと17mで，形態や規模もＣＤ類で同一であるとともに，覆土の堆積状況も類似性を持っている。この配列は，南東側の調査区域外まで続く可能性がある。Ａ列とは形態が異なるため，同時期に機能していたとは考えにくい。

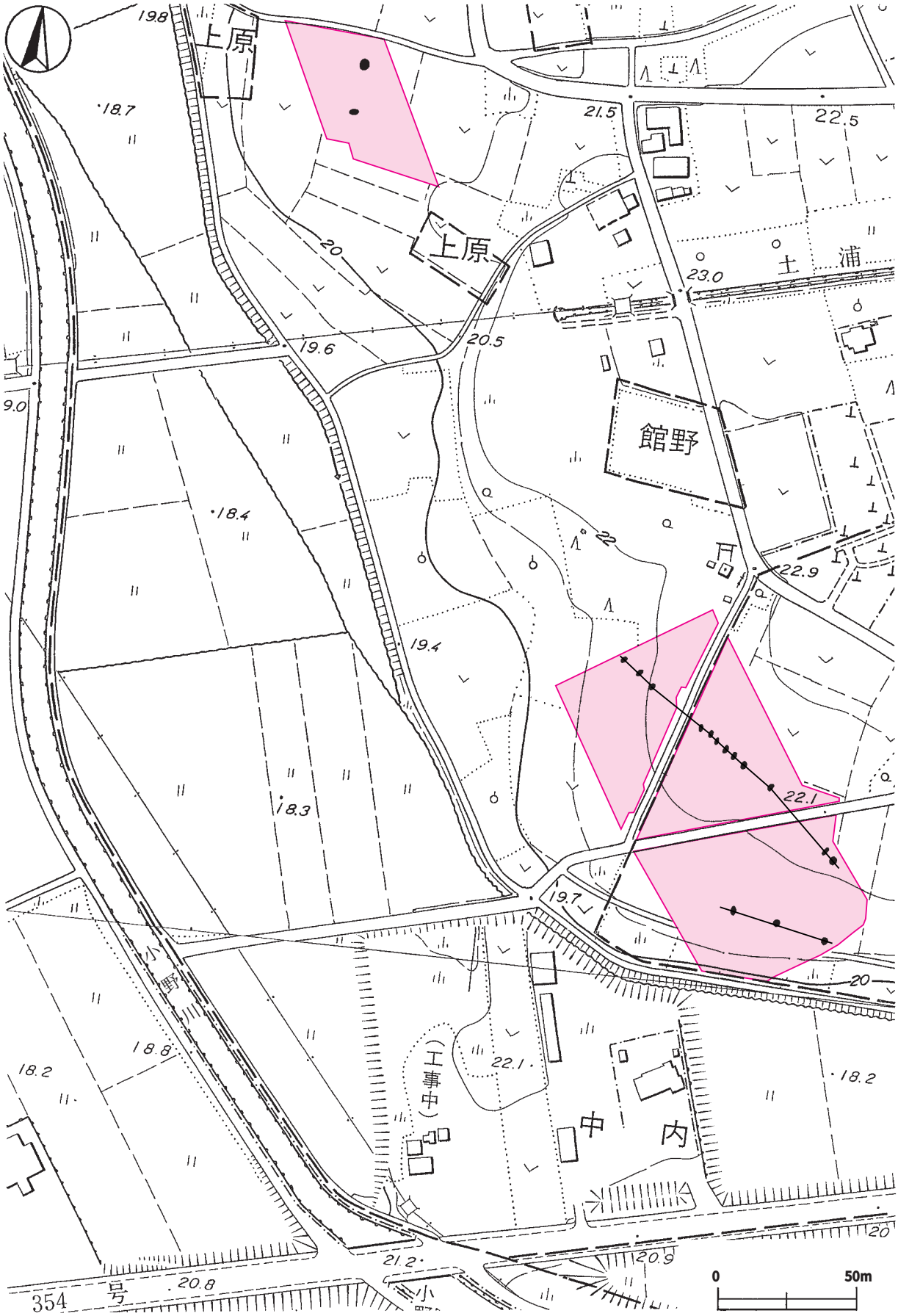
Ａ列の②において，形態の異なるＢ類とＣ類，規模の異なるＢ１類とＢ２類が混在していることについては，陥し穴掘削時の個人差で，共同作業における許容範囲内であると考える。また，Ａ列に重複が認められず，連続した配列が認められることは，ほぼ同時期に機能していたことを示唆するものである。しかし，覆土の堆積状況を大別すると，①・③の様に覆土が両側から同時に流れ込む場合と，②の様に交互に流れ込む場合の２つのパターンがうかがえることから，埋没には多少の時間差があったものと推測される。

調査Ⅱ区の第13・14号陥し穴は，長径方向や形態，規模が異なり，遺構間の距離も離れているため，単独で配置されていたと考えられるが，調査区域外に配置を構成する陥し穴が存在する可能性もある。

⑶　陥し穴の時期

遺跡全体からは，早期後葉と前期後葉の土器が表採されている。陥し穴からもそれらの土器が出土しているが，いずれも後世の流れ込みや混入によるものと考えられ，遺構の時期を確定できるような出土状況を示していない。

中村博信氏は陥し穴を論じた中で[4]，関東地方における溝型陥し穴の時期を次のように検討している。



第90図　中内西ノ妻遺跡における陥し穴の配置

Ⅰ期（縄文時代早期後半～早期中葉）関東では溝型陥し穴がもっとも盛行する。

Ⅱ期（縄文早期末～前期）溝型陥し穴に替わって楕円形型陥し穴が盛行する。

Ⅲ期（縄文時代中期～後期）溝型陥し穴が再び盛行するが，Ⅰ期ほどではない。

当遺跡の陥し穴の主流は，Ｂ・Ｃ類の楕円形型陥し穴であり，表採されている縄文土器片の時期などから，中村氏の分類に従えばⅡ期以降に相当すると考えられる。

(4) 考察と課題

調査区域内では土器片の採集はできるものの，住居跡は検出されていないことから，陥し穴を設置した狩猟場と考えられる。近隣の縄文時代の集落遺跡としては，南東方向約4.4㎞の小野川右岸の下大井遺跡[5]，南東方向約5.2㎞の小野川左岸の馬場遺跡[6]，同じく約5.3㎞の東山遺跡[7]が所在している。東山遺跡では，Ｂ１類・Ｃ類と考えられる７基の陥し穴が確認されている。また，馬場遺跡の第84号土坑はＣ類の陥し穴と推定できる。これらの遺跡の陥し穴は，集落に隣接して設置されている。中内西ノ妻遺跡はそれぞれの集落遺跡の上流に位置している。

次に，狩猟方法及び狩猟対象について考えてみたい。各陥し穴の周辺に柵や杭を立てたような痕跡がないことや，検出されたＡ列・Ｂ列が台地縁辺部もしくは緩やかな斜面部に設置され，その南側には小野川が位置していることから，水辺に向かう動物の動線を利用した「待ち型」の狩猟方法であったと推測される。また，陥し穴の深さの平均が1.28m，底面長径の平均が1.53mで，配置の中心となるＢ１・２類，Ｃ類とも比較的小型の陥し穴であることから，シカのように大型で跳躍力のある動物を対象にしたものではなく，ノウサギやタヌキなどの小型獣やイノシシなどが狩猟の対象となっていたと推測される。

しかし，これらはあくまでも推測の域を出るものではなく，基点となる集落がどこに存在し，どのような狩猟活動が行われたかの復元には至っていない。

2　古墳時代の時期区分と集落の変遷について

時期区分については，住居跡の形態及び出土土器を基準として，各遺構をⅠ期からⅢ期に区分した。出土遺物の多くが細片だった第18号住居跡は，主軸方向により区分した。また，遺構が調査区域外へ延びている場合には，推定可能なものだけ区分した。住居の規模は，床面積が20～50㎡のものを中形住居，20㎡未満のものを小形住居とした[8]。当遺跡では，大形住居の検出はなかった。

以下，各時期の遺構や遺物の特徴について述べる[9]。

Ⅰ期

第11・12・14号住居跡の３軒が該当し，調査Ⅰ区の中央部に点在している。３軒とも遺構が調査区域外に延びているため規模は推定値である。各住居とも一辺が5.5～6.5mであり，中形住居と推測できる。主軸方向はＮ－１°～８°－Ｅで，南側を確認できない第11号住居跡を除く２軒はいずれも南東コーナー寄りに出入り口が設置されている。また，３軒はいずれも床面から焼土塊や炭化した丸材が検出されている。これらの遺構から出土した刷毛目調整後ヘラナデをした高坏は，坏部が大型でやや外反し，内面が平底で，裾部がラッパ状に開いている。また，赤彩されているものが多数を占めている。椀は口縁部と体部の境が不明瞭であるものが認められた。複合口縁壺には，折り返しの下部にわずかに刷毛目が残るものがみられる。甕は，体部にヘラ磨きとヘラ削りを施した布留式土器の甕を模倣しているものがみられた。

本期は５世紀前葉に比定できる。

Ⅱ期

第10・13・15・16・17・18号住居跡の６軒が該当し，調査Ⅰ区の中央部から北側に位置する調査Ⅱ区南部に点在している。Ⅰ期と比べると，北方向に位置している傾向がうかがえる。小形住居は第10・17Ａ・17Ｂ・18号住居跡で，それ以外は中形住居である。第16号住居跡は遺構が調査区域外に延びているため規模は推定値であるが，一辺が5.0m以上であることを確認しており，中形住居と推測した。出入り口から炉の中心を結んだ線を主軸とすると，Ｎ－22°～45°－Ｗで，第18号住居跡だけがＮ－19°－Ｅである。この時期の住居は，第18号住居跡を除いて南壁の南東コーナー寄りに出入り口，南東コーナー部に貯蔵穴が設置されている。この時期の高坏は，脚部がエンタシス状に膨らむものとやや細めになったものが混在し，坏の下部と裾部に明瞭な段を持つものも認められた。整形は坏部はナデで，脚部は縦方向のヘラ磨きがほとんどであり，大半が赤彩されている。塩釜式土器の高坏を模倣した小形高坏も検出されている。坩は赤彩され，最大径が体部中央にある。小形坩は口径が体部径に等しくヘラ磨きが施されているものと，体部が算盤玉状を呈するものが混在している。椀は平底を呈し，口縁部内に明瞭な稜をもつものが認められた。坏は平底で口縁部が内彎する。甕は口辺部の外反が弱く，体部がヘラ削りで底部が突出するもの，壺は口辺部中央部に膨らみをもつものが認められる。後者を北陸地方の壺の模倣と考えると，Ⅰ期の布留式土器の甕を模倣しているものと合わせて他地域との交流を裏付ける資料といえる。なお，本期から臼玉やガラス小玉，双孔円板などが少量ながら各住居跡から検出されるようになる。第13号住居跡からは，小形高坏や坩，ミニチュアの椀などが出土しており，祭祀に関わる遺構の可能性もある。

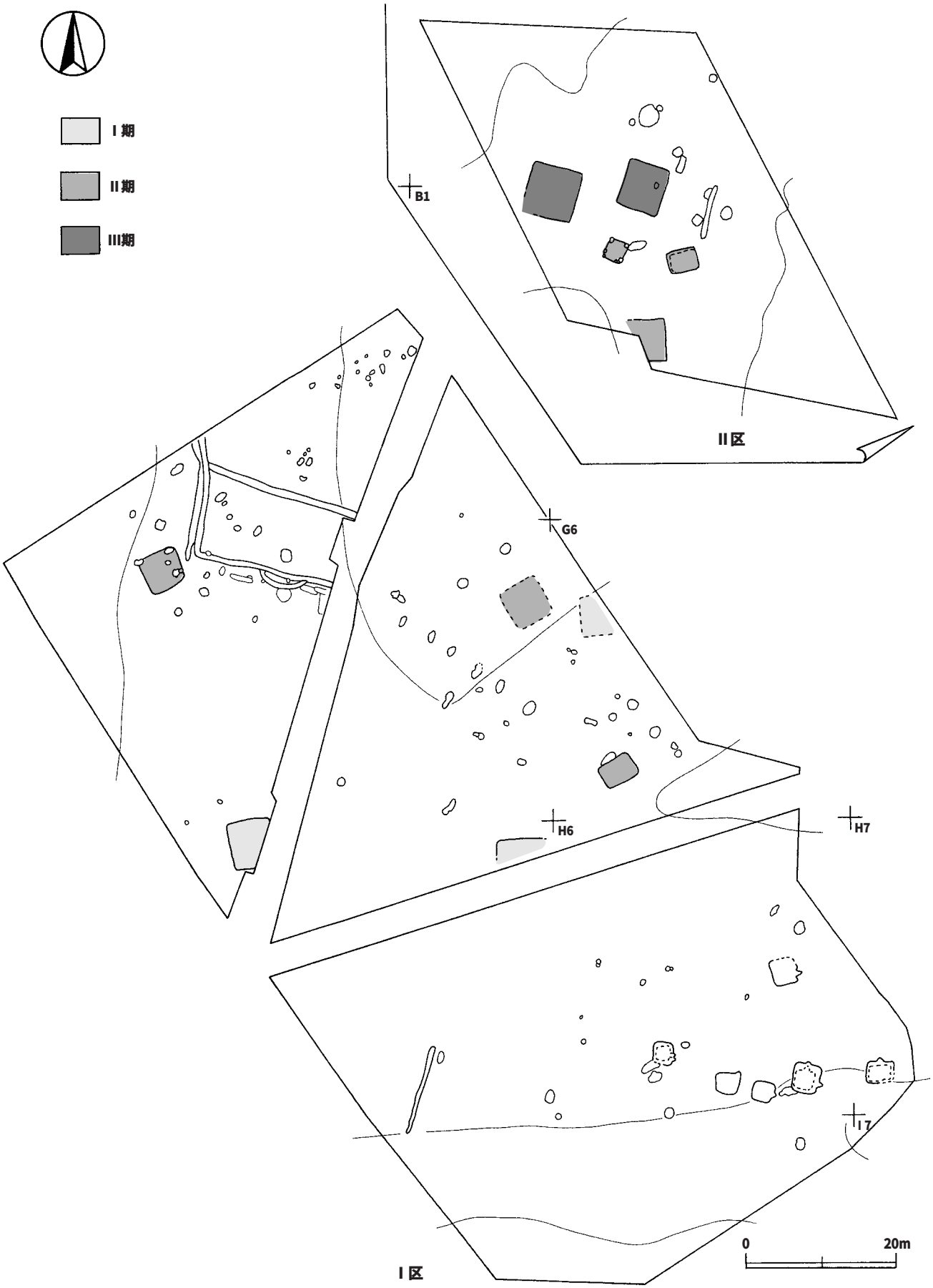
本期は５世紀前葉～中葉に比定できる。

Ⅲ期

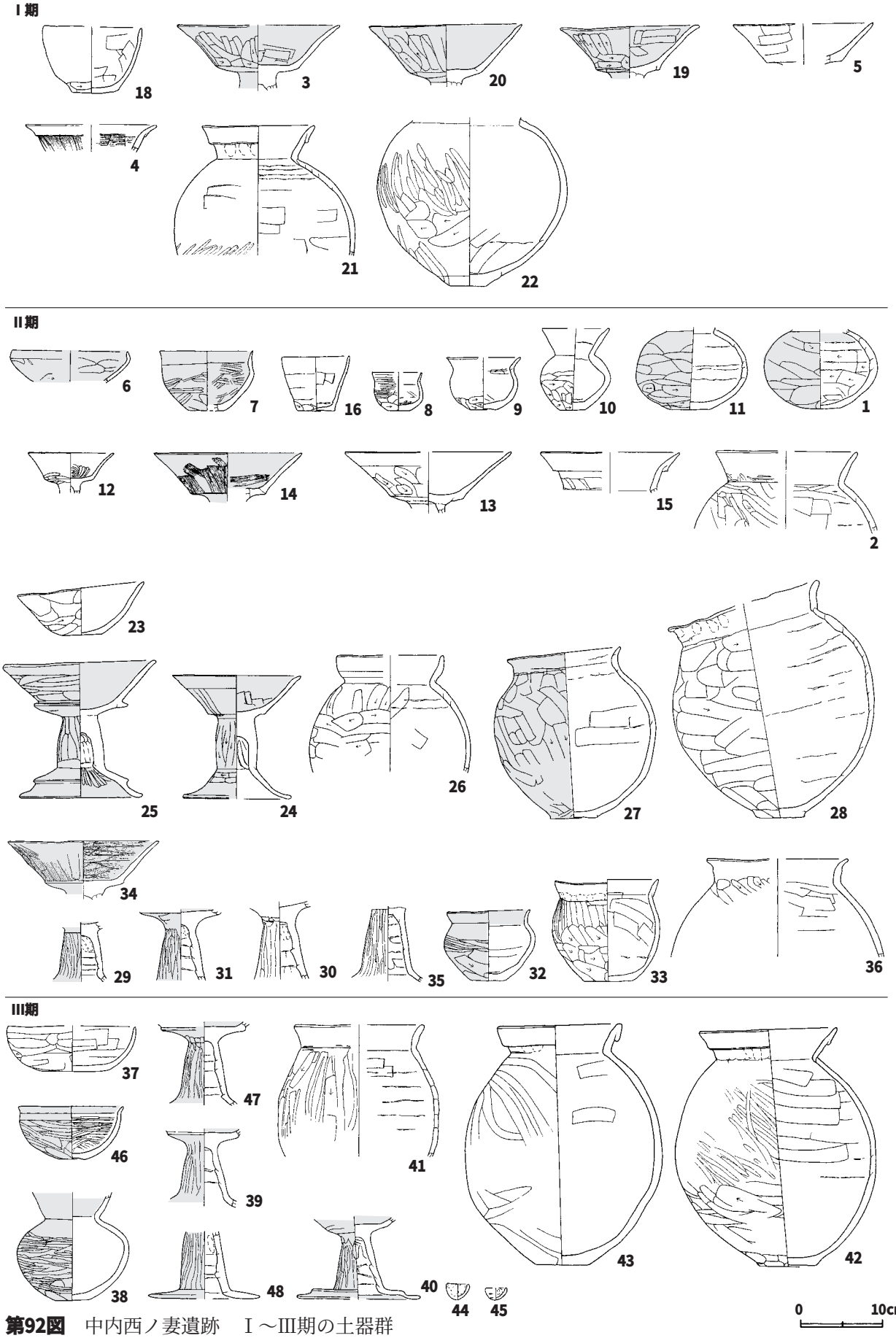
第19・20号住居跡の２軒が該当し，調査Ⅱ区の中央部に位置している。Ⅰ・Ⅱ期の時期と比べると，さらに北方向に位置している傾向がうかがえる。第20号住居跡は調査区域外に延びているため規模は推定値であるが，南西コーナー部を除く２辺が7.0mと6.9mであることを確認しており，２軒とも中形住居と判断した。主軸はＮ－72°・74°－Ｗで，住居跡の西側中央部に炉，南壁の南東コーナー寄りに出入り口，東コーナー部に貯蔵穴が設置されており，仕切り溝や壁溝も確認できた。この時期の高坏は，Ⅱ期（脚部がエンタシス状で坏部下部と裾部に明瞭な段を持つものを除く）の型式の他に，裾部が有段である木製高坏の模倣のようなものも認められる。坩は最大径が体部上部に移ってくる。椀は平底で丸みを持ち，坏は平底で口径が大きい。これらはすべて赤採されている。甕は底部の突出が弱くなり，長胴化の兆しが見られるが，口縁部が折り返しのある有段口縁の甕も認められる。本期になると石製模造品やその未製品，剥片などが多く検出されるようになる。

本期は５世紀中葉～後葉に比定できる。

以上，集落の変遷を３時期に区分してみると，住居跡の形態においては，炉の位置や住居の大型化に伴う仕切り溝，壁溝の設置など多少の変化を認めることができた。また，出土土器においては，椀や坏，坩などが次の段階への切り替わりのが早いのに比べ，高坏は坏部の刷毛目調整がⅡ期，脚部の磨きがⅢ期まで残ること，甕に前段階の形態が残り次の段階への切り替わりが遅いことなど，土器の器種によってその消長に変化があることが分かった。これらのことから，この集落を構成していた集団が５世紀という限られた時期の



第91図　中内西ノ妻遺跡集落変遷図



第92図　中内西ノ妻遺跡　Ⅰ～Ⅲ期の土器群

中で，住居や土器の形態に対する精神・文化を受け継ぎながら，少しずつ新しいものを取り入れていった様子をうかがい知ることができ，さらに，北方向に住居を移動させながら継続して住んでいたことが推測できた。

当遺跡の遺構や遺物は，５世紀の県南地方における同一台地上の集落移動及び土器編年を考える上での好資料である。その中で，布留式土器や塩釜式土器，北陸地方の土器を模倣したものの出土や石製模造品の工人・工房にかかわる問題などは，周辺の遺跡との検討をふまえた上での課題である。今後の良好な資料の増加に期待したい。

註

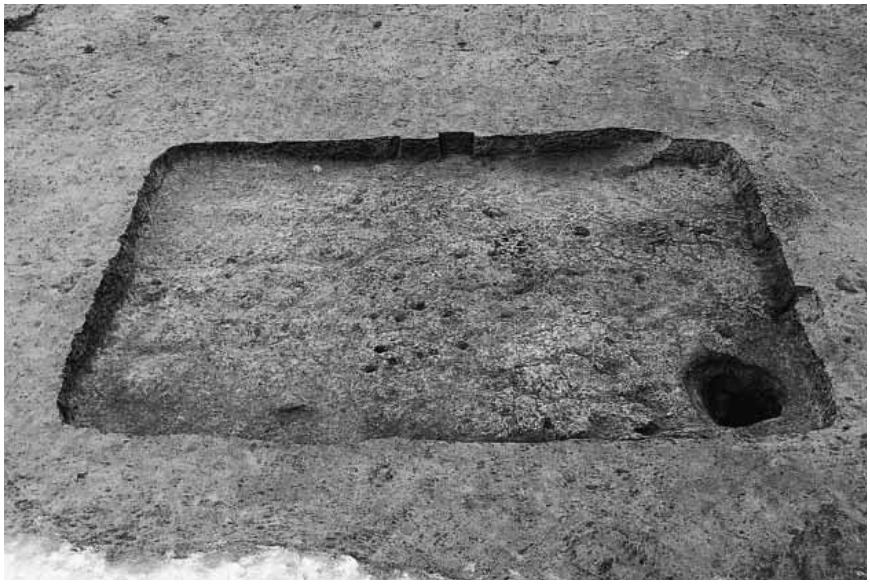
1）鈴木素行他「武田石高遺跡　旧石器・縄文・弥生時代編」『(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第15集』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社　1998年１月
2）註１）に同じ
3）註１）に同じ
4）中村博信「溝型陥し穴研究序説」『栃木県考古学会誌』第19集　栃木県考古学会　1993年３月
中村博信「登谷遺跡　ツインリンクもてぎ内のホテル建設に伴う発掘調査」登谷遺跡調査団　本田技研工業株式会社　2004年４月
5）川津法伸「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書１　下大井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第171集　茨城県教育財団　2001年３月
6）白田正子「牛久市北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）馬場遺跡・行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第106集　茨城県教育財団　1996年３月
7）松浦　敏「牛久市北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）東山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第101集　茨城県教育財団　1995年９月
8）菊地芳朗「東北地方の古墳時代集落－その構造と特質」『考古学研究』第47巻４号　2001年３月
9）樫村宣行他「茨城県における５世紀の動向」『東国土器研究』５号　1999年５月

参考文献

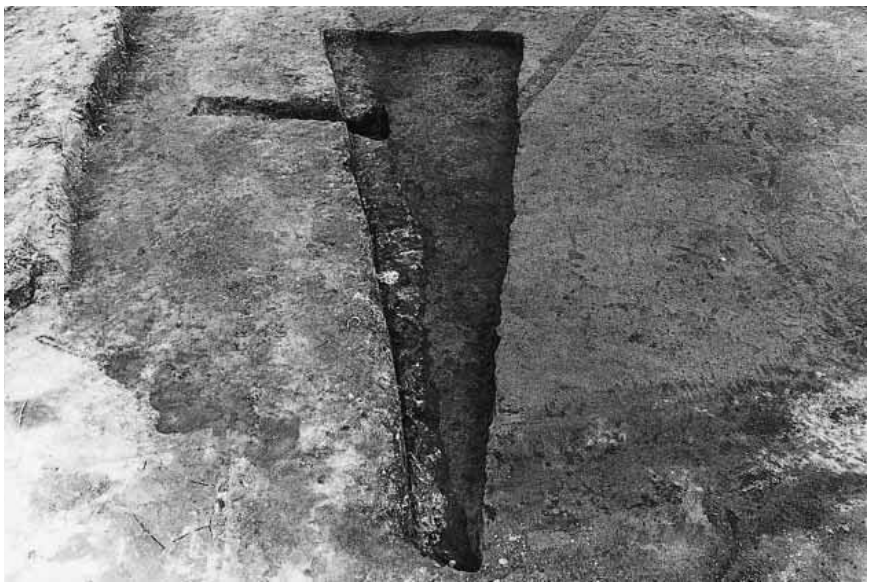
・今村啓爾「陥穴」『縄文文化の研究』第２巻（生業）雄山閣　1994年８月
・上野修生「茨城県立総合教育研修センター（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書　石山神遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第62集　茨城県教育財団　1990年３月
・大関　武「都市計画道荒川沖木田余線街路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　宮前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第118集　茨城県教育財団　1990年３月
・小川和博他「柳沢・養老田・寿行地北遺跡発掘調査報告書」『霞友ゴルフクラブ建設に伴う埋蔵文化財調査発掘報告書』第１集　土浦市教育委員会・出島村教育委員会　1996年３月
・川井正一「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書４　赤松遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』Ⅳ　茨城県教育財団　1980年３月
・川崎志郎他「日立市大沼遺跡発掘調査報告書」『日立市文化財調査報告』第３集　日立市教育委員会　1978年２月
・越川敏夫他「向原遺跡　茨城県土浦市向原遺跡発掘調査報告書」　向原遺跡調査会・土浦市教育委員会　1987年12月
・戸沢充則他「茨城県稲敷郡美浦村陣屋敷遺跡　1989年度の陣屋敷遺跡（台地部）における弥生・古墳・平安時代集落祉の調査研究報告書」　陸平研究所報告１　美浦村・陸平調査会　1992年12月
・中山忠久「取手市都市計画事業下高井特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　甚五郎崎遺跡　下高井向原Ⅰ遺跡　下高井向原Ⅱ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第107集　茨城県教育財団　1996年３月
・汀　安衛「茨城県行方郡北浦村　菖蒲沢遺跡発掘調査報告書」菖蒲沢遺跡調査会　1991年11月
・吉原作平「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書１　西ノ脇遺跡　前田村遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第87集　茨城県教育財団　1994年３月
・稲田義弘「熊の山遺跡　島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財整理報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第190集　茨城県教育財団　2002年３月
・川村満博　島田和宏「梶内向山遺跡　一般国道468号首都圏中央連絡自動車道（圏央道）及び高速自動車国道常磐自動車道つくばジャンクション（仮称）建設事業地内埋蔵文化財整理報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第199集　茨城県教育財団　2003年３月
・小竹茂美「下小池遺跡　一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第210集　茨城県教育財団　2004年３月
・綿引英樹　後藤孝行「谷ノ沢遺跡　手接遺跡　花房遺跡　大日遺跡　一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第212集　茨城県教育財団　2004年３月
・横倉要次「松田古墳群　北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第226集　茨城県教育財団　2004年３月

写　真　図　版

第15号住居跡，第４号溝跡出土遺物



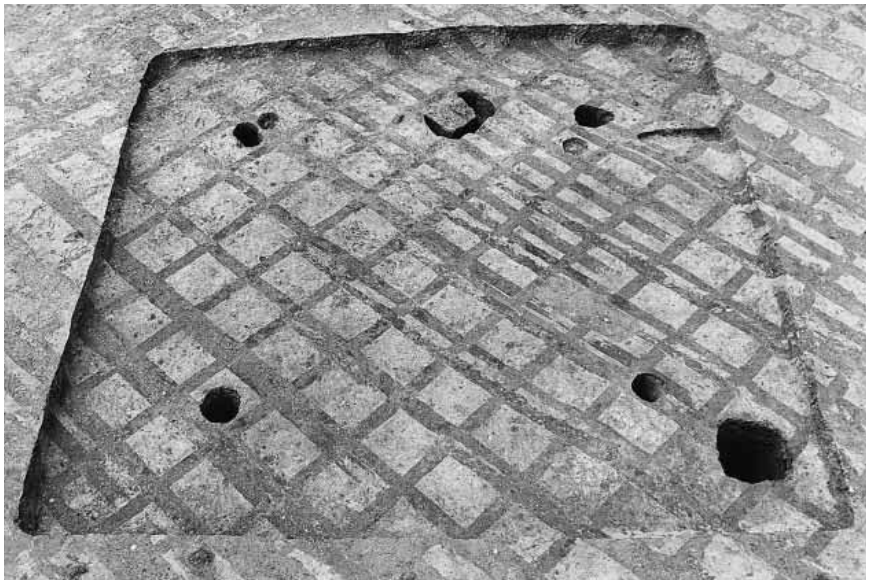
第10号住居跡
完　掘　状　況



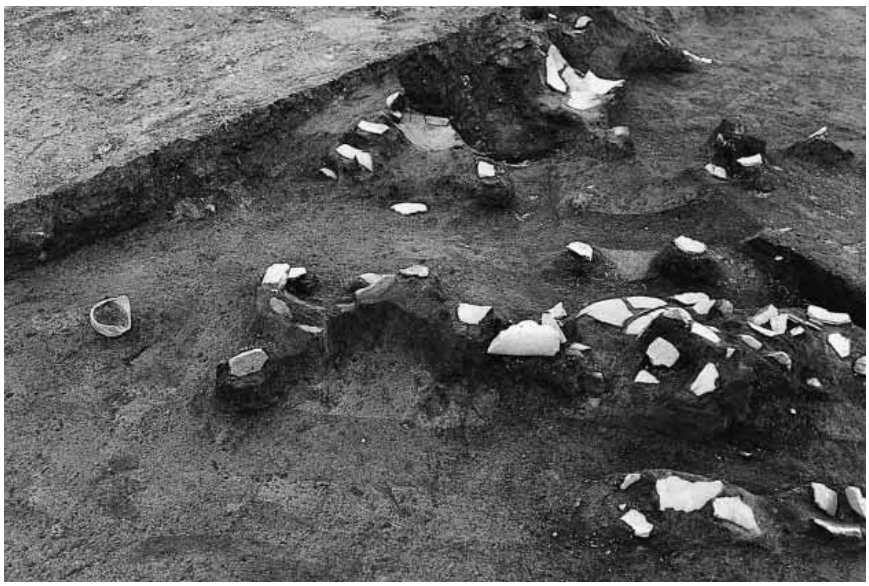
第11号住居跡
完　掘　状　況

第12号住居跡
完　掘　状　況

PL2

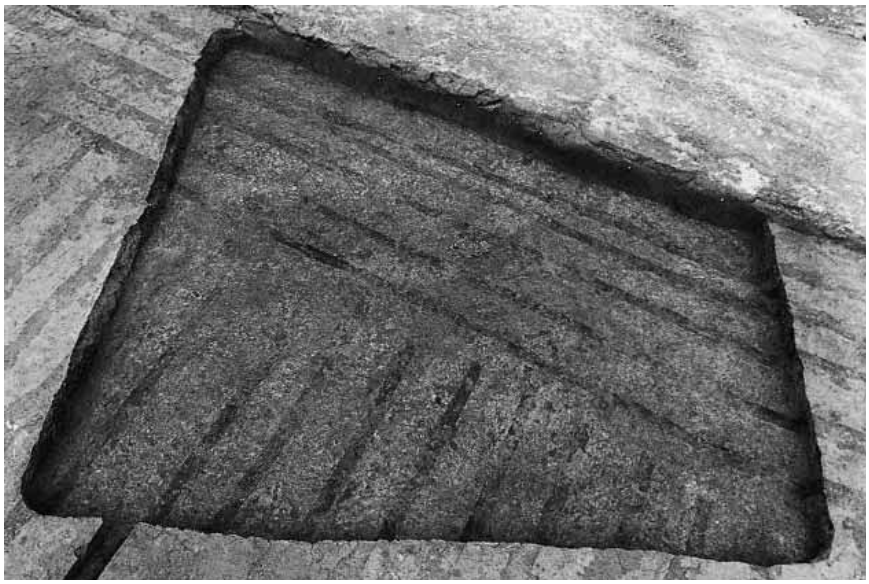


第13号住居跡
完掘状況



第13号住居跡
遺物出土状況

第13号住居跡
遺物出土状況



第14号住居跡
完掘状況

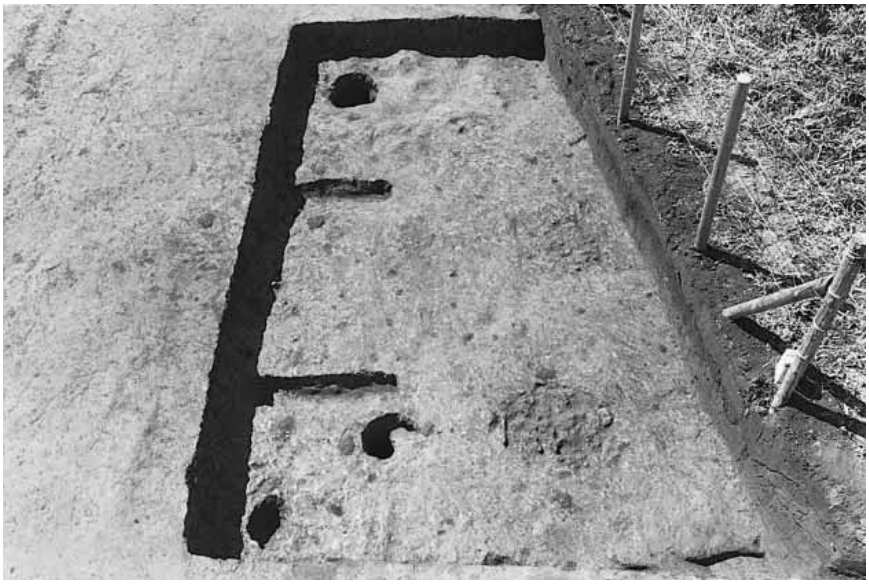
第14号住居跡
遺物出土状況

第14号住居跡炉2
遺物出土状況

第１５号住居跡
完　掘　状　況

第１５号住居跡
遺物出土状況

第15号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況



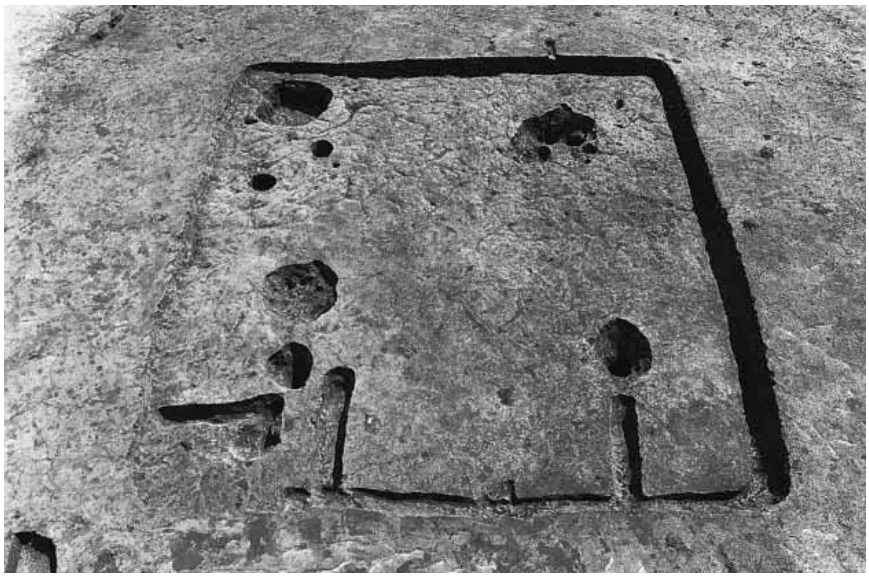
第16号住居跡
完　掘　状　況

第17A号住居跡
完　掘　状　況

第17B号住居跡
出入口施設
土　層　断　面

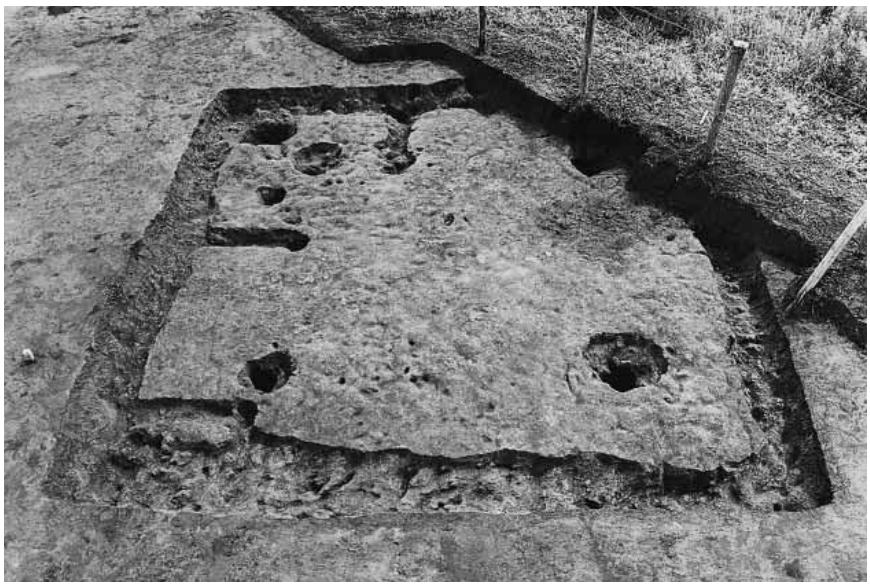
第18号住居跡
完　掘　状　況

第18号住居跡
遺物出土状況



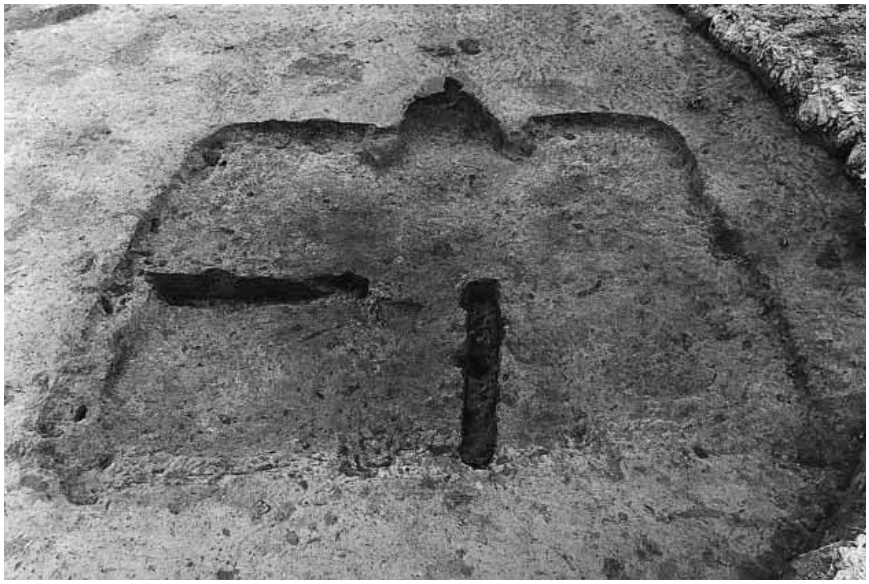
第19号住居跡
完　掘　状　況

第19号住居跡
遺物出土状況



第20号住居跡
完掘状況

第20号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況



第1号住居跡
完掘状況

第2号住居跡
完掘状況

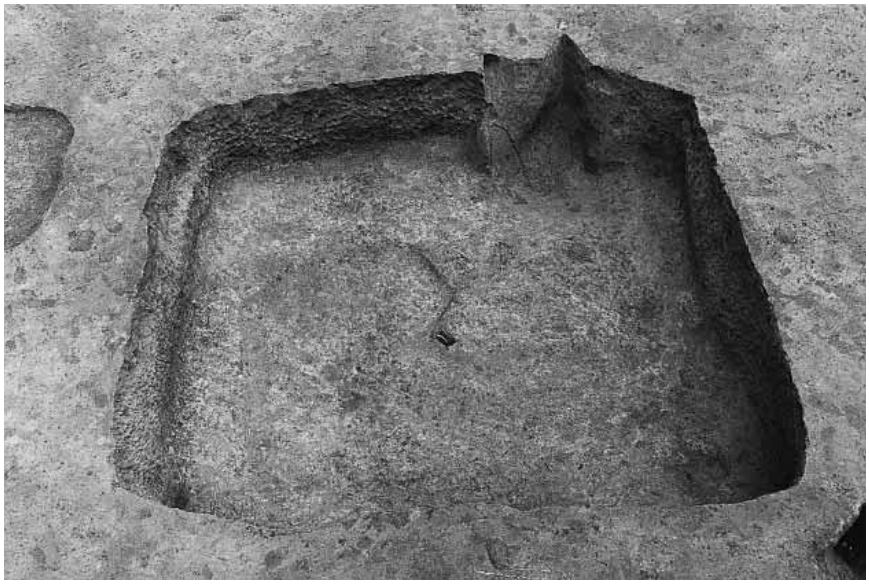
第2号住居跡竈
遺物出土状況

第３号住居跡
完　掘　状　況

第４号住居跡
完　掘　状　況

第４号住居跡Ｐ３
土　層　断　面

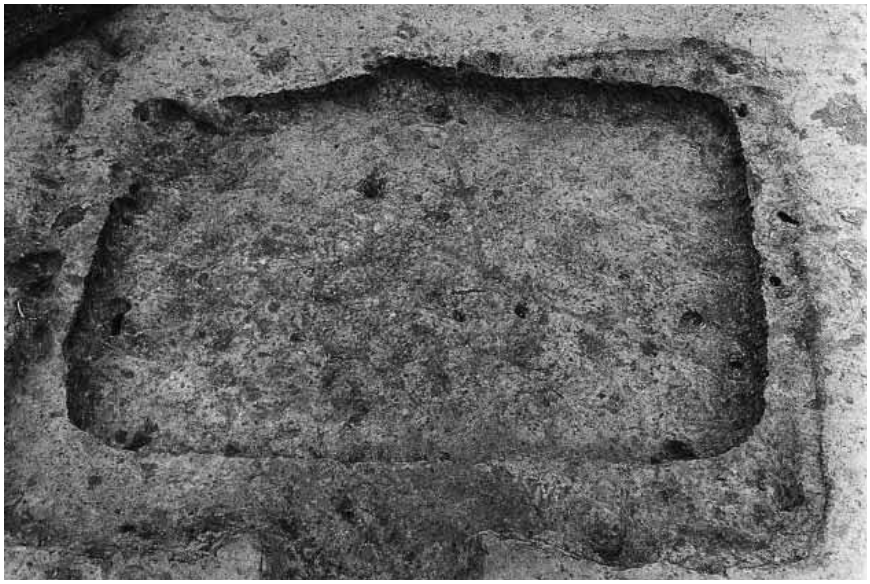
PL10



第５号住居跡
完　掘　状　況

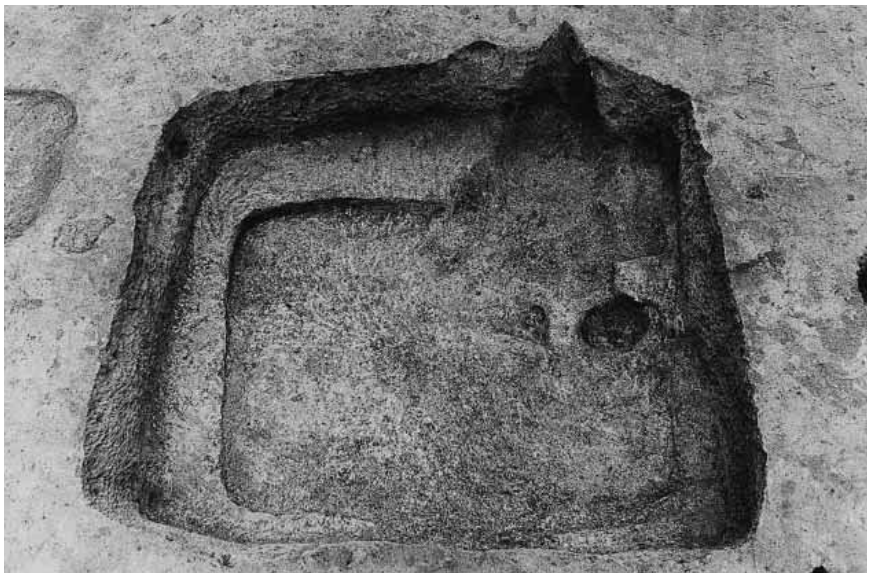
第５号住居跡
遺物出土状況

第６号住居跡
完　掘　状　況



第 7 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第 8 号 住 居 跡
完 掘 状 況



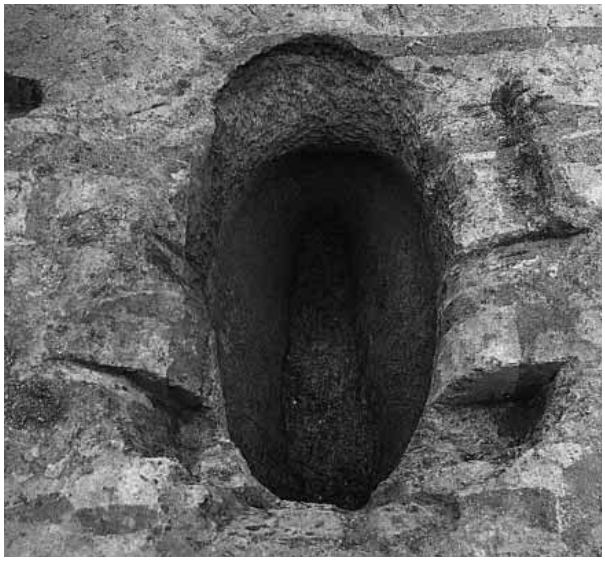
第 9 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第Ⅰ区調査終了状況

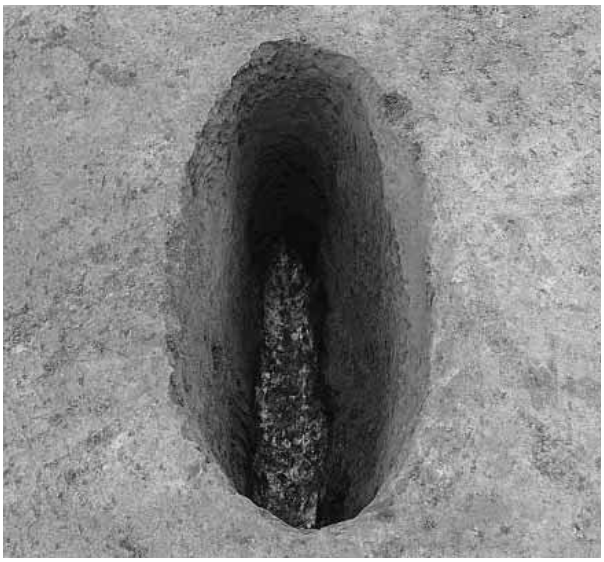
第１号陥し穴完掘状況

第２号陥し穴完掘状況

第４号陥し穴完掘状況

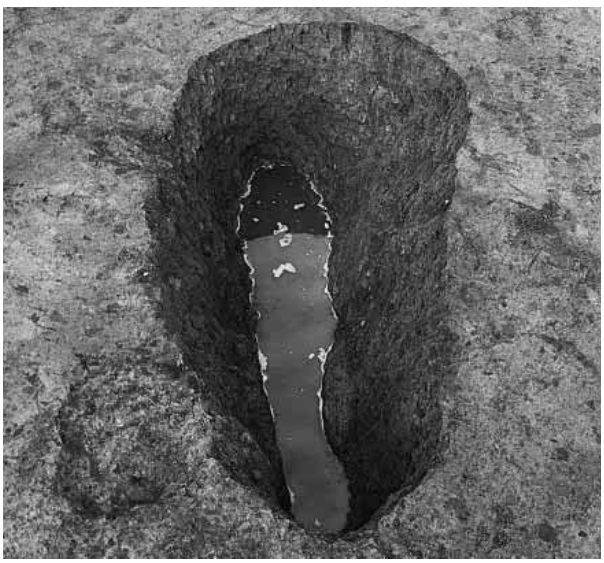


第５号陥し穴完掘状況

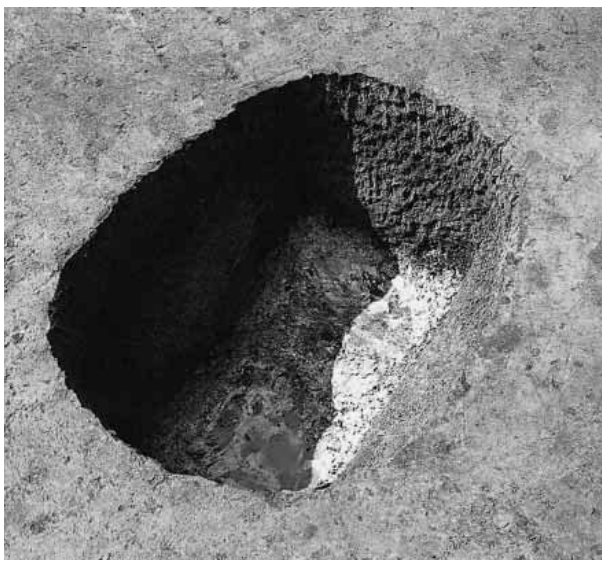


第８号陥し穴完掘状況

第10号陥し穴完掘状況



第13号陥し穴完掘状況



第17号陥し穴完掘状況

第59号土坑遺物出土状況

第113号土坑遺物出土状況

第138号土坑遺物出土状況

第４号溝跡遺物出土状況

第２号墓壙遺物出土状況

G3j6区遺物出土状況

SI 13－16

SI 16－32

SI 15－23

SK 130－83

SI 20－46

SI 19－37

SI 13－7

SI 19－44・45

SI 16－33

第13・15・16・19・20号住居跡，第130号土坑出土遺物

SD 4－85

SI 13－12

SI 15－24

SI 17A－34

SI 11－3

SI 15－25

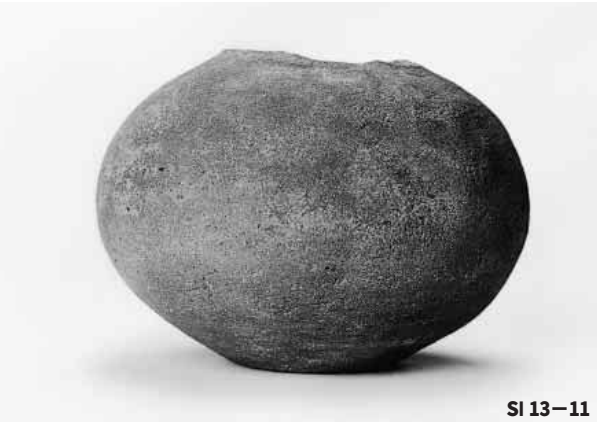
SK 113－79

第11・13・15・17A号住居跡，第113号土坑，第４号溝跡出土遺物

SI 13－10

SI 19－38

SK 137－84


SI 13－11

SK 113－81

SI 19－42

SI 19－43

第13・19号住居跡，第113・137号土坑出土遺物

SI 15－26

SI 14－21

SI 15－27

SI 14－22

SI 15－28

SK 59－77

第14・15号住居跡，第59号土坑出土遺物

SI 3−62

SI 2−53

SI 3−58

SI 2−54

SI 5−64

SI 5−65

SI 5−67

SI 2−56

第２・３・５号住居跡出土遺物

SI 4－63「大」

SI 3－59

外－88

SI 2－55

SI 3－61

SI 3－60

第２・３・４号住居跡，遺構外出土遺物

SI 20－Q10～15・21・22・剥片

SI 16-Q2　SI 17-Q13　SI 19-Q9　SI 18-Q5

SI 20-Q14　SI 20-Q15　SI 19-Q6

G1，Q1・4・7・10～13・21・22

外-Q20

SI19-Q8

第４号墓壙-M2～6

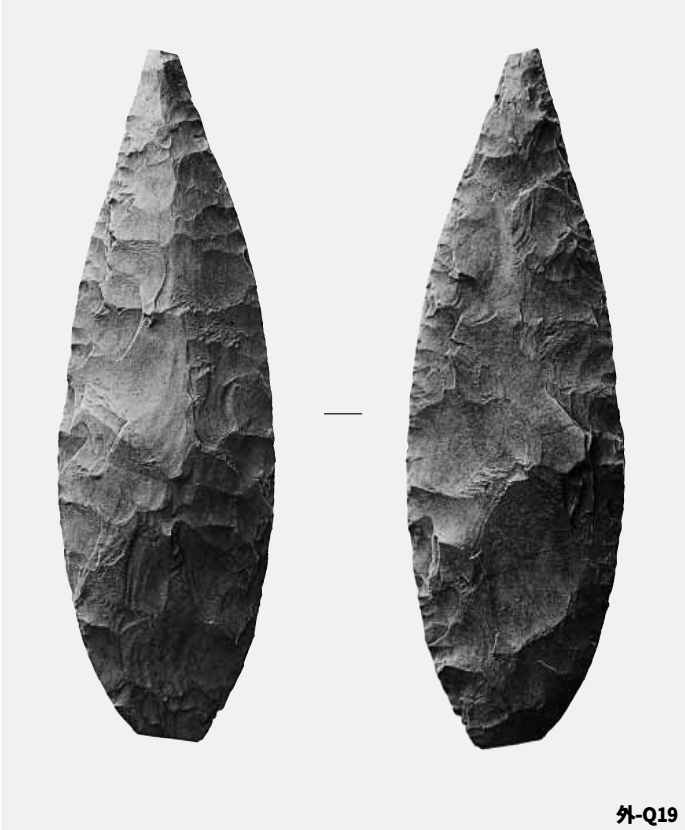
住居跡，墓壙および遺構外出土遺物

PL22

外-Q17

外-Q18

SI 5-68


外-Q19

SI 1-TP1

外-TP2

外-TP3

外-TP4

外-TP5

外-TP6

外-DP1

住居跡および遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第234集

中内西ノ妻遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成17(2005)年３月22日　印刷
平成17(2005)年３月25日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
ＴＥＬ　029－225－6587

印刷　株式会社　あけぼの印刷社
〒310-0804　水戸市白梅１丁目２番11号
ＴＥＬ　029－227－5505